PHILIPY '07

第8回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」報告書

Report of the 8th
"International Participation Project"
in the Philippines.

地域文化研究センター
International Center for Regional Studies

天理大学
Tenri University

DVD付

冊子名『Philipy』とは、“Philippines”と「博愛、人類愛」を意味する“Philanthropy”を組み合わせた、「フィリピン大好き」を意味する造語です。

サンタローサ市位置

目次

はじめに……4
募集要項……5
参加者名簿……6
スケジュール……7

報告書刊行に寄せて……9

天理大学学長　橋本 武人……10
天理大学地域文化研究センター長　住原 則也……11
天理大学後援会長　江川 嘉忠……12
天理大学国際文化学部長　松尾　勇……13
天理大学体育学部長　湯浅　晃……14
天理教東本大教会ｻﾝﾀﾛｰｻ出張所長　上田 和興……15
天理中学校教諭　米田 道治……16
国立民族学博物館外来研究員　辻　貴志……17
天理大学言語教育研究センター　小林 早百合・吉田 智佳……19

第1部　参加者感想……20

数のご守護　住原 則也……21
国際協力の種　澤山 利広……22
フィリピンに学ぶ　椋野 和子……23
フィリピンプロジェクトに参加して　椋野まゆみ……26
フィリピンの子ども達　椋野 美和……27
音楽を通しての国際交流　池崎 未幸……29
一生の宝物!!　久保 真百子……31
Sta.Rosa に行ってみて　河野 素和……33
フィリピン人って温かい!!　佐藤 宮子……35
一生忘れることのできない夏休み　座安 可那子……37
「知ったか」の自分と出会った旅　竹平 弥生子……40
タガ～イツ!!　福西 穂高……42
フィリピンに行って　前田 紗知……44
価値観を変えられた 12 日間　松井 さきの……46

フィリピン滞在を通して　村田 明彦……48
出会い、そして成長　森　雄飛……51

第2部　English Message……53

Participant's impressions ……54
Message from our host families ……65
Message from Mrs. Noemi Kimoto ……67

第3部　活動記録……68

事前研修……69
滞在日誌……73
リコーダー指導……85
交流班レポート……91
スポーツ班レポート……93
料理班レポート……95
マザーテレサのミッション施設訪問レポート……97
公衆衛生ワークショップ……98
糖尿病予防セミナー……103
帰国後の活動……104

第4部　資料……106

フィリピン共和国概要……107
発表会式次第……118
寄贈物品一覧……109
公衆衛生ワークショップ用チラシ……110
よく使ったタガログ語集……111
新聞記事など……112
活動資料……113
お礼状……114
歌（またあえる日まで）……115

編集後記……116

はじめに

天理大学地域文化研究センター主催の第8回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」は、2007年8月18日～29日の12日間の日程でフィリピン共和国サンタローサ市を拠点に活動を行い、後半の2日間は首都マニラに場を移しました。

本プロジェクトの主な活動は、サンタローサ市内のシナルハン小学校において4、5年生にリコーダーの指導を行うものでした。また、子ども達と折り紙や絵を通しての文化交流、サンタローサ科学技術学校でのスポーツ交流などで国際理解に努めました。28日には活動場所をマニラに移し、マザー・テレサのミッション施設 "Formation House, Missionaries of Charity" を訪問し、最後の「生」を生きる人々の姿を通して、「人間はいかに生きるべきか」について考えさせられました。

この報告書は本プロジェクト参加者によって、活動の総まとめとして、準備、現地活動、帰国後の活動の足跡を記したものです。この活動を思い出に残すだけでなく、これから先の活動に繋げていくため精一杯制作しました。お手にとってご覧になっていただければ参加者一同、大変嬉しく思います。

第8回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」参加者一同

天理大学地域文化研究センター（ICRS）

第8回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」

募　集　要　項

本プロジェクトは、「教学協働」と「社学連携」を志向し、フィリピンでのボランティア活動やホームステイなどを通じて、国際協力のあり方を考え、帰国後の諸活動の契機とすることを目的としています。

１．場　　所：　フィリピン共和国ルソン島ラグーナ州サンタローサ市およびマニラ首都圏
２．期　　間：　８月１８日（土）～２９日（水）〔１１泊１２日〕
３．参 加 費：　１０万円（航空券代金、宿泊費、食費、フィリピン国内移動費などを含む）
　　※ その他の費用については、天理大学後援会からの参加補助金などで賄われます。
４．募集人員：　１５名程度（最低催行人員４名）
５．募集資格：　天理大学学生・院生〔全学部・大学院が対象です〕
６．スケジュール（予定）：

８月１８日(土)	関西国際空港集合　→　マニラ国際空港　→　サンタローサ市
１９日(日) ｜ ２６日(日)	***小学校でのリコーダー指導、高等学校 or 大学でのスポーツ交流*** **&** ***ボランティア活動、ひのきしん、ホームステイなど***
２７日(月)	サンタローサ市　→　マニラ首都圏
２８日(火)	***マザーテレサ施設での福祉ボランティア***
２９日(水)	マニラ国際空港（解散）→ 関西国際空港

７．申し込み：　５月３０日(水)午後５時必着で「申込書」をICRSに持参（FAXあるいは郵送も可）して下さい。※申込書の内容をメールで送信いただいても結構です。
８．参加者の決定：　申込書の内容と面接で選抜します。結果は原則e-mailで通知します。
９．参加手続き・注意事項など：
　ａ．本プロジェクトは「社学連携」を標榜している関係から、別枠で募集する天理大学学生・院生以外の方も参加します。
　　本学在校生以外のよふぼくの方は「募集要項（よふぼく用）」を熟読の上、応募してください。
　ｂ．事業の目的と訪れる場所柄、宿泊施設、水廻り、トイレ事情等、快適な水準に及ばない所があるかもしれません。サンタローサ市での宿泊（９泊）は、現地の一般家庭でのホームステイです。
　ｃ．選抜され、参加を希望する方は、６月１１日(月)までに所定の方法で参加費を納め、必要書類を提出してください。
　ｄ．パスポート取得費、日本国内交通費、海外旅行傷害保険などの費用は、参加者負担とします。
　ｅ．海外旅行傷害保険（死亡･後遺障害、治療・救援費用、疾病死亡は共に１千万円以上、賠償責任１億円以上、携行品30万円以上、航空機委託手荷物遅延10万円以上）への加入は必須です。
　　クレジットカードに付帯されている保険以外に別途加入して下さい。
　ｆ．覚書を交わします。覚書の各条項に違反する行為があった場合、参加資格を取り消すことがあります。
　　また、未成年者は親権者の同意書を提出することが求められます。
　ｇ．天理大学学生・院生は派遣前研修&作業（６月９日（土）の終日、及び６月１１日（月）～７月９日（月）までの毎週月曜日&木曜日午後６時から８時まで）への参加が義務付けられます。アルバイトをはじめ万障繰り合わせて必ず出席してください。
　ｈ．出発前の企画段階からの積極的な参画が望まれます。
　ｉ．国際情勢の影響により事業を中止する場合がありますので、あらかじめご了承ください。
　ｊ．派遣後には参加レポートの提出、および文集（報告書）の作成が義務付けられています。

第8回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」参加者名簿

■引率者

1．住原　則也　　地域文化研究センター長、国際文化学部教授

2．澤山　利広　　地域文化研究センター専任研究員、国際文化学部准教授

3．椋野　和子　　地域文化研究センター共同研究員、天理高校第二部介護福祉科看護師

■一般

1．椋野 まゆみ　　天理教敷島大教会よふぼく

2．椋野　美和　　天理教敷島大教会よふぼく、神戸大学２年

■天理大学生

1．村田　明彦　　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース４年(リーダー)

2．座安 可那子　　体育学部体育学科スポーツ学コース３年(サブリーダー)

3．池﨑　未幸　　人間学部人間関係学科生涯教育専攻４年

4．久保 真百子　　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース３年

5．河野　素和　　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科ブラジル語コース４年

6．佐藤　宮子　　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科ドイツ語コース３年

7．竹平 弥生子　　臨床人間学研究科１年

8．福西　穂高　　国際文化学部アジア学科中国語コース４年

9．前田　紗知　　国際文化学部アジア学科中国語コース２年

10．松井 さきの　　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース３年

11．森　雄飛　　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース１年

参加者総数16名（男：６、女：10）

～現地活動スケジュール～

	内　容	日　時	内　容
8/18(土)		8/24(金)	
6:15	天理大学前集合（天理駅経由）	6:30	東本サンタローサ出張所集合
9:55	関西空港発（PR407）	7:00	シナルハン小学校集合
13:20	マニラ国際空港着	8:00	リコーダー指導
16:00	サンタローサ着	11:30	昼食
16:30	オリエンテーション	15:00	ミニコンサート(発表会)
18:00	夕勤	18:00	夕勤→各自ホームステイ先へ（夕食はHF）
19:00	HFとの顔合わせ→各自ホームステイ先へ		
8/19(日)		8/25(土)	
8:00	朝勤（朝食はHF）	8:00	朝勤（朝食はHF）
8:30	ミーティング、活動準備	10:00	サンタローサ→タガイタイ・タール湖訪問
11:30	昼食	12:00	昼食→サンタローサ
13:00	ミーティング、活動準備	16:00	HFさよならパーティー準備
18:00	夕勤→各自ホームステイ先へ（夕食はHF）	18:00	夕勤→各自ホームステイ先へ
8/20(月)		8/26（日）	
8:00	朝勤（朝食はHF）	8:00	朝勤（朝食はHF）
10:00	公衆衛生ワークショップ		HFさよならパーティー準備
12:30	昼食	11:00	東本サンタローサ出張所月次祭
14:00	ミーティング、活動準備	12:00	糖尿病セミナー→HFさよならパーティー
18:00	夕勤→各自ホームステイ先へ（夕食はHF）	18:00	夕勤→各自ホームステイ先へ（夕食はHF）
8/21(火)		8/27(月)	
6:30	東本サンタローサ出張所集合	8:00	朝勤（朝食はHF）
7:00	シナルハン小学校集合	10:00	サンタローサ→マニラ
8:00	リコーダー指導	12:00	昼食
11:30	昼食	13:00	天理教フィリピン出張所表敬訪問
13:00	ミーティング、活動準備	15:00	チェックイン（マニラ・パビリオン・ホテル）
18:00	夕勤→各自ホームステイ先へ（夕食はHF）	18:00	夕食
		19:00	毎日新聞マニラ支局訪問
8/22(水)		8/28(火)	
6:30	東本サンタローサ出張所集合	10:00	ホテルロビー集合（朝食は各自）
7:00	シナルハン小学校集合		イントラムロス（世界遺産）訪問
8:00	リコーダー指導	13:00	昼食
11:30	昼食	15:00	Formation House, Missionaries of Charity
13:00	日比児童絵画交流、折り紙・玩具作り教室	19:00	夕食（活動の振り返りを兼ねて）
18:00	夕勤→各自ホームステイ先へ（夕食はHF）		
8/23(木)		8/29(水)	
6:30	東本サンタローサ出張所集合	10:00	朝食
7:00	シナルハン小学校集合	12:00	ホテル→マニラ国際空港
8:00	リコーダー指導	14:30	マニラ国際空港発（PR408）
11:30	昼食	17:30	関西国際空港着→解散
14:00	サンタローサ科技高校でのスポーツ交流		
18:00	夕勤→各自ホームステイ先へ（夕食はHF）		

～活動日程～

シナルハン小学校＆サンタローサ科学技術高校

日時	グループ A（6 人）	グループ B（7 人）
8/21(木)		
08:00 － 09:00	5 年生　1 組（児童 50 人）	4 年生　1 組　（児童 50 人）
09:15 － 10:15	5 年生　2 組（児童 50 人）	4 年生　2 組　（児童 50 人）
10:30 － 11:30	5 年生　3 組（児童 50 人）	4 年生　3 組　（児童 50 人）
11:30 － 13:00	昼食	
13:00 － 18:00	ミーティング、明日の授業の準備 etc…	
8/22(水)		
08:00 － 09:00	5 年生　1 組（児童 50 人）	4 年生　1 組　（児童 50 人）
09:15 － 10:15	5 年生　2 組（児童 50 人）	4 年生　2 組　（児童 50 人）
10:30 － 11:30	5 年生　3 組（児童 50 人）	4 年生　3 組　（児童 50 人）
11:30 － 13:00	昼食(先生方を招いての親睦会)	
13:30 － 14:25	文化交流の準備	
14:35 － 15:30	折り紙作り　3 年生 1 組（児童 50 人） 絵画交流　3 年生 3 組（児童 50 人）	玩具作り 3 年生 1 組（児童 50 人） 絵画交流 3 年生 3 組（児童 50 人）
8/23(木)		
08:00 － 09:00	5 年生　1 組（児童 50 人）	4 年生　1 組　（児童 50 人）
09:15 － 10:15	5 年生　2 組（児童 50 人）	4 年生　2 組　（児童 50 人）
10:30 － 11:30	5 年生　3 組（児童 50 人）	4 年生　3 組　（児童 50 人）
11:30 － 12:30	昼食	
14:00 － 16:00	サンタローサ科学技術高校でのスポーツ交流会	
8/24(金)		
08:00 － 09:00	5 年生　1 組（児童 50 人）	4 年生　1 組　（児童 50 人）
09:15 － 10:15	5 年生　2 組（児童 50 人）	4 年生　2 組　（児童 50 人）
10:30 － 11:30	5 年生　3 組（児童 50 人）	4 年生　3 組　（児童 50 人）
11:30 － 13:00	昼食	
13:00 － 15:00	発表会の準備、出し物練習 etc…	
15:00 － 17:00	発表会	

報告書刊行に寄せて

天理大学学長　橋本　武人‥10
天理大学地域文化研究センター長　住原　則也‥11
天理大学後援会長　江川　嘉忠‥12
天理大学国際文化学部長　松尾　勇‥13
天理大学体育学部長　湯浅　晃‥14
天理教東本大教会サンタローサ出張所長　上田　和興‥15
天理中学校教諭　米田　道治‥16
国立民族学博物館外来研究員　辻　貴志‥17
天理大学言語教育研究センター　小林早百合・吉田　智佳‥19

第８回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」報告書刊行に寄せて

天理大学学長　橋本　武人

天理大学の「国際参加プロジェクト」は、建学の精神の一環として唱導する「他者への献身」を国際的なスケールで実践し、よって本学の教育目標として掲げる宗教性と国際性を同時に涵養する教育課程である。

本プロジェクトは、2001年に大震災に見舞われたインド・グジャラード州への災害救援活動として始まった。これが３年間続けられた後、2004年にはフィリピンへ、2005年には中華人民共和国へと活動の舞台を移して実施された。昨年の2006年度は、地震と津波により大きな被害を受けたインドネシアのニアス島を中心に展開されるとともに、「フィリピン・プロジェクト06」と称する別動隊の活動がつけ加えられた。本年度は、いずれも２年続きの活動になり、インドネシアを第７回、フィリピンを第８回と数えることになった。本書は第８回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」の活動報告書である。

昨年の「フィリピン・プロジェクト06」は、恵まれない小学校の児童たちにリコーダーを贈呈して実際に演奏する技術を指導した2004年の活動を引き継いだもので、前回馴染みになったサンタローサ市の児童、生徒や住民たちとの交流だけでなく、天理教フィリピン出張所ならびに東本大教会サンタローサ出張所のご協力を得て、「ひのきしん」や「おたすけ」という「教学協働」の新しい活動を展開したところに特色があった。こうした過去２回の経験を踏まえた本年度は、ホウ酸団子や廃油石鹸の作り方などの環境保全や公衆衛生にかかわる技術指導も加えられて、現地の人々の実生活に役立てられ喜ばれた。

言葉も違えば習慣も異なる異文化圏の人々との共同作業や、ホームステイ先の家族との直接的な交わりを通して、学生たちは国際性を養う上で多くのことを学び、現地の人々に喜んでいただく「他者への献身」を通して、人をたすける心、宗教的な心性の涵養も可能になる。また、貧しくとも純真で屈託のない子ども達との交わりは、何かにつけて恵まれている自己自身を省みる機会となり、物質文明が置き去りにしてきた心の豊かさを取り戻す契機ともなった。

今はまだ本プロジェクトの渡航先も限られ、参加人員数にも制限があるが、おいおい活動の範囲を世界の各地に広げて、一人でも多くの学生諸君が参加できるようにしていきたい。終わりに、この度の「国際参加プロジェクト」の計画実施に携わった教職員、絶代なご支援ご協力を賜った関係機関各位のご厚情に対して、深甚なる敬意と謝意を表します。

続・歴史を刻むということ

地域文化研究センター長　住原 則也

今年も「国際参加プロジェクト」に新しい歴史の１ページが加わることになりました。この記録文集が完成したことをもって、新しい１ページとなります。歴史を振り返れば、「建学の精神を国際的な舞台で」、という方針から、新世紀が明けた 2001 年から開始され、インド（2001～2003）、フィリピン（2004）、中国（2005）で実施され、昨年 2006 年は新たな飛躍の年となり、年２回体制（フィリピンとインドネシア）が開始しました。そして、今年もインドネシアとフィリピンで実施されましたが、昨年とどちらも同じ場所でありながら、昨年とは違った活動が企画、準備され、ほぼ予定通り現地で実行されました。多くの人々の心が寄り集まり一つとなった成果だと思われます。

このプロジェクトは、三段跳びになぞらえてみることができます。まず２ヶ月以上にわたる事前準備・研修（ホップ）、２週間程度の現地活動（ステップ）、そして、じっくり時間をかけて作成する記録文集（ジャンプ）、の三段階です。ホップ前の助走段階では、当センターのスタッフが事前に２度３度と現地に赴き、受け入れ先の学校やホームステイ先の人々と話し合いを重ねています。したがって、ステップにあたる現地での活動だけが「国際参加プロジェクト」ではありません。それぞれの段階で学内外の多くの方々にご支援を受けることで、毎年全く新鮮な活動となっています。費やした時間と労力に相応しい心の財産が出来、この記録文集に凝結されているものと考えます。

この文集は、関わった多くの人々への感謝の意味を込めたものであり、同時に、後輩の参考とするための新しい歴史の記録であり、かつ、活動に参加した人が、これを見るたびに記憶を新たに呼び起こすものです。すべての体験や心の歴史を限られた紙面に入れ込むことはできないので、この文書を見ることで、書ききれなかったことや、眠っていた記憶をも呼び覚ますきっかけにもなるものです。歴史は記録されることで新たな歴史の出発点になるものと考えます。

フィリピンでのプロジェクトは、特に教学協働、社学連携、といった大学を取り巻くコミュニティーとのつながりを意図して行なわれています。マニラ首都圏南方のサンタローサ市には天理教東本大教会の出張所が置かれていますが、その地域の小学校でリコーダーを教えたり、地域の人々の生活上の衛生や健康に関わるワークショップやセミナーを行なうなど、地域密着型の活動が、出張所スタッフの方々の細やかなご支援のおかげで成功裏に実施できました。また特筆すべきことは、参加学生も社会人もクーラーもない暑い環境でホームステイし、毎日早朝から夕方まで活動していながら、誰一人として故障者が出なかったという幸甚です。一人ひとりのこころがけもさることながら、親神・教祖・御霊に御見守りいただいたものと感謝しています。大学内外からご寄付いただいたリコーダーなど、現在も彼の地の教育の場で有益に活用されていますこともご報告方々、この紙面をお借りしてお礼申し上げたいと思います。

第８回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」報告書刊行に寄せて

後援会長　江川　嘉忠

今年の日本の夏は例年にない猛暑となり、秋ごろまでおかしな気候が続いた。それと同じように、世界の至るところで自然災害が発生し、テレビでは山火事やサイクロンなどによる被害を伝えるニュースが流れている。世界の気象が少しずつ狂い始めているとしたら、これからも自然災害の被災地への援助というものは増加してくるかもしれない。天理大学地域文化研究センターが企画・運営している「国際参加プロジェクト」は、そのような被災地で活動が始まったという。

フィリピンでの活動も、1991 年に発生した 20 世紀最大の火山噴火の被災地となったアンヘレス市で 2004 年に始まった。

今年のプロジェクトは、昨年の成果を受けて、サンタローサ市のシナルハン小学校の児童にリコーダーを指導した。使われたリコーダーは、全て日本全国から寄せられたものである。４年生と５年生の各３クラス（計 300 名）にそれぞれ『かえるの歌』と『エーデルワイス』を指導した。当初予定していた練習日が１日減の４日になったものの、参加者のチームワークと創意工夫によって対象クラスの児童が曲をマスターし、最終日には感動的なミニコンサートを開催することができた。サンタローサ市内の初等中等学校の音楽教育統括を兼ねる同校校長からは、短期間に顕著な教育成果を挙げたことへの謝意が述べられ、次年度の来訪を打診された。また、３年生を対象に折り紙、ストローとんぼ作りを指導した。リコーダー、文具の提供者には現地からお礼のハガキを送付するなど多岐に亘る活動を展開した。

また、マニラではマザーテレサ・ミッション施設のホスピスにおいてボランティア活動を行った。派遣前研修では国内のホスピスにお勤めの医師・看護師の方々にお話をうかがい、いかに最期の生を生きるかを考える機会を持った。ミッション施設のシスターからは入所者との対話を勧められ、参加者は積極的に入所者とのコミュニケーションに努めた。日本人シスターからは同施設の活動と貧困地域の状況についての説明を受け、質疑応答を通じてカトリック聖職者の奉仕精神に触れることができた。「国際参加プロジェクト」の目的のひとつである「教学協働」を考えるヒントを得たに違いない。

これからも天理大学の学生たちがこのような機会を得られるよう、後援会としてもできる限り支援をしていきたいと考えている。

第８回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」報告書刊行に寄せて

国際文化学部長　松尾　勇

今夏実施されました第７回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」ならびに第８回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」が大きな成果を挙げて無事終了いたしましたことはこの上ない喜びです。

今年のフィリピンのプロジェクトでは、昨年同様に参加学生たちはフィリピン人の一般家庭でのホームステイを体験しました。言語や風俗・習慣が異なるコミュニティの中での様々な人々との触れ合いを通して、各自が新鮮な発見をするとともに貴重な体験を積んだに違いありません。また、サンタローサ市のシナルハン小学校の児童へのリコーダーの指導や現地の高校でのスポーツ交流に心地よい汗を流されたとのことですが、このような人的交流は、参加学生の心の成長に大きく寄与したことでしょう。

これらの継続的な活動の成果は本文集の別の項でも述べられていますが、今回特筆すべきことは、過去２回のフィリピンでの草の根活動の成果を発展させたサンタローサ市における環境保全参画型開発にも取り組んだことです。地域文化研究センター共同研究員の椋野和子先生の御指導により、参加学生諸君による食用廃油を原料にした石鹸とゴキブリ駆除用ホウ酸ダンゴづくりのワークショップ、並びに糖尿病予防を目的とした生活改善セミナーが開催されました。ワークショップでは、ヘルスワーカーをはじめ、約 80 名の参加を得、天理教東本大教会サンタローサ出張所の月次祭に併せたセミナーには現地では糖尿病罹患者も多いことから関心も高く、120 名の聴衆を集めたという報告がなされています。天理大学、および広くは天理学園のノウハウとネットワークを活かした国際協力の充実を認めることができる点で新たな展開があったと確信いたします。

本文集からは今年度の活動を通して「国際参加プロジェクト」のこれまでの成果と課題を理解し、少しずつ内容を向上させようという参加者の積極的かつ意欲的な姿を読み取ることができます。このことは本プロジェクトの黎明期が過ぎたことを物語っております。フィリピンでの活動が今後さらに発展することを期待しています。

第８回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」報告書刊行に寄せて

体育学部長　湯浅　晃

地域文化研究センターが企画・実施されましたインドネシアならびにフィリピンへの２回の「国際参加プロジェクト」が、今年度も成功の内に無事終えられましたことを、先ずもってお祝い申し上げますとともに、センターの継続的な活動に対しまして敬意を表します。参加した学生たちも、異国の地で文化の違いを乗り越えながら生活し、インドネシアとフィリピンの人びとのために汗を流すことによって、本学の最も重要な教育目標である「他者への献身」を心の核とした「天理スピリット」の体得を成し得てきたのではないかと思います。

今回のプロジェクトは、インドネシアでは昨年に引き続き地震災害の復興支援として、小学生たちに防災教育をすること、またフィリピンでは国内においてリコーダーを集め、それを小学生たちに教えるといった教育が主な活動内容であったと聞いております。　双方のプロジェクトにおいて、今年は体育学部の学生が参加したという喜ばしい報告を受けました。これまで、体育学部の学生はあまりこのプロジェクトに参加することがなく残念に思っておりました。しかし、今年のプロジェクトでは、リーダーを務めたり、日本文化の一部として空手の形を演じたりと、プロジェクトの活動だけではなく、体育学部で培った経験に基づいた活動もしてきてくれたのではないかとうれしく思います。

他の大学ではスポーツや武道を介した国際交流、国際協力の教育プログラムが有効に機能していると聞きます。これからも、体育学部の学生たちには、自分たちが慣れ親しんできたスポーツをするだけでなく、そのスポーツを海外の子ども達に教えていく、あるいはスポーツをする楽しさを共有していくことにより、新たな自己を発見し、「天理スピリット」を内外へ広めていっていただければと思います。そして、本学においても、地域文化研究センターと体育学部との協力により、そのような機会を増やしていけたらと願っております。

「国際参加プロジェクト」は、「他者への献身」の心を核とした「天理スピリット」の体得の大切さを内外へアピールしていく意義のある教育プログラムであるといえます。全学的に大学改革を模索している今、「他者への献身－人間理解－国際協調－スポーツ」を貫く、学部の枠を越えた本学独自のプログラムやプロジェクトが是非とも必要であると考えています。

人生の軸足につながる経験であってほしい

天理教東本大教会サンタローサ出張所長　上田　和興

2007年も又、サンタローサにお越し頂き有難うございました。3回目となり、来て下さる方も、受ける方も、全ての面でだんだん上手になってきたように思います。学生諸氏にとっては欧米と異なり、日々の生活に慣れるのにご苦労されたと思います。私も、ここに来るようになって12年になりますが、未だにこれは具合が悪いと思う事がいくつかあります。しかし、同じ人間が食べる事、する事ですから、誰でも同化出来るのだという信念を以って接すれば、大方は出来るようになります。言葉も、やや不自由な中に、皆様が多くの人々と親しくなられ小学生とも心を通じ合わせることの出来る事は尊い経験であると信じます。

天理教のご本席・飯降伊蔵様が、教祖が現身をおかくしになられた直後、そのお口を通して出た最初の言葉は「さあへろっくのぢにするで」でありました。天理大学で学ぶ者はこの言葉に軸足を置けば仕事であれ、布教であれ、きっと立派な働きが出来ると信じます。

どこであろうと、どんな条件であろうと、そこに人が居る限り社会があり、諸活動があります。そして、どこの誰であろうと、そこに行けば、人々と心通じ合わせ、少しは「ろっくのぢ」にさせて頂くお手伝いができると思います。この言葉は、勿論単なる平等というのではありません。人間の本質（魂）には全く高低がないのであり、力（権力）ある者が上から弱者を助けて平等にするということとは全く異なるのであって、一れつ兄弟としての心情で平らな社会を共生することだと思います。天理大学地域文化研究センターの活動に参加された学生諸氏が、このささやかな体験でありましょうが、異質な経験を心の成人の糧にされて洋々たる人生を歩んで下さることを期待いたします。

終りに、受け入れ側として、足りない事の多々あったことをお詫び申し上げ、今後、もっと努力を重ね、勇気をもって、幅広い活動に対応できるように頑張ってまいります。又、大学側からのご指導・ヒントも頂きたいと考えています。

みなさん、ありがとう

天理中学校音楽教諭　米田 道治

私にとっては今回が二度目となる「リコーダー研修会」だったのですが、楽しくやらせてもらうことができました。今だから言えるのですが、一回目のときは、前回と「同じパターン」の内容を考えていました。みなさんの目にどう映ったのかはわかりませんが、実は前回と勝手が違うことに、大いに焦りながら、戸惑いながらの一時間でした。

中学生を相手にしての授業では思うように進みません。「何のために練習をするの？」という目的が曖昧だからです。

しかし、「目的」があると頑張ることができる、ということを前回の研修でも感じましたが、今回も全く同じでした。小学校や中学校ではあまり練習してなかったような人もいましたが（失礼！）、一生懸命に練習に取り組んでくれた姿、練習して吹けた時の嬉しそうな笑顔が忘れられません。フィリピンの子ども達に教えるのは大変だっただろうと察します。でも「お兄ちゃんやお姉ちゃんのように吹けるようになりたい！」という「目的」を持つことができたから、そして、みなさんの一生懸命な気持ちが伝わったから、子ども達が頑張ることができたのだと思います。

フィリピンでの活動が終わって一区切りつきましたが、人に喜んでもらえることって素晴らしい経験です。卒業してからも何かの形でこの経験は生きてくるものだと信じます。

みなさんのおかげで音楽の持つ多くの可能性を改めて知ることができました。このような機会を与えてくださった先生、そして頼りない指導に付き合ってくれた皆さん、本当にありがとうございました。これからも共にがんばっていきましょう。

【コラム】①　　生活

現地での生活で驚いたことはたくさんある。まず、朝がとても早いということだ。朝 6 時くらいになるとトライシクルの音とラジオの大きな音が鳴っている。そして外では、朝食の食材を買いに行く主婦同士の井戸端会議が印象的だった。

シャワーは 1 日に 3 回ぐらい浴びるほどきれい好きで、毎日家の中をきれいに掃除している。しかし外では平気でポイ捨てをするという、家の中と外とのギャップ。これには非常に驚き、私達の中で問題意識が生まれた。

第８回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」報告書刊行に寄せて

国立民族学博物館　辻　貴志

去る７月から８月にかけて、天理大学の第８回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」の参加者を対象にタガログ語を指導する機会を得た。たてまえ上、「指導」といういかめしい表現を使い、言語の専門家でもないわたしが、しかも大学生や社会人を相手に、自分が日常的にやっと使える程度の語学力でもって、にわか仕込みの勉強会に挑んだわけだが、少なからぬ達成感をもってやりとげることができたと思う。

もちろん、そういう立場にみずからを置いたからには、タガログ語の文法やフィリピンに関する知識など、これまで自分が十数年かけてフィリピンから学んできたことがらについて少しでも参加者に分かつことができるよう、最大限の努力はしたつもりだと自負している。しかし、肝心なのは、わたしの指導によって、参加者がどの程度タガログ語やフィリピン事情を理解し、学習意欲がかきたてられたのであろうかということであり、さらに実際のフィリピンでの活動においてどの程度役に立ったのか、これらを突き詰められるといささか心許ない。

ここで白状しよう。冒頭で「少なからぬ達成感」をもったというのは、たしかに自分自身が与えられたタガログ語指導の機会を無事こなしたことを若干ふくむものであるが、むしろ参加者、とくに天理大学の学生たちのひたむきな学習態度とプロジェクトへの取り組みにたいする満足感と、それぞれゆたかな個性を持った彼ら彼女らがこれから行おうとするフィリピンでの活動に対する期待感のあらわれであった。

さて、話はおおきく脇道にそれる。先日、台湾で開催中の野球の北京五輪アジア地区最終予選の日本対フィリピン戦をテレビで視た。結果は、10 対 0 でフィリピンの 7 回コールド負けであった。しかし、パキスタン、香港、タイを破り、１次リーグを１位で通過したフィリピンは、日本、韓国、台湾につぐアジアの４強として注目されることとなった（試みに、あるインターネットニュースでフィリピンに関する記事を検索してみたところ、記事総数が 276 にのぼったが、その４割ほどがこのアジア地区予選をあつかっていた）。

なにを言いたいのかというと、ほとんどの人びとの関心はまず星野監督率いる野球日本代表に注がれていたであろうが、日本のテレビや新聞など大衆メディアがフィリピンを日本と対等な関係でおおっぴらにとりあげ、これほどフィリピンが肯定的に世間の注目を浴びたことが近頃あったであろうかということだ。むしろ、フィリピン国内の政情不安や邦人殺害、日本でのフィリピン人の不法就労など否定的な情報がほとんどであるし、また多くの日本人の間でフィリピンやフィリピン人に対するそうしたイメージが強いのではなかろうか。これはわたしの単なる思い込みにすぎないのだろうか。

話を本筋にもどすと、今回、フィリピンで交流活動に従事したみなさんは、その前後でどのようにフィリピンに対する自身の感覚や認識に変化が生じたのであろうか、機会があったらぜひたずねてみたい。

おそらく、みなさんはフィリピンという文化や価値観の異なる国に行き、そこで日本とは違うものごとやできごとに接したはずだ。そしてなにかを感じたはずだ。これまで見えていなかったものが見える、分からなかったことがわかるなどすると、人間はたいていショックを受ける。ショックとは、喜びであったり、驚きであったり、疑問であるかも知れない。つまり、ちがいを経験することで、人はいちようではないショックを受ける。そして、それらが人それぞれの課題となってくる。

このように文化や価値観のちがいを学び理解していこうとする考え方は、とくに文化人類学の分野で「文化相対主義」と呼ばれ、重要視されてきた。しかしながら、違いを学び理解するだけでは不十分であり、文化相対主義が直面している課題が深刻であり、その期するところの実現が容易でないことは、今日世界各地で起こっている民族・宗教紛争や差別・偏見、さらには飢餓や貧困、地球環境問題などの解決がいかに困難であるかということからもあきらかであろう。

しかし、「文化相対主義」的な態度を培い、世の不条理の是正や人びと相互の幸福に少しでもつなげていこうとすることは、少なくとも大学という学問の場に4年間身を置く（あるいは置いた）みなさんにとって、これからのおおきな課題のひとつとなってくるのではないだろうか。

最後に、今回の「国際参加プロジェクト」に参加したみなさんが、フィリピンでの活動経験をもとに、今後フィリピンからなにを学んでいくか、あるいはフィリピンや世界とどう向き合っていくか、さらにはよりよい生き方やくらしを創造していけるかなど、各人なりのきっかけを見出し発展させていってくれれば、わたしもみなさんに対してなにがしかの貢献ができたのではないかと胸をなでおろすことができそうである。

みなさんのさらなるご研鑽とご活躍をこれからも願ってやみません。

自分にできることでボランティア活動、そして国際協力へ

国際文化学部言語教育研究センター
小林早百合
吉田　智佳

「国際協力」、「ボランティア活動」—なんて聞くと、「大変そう」とか「私には無理」とか「そんな余裕ない」なんて思われる方がおられるかもしれません。確かに、海外に出かけて行ってボランティア活動をすることに対しては、時間的な問題、事前準備など、さまざまなことを考えると不安もあるでしょう。だからといって、「ボランティア活動をしない」、「国際協力ができない」という結論にはなりません。身近なところを見渡してみてはいかがでしょうか？ここでは、ちょっとした自分の関心事が国際協力につながったお話をご紹介します。

天理大学には「まなびーた」という異文化交流をはかる場があります。普段の活動は留学生に日本語や日本の文化について教えることです。その代わりに、留学生も日本人学生に自分の国の言語や、文化、慣習について教えます。もちろん、「ボランティア」活動です。お互いに知りたいことを教えあったりするわけですから、どちらにも負担にはなりません。母国の異なる者同士が教えあうのですから、これも小さな「国際」協力です。

2006年のある日、「まなびーた」の活動に参加しているメンバーが、「大学祭で、模擬店とか、バザーとか、何かみんなで一緒にやろうよ。」と言い出しました。「売り上げはどっかに寄付しよう！」と。大学祭では、みんな頑張ったのですが、経費を差し引くと、収益は4000円くらい…。でも、「気持ちだけは贈りたい」とインドネシアの子ども達のために使っていただくことにしました。2007年は、昨年の屈辱(?!)を晴らすため、学内でチャリティバザーを行いました。商品はちりめんのマグネットと、フェルトのアクセサリー類。もちろん、「まなびーた」メンバーの手作りです。慣れない手つきで紐を結んだり、ボンドをつけたり、ラッピングをしたり…。今回も一生懸命頑張りました。ご協力いただいた皆様のおかげで、今年は44,068円の収益です。そのお金と思いを地域文化研究センターに託し、インドネシアとフィリピンの子どもたちのためにお使いいただきます。

最初は自分が学んでいる言語を使ってコミュニケーションをとりたい。そんな自分の関心事から始まった活動です。それが留学生と語り合ううちに、視野が広がり、人のために何かしたくなった。最初から、「ボランティア活動をしよう」、「国際協力をしよう」と意気込んでいたわけではありません。ただ、自分が置かれた環境で、それぞれが、「今の自分に何かできることはないかなあ」と考えただけなのです。人間一人の思い、力では大したことはできません。しかし、二人、三人…と思いを同じくする者が集まれば、その分だけ大きな思い、力となることを私たち自身も「まなびーた」活動を通じて感じています。

「大変そう」とか、「私には無理」とか、「そんな余裕ない」なんて思わないで、「今、自分が置かれた環境で、無理なく、できることはないか？」を考えてみてください。得意なこと、好きなことがあれば、それを生かして「誰かのために何かできないかな？」と辺りを見回してください。あなたの温かい思いを待っている人がきっといます。

第1部

参加者感想

Our impressions

数のご守護　住原　則也…21
国際協力の種　澤山　利広…22
フィリピンに学ぶ　椋野　和子…23
フィリピンプロジェクトに参加して　椋野まゆみ…26
フィリピンの子ども達　椋野　美和…27
音楽を通しての国際交流　池崎　未幸…29
一生の宝物!!　久保真百子…31
Sta.Rosa に行ってみて　河野　素和… 33
フィリピン人って温かい!!　佐藤　宮子…35
一生忘れることのできない夏休み　座安可那子…37
知ったかの自分と出会った旅　竹平弥生子…40
タガ～イッ!!　福西　穂高…42
フィリピンに行って　前田　紗知…44
価値観を変えられた 12 日間　松井さきの…46
フィリピン滞在を通して　村田　明彦…48
出会い、そして成長　森　雄飛…51

数のご守護

国際文化学部　地域文化研究センター長　住原 則也

「数のご守護」ではなく、このプロジェクトでも「数々の」ご守護をいただいた。お世話になっている活動の拠点である天理教東本大教会サンタローサ出張所で、参加学生と朝夕のおつとめをつとめる時は、日々感謝とともに、いつも安心感を持つことができた。ただし日々の活動は決して、事前に腹積もりしていた通り順風満帆に推移するというわけではなく、途上国らしいと言い切っては失礼ながら、突然の予定変更など一方的に言われ、とまどいながらも臨機応変に対処せざるを得なかった。そのような中、まだ現地に到着して間もないころ、リコーダーなどを教える活動拠点のシナルハン小学校の先生に全校生徒数をお尋ねすると、すぐその場であらためて厳密に計算され、出てきた数が 1,589 人ということであった。実は、全く図らずも、日本で寄付を受け児童へのお土産として持参していたシャープペンシルの数が、そのまま 1,589 本であった。不思議が神、と言われるが、四桁まで一致されると、居合わせた学生諸君と顔を見合わせて自然に笑顔がこぼれた。

現地での活動を思い出すと、わずか十日余りの期間でありながら、私の目の行き渡る限りでも書ききれないほど膨大な出来事の連続であり、そのようなことを書くより、このフィリピンでのプロジェクトの持つ教学協働というコンセプトの持つ意義を、現地活動を通じて感じたままに書く方が自分にとっては自然に思われた。私自身、当初は天理教を中核とした宗教的な物理的・社会的な雰囲気の中で活動を行う、という程度に理解していた。それに間違いは無いと思われるが、今回全日程の最後の活動として、マニラ市内にあるマザー・テレサのミッション施設でせいぜい半日足らずであるが、市内の最貧民街から連れて来られたという身寄りの無い、体の不自由な人々と話をしたり、簡単な作業のお手伝いをさせていただいた。その折、偶然に金沢のご出身という日本人のシスターにお会いし、シスターもまた日本人の団体が来ていることに驚かれたのか、しばらく立ち話となった。学生の一人が、シスター個人の将来の希望のようなものが何なのかと尋ねると、「(自分のできることで) 神の御胸を実現すること。それ以外にありません」という静かな返答であった。珍しい答えでもなく、神に仕える身として全く標準的な考えと言ってよいものながら、あらためて教学協働を意識した国際参加・国際貢献という活動は、単に自分と現地の人々の関係という人と人、１対１の直接的な関係だけではなく、その間の眼に見えぬ第三者（神的存在）を介在してのものということを思いなおした。宗教的意味合いにおいては、この第三者こそむしろ主体であり、主体を中心として人と人の望ましい関係が成立していると想定されるもので、どちらが与える側でも与えられる側でもない、第三者に喜んでいただくことを主眼とした行為をそれぞれお互いに実行している、というものである。冒頭でご紹介した「数の不思議」の出来事も、私的な解釈として私たち一行と現地小学校の人々の間に第三者が介在していただいていた証と思いたい。

国際協力の種

国際文化学部　地域文化研究センター専任研究員　澤山 利広

2007年のフィリピン共和国での活動が無事終了してホッとしています。天理大学地域文化研究センター（地文研）によるルソン島サンタローサ市での活動は、2004年の第4回「国際参加プロジェクト」と2006年の「フィリピン・プロジェクト06」に続いて3度目となりました。有難いことに、これまでのリコーダー指導やスポーツ交流は、現地の人々にとても喜ばれてきました。そして、バランガイ（フィリピンの最小行政単位）のより多くの人々に役立つ何かができるのではないかとも思うようになってきました。私にとっての第8回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」の隠れた目的は、体育学部の近藤雄二教授と共に模索してきた生活改善プロジェクトの実施でした。

フィリピンでは大きなフライパンひとつを火にかけた揚げバナナの屋台をよく見かけます。ほっこりとした食感と甘ずっぱい味は南国のB級グルメの代表格です。しかし、鍋の熱油は黒く濁り、あぶくを立てていることも珍しくありません。目を転じれば、市井の人々は一日に何度も行水をします。サリサリストアと呼ばれる雑貨屋では1回使い切りのシャンプーや小さな石鹸が売れ筋商品です。

また、黒光りするゴキブリは屋内はもちろん、誰はばかることなく昼間の車道にも蠢いています。3億年前の古生代から生息しているこの昆虫は、フィリピンではあまり害虫扱いされていないようですが、病原体を媒介する厄介者には違いありません。

そして、これまでのバランガイでのホームステイとフィールドワークでは、病で床に伏せるたくさんの人々の存在を知りました。特に糖尿病罹患者の多さには驚かされました。

これらの課題を認識しながらも、あいにく私には、生活改善に役立つ専門知識や技能が備わっていません。そこで、天理高校二部で教鞭を執られ、看護師としての経験も豊富な地文研共同研究員の椋野和子先生にご指導いただくことになりました。具体的には、食用廃油を原料にした石鹸とゴキブリ駆除用ホウ酸ダンゴづくりのワークショップ、そして、糖尿病予防セミナーを参加学生の協力を得て開催しました。ワークショップでは、ヘルスワーカーをはじめ、約80名の参加を得ました。廃油石鹸は隣接するラグーナ湖に環境負荷をかけないことを力説しました。天理教サンタローサ出張所の月次祭に併せたセミナーには120名の聴衆が集い、成功裡に終えることができました。

それは、フィリピンでの活動が新たなステージに入った瞬間でもありました。現場にはいろいろな所に国際協力の種が落ちています。遊び心を忘れずに来年も同じ場所で何か新しいことに挑戦したいと思っています。

末筆となりましたが、本プロジェクトの実施過程では、フィリピンの天理教東本サンタローサ出張所、天理教フィリピン出張所、サンタローサ市のバランガイ関係機関、国内では国際協力機構（JICA）、国保中央病院、天理よろづ相談所病院、奈良県内の教育施設、天理大学後援会、天理教海外部、天理学園教職員をはじめ多くの方々にお世話になりました。ここに深甚なる謝意を表し、あわせて今後のさらなるご支援をお願い申し上げます。

フィリピンに学ぶ

国際文化学部地域文化研究センター共同研究員
天理高等学校第二部介護福祉科看護師
椋野 和子

昨年の「フィリピンプロジェクト06」に参加後、若い人に海外へ踏み出す体験をしてもらいたい、その重要性をわかって欲しいと事あるごとに言及してきたが、具体的にはなかなか進まない。そしてその想いは今もかわっていない。

フィリピンは不思議な国で、温かい人々との交わりを通し、癒されることが多い。それだけではなく何か得体の知れない大切なものを感じさせる。東南アジアのなかでも特にフィリピンの庶民層に見られる不思議な豊かさに、先進国と呼ばれる日本の私達が学ぶことは多い。それは天理大学が標榜する「他者への献身」の実践を通して、自らを省みることができたということに繋がるのではないだろうか。

今年の「国際参加プロジェクト」を遂行するにあたり、事前研修の持つ意義は大きく、は充実した内容になっていることも有り難かった。神戸学院大学の前林ゼミの学生さんに教えていただいた国際貿易ゲームは、楽しみながら実は学ぶことの多い研修であった。音楽の米田先生（天理中学校）によるリコーダー指導は先生が驚かれるほど私達参加者の上達が早かった。現地でのリコーダー指導方法については、学生に任せることができたのも研修が充実していた証である。四宮医師（国保中央病院ホスピス・緩和ケア科）と松尾ホスピスケア認定看護師（天理よろづ相談所病院）によるホスピスについての講演は、ともに生きることと命のありがたさを真摯に受け止める学びであり、マザー・テレサミッション施設訪問のポイントを学んだ。辻先生（国立民族学博物館）によるタガログ語講習は、遠くから何回もお運びいただき、丁寧かつ優しくご指導いただいた。タガログ語での挨拶は実は非常に大切なことであるが、難しく、なかなか覚えられなくて、来年こそは上達するようにと考えている。

ひとつひとつどれをとってもかけがえのない研修で、「国際参加プロジェクト」の完成度は事前研修によって大きく左右されるといっても言い過ぎではない。とは言うものの、個人的には日常業務の合間を縫っての事前研修への参加は不十分で、反省することが多い。英会話を学ぶこと、タガログ語で挨拶ができることを肝に銘じたはずなのに、直前になっても達成されないことへの焦りと不安は大きかった。

昨年の経験をもとに、今年は報告書の重要性を意識し、メンバーには責任を持って記録することを提案した。具体的には各自、半日分の記録を担当することになった。

またスポーツ交流では、昨年の相手校の本格的なユニフォームに圧倒されたので、今年はこちらも何とかならないかと考えた。スポーツウエアは高価でそろえることはできない。ならば作ってしまおうという勢いだけで始めた。生地の購入からデザイン、縫製と、経験はあるというものの時間的余裕がなく、少々無理をした。最後の仕上げの文字

入れには学生が大きな力を発揮してくれ、渡比直前に完成した。

プログラムにはない以下の活動も一応の準備をして臨んだ。現地の生活の衛生環境にも関心があったので、日本でも主婦の仲間やサークル等で効果絶大という人もいるゴキブリ駆除のホウ酸団子作りと、食用廃油を利用しての石鹸作り（P98参照）だ。

また昨年の経験でフィリピンでは意外と多く見られる病気に糖尿病があることが分かり、治療費の問題で適切な治療を受けられないために重症化するケースもあることから、糖尿病指導にも挑戦した。（P101参照）

プロジェクト活動のメインであるリコーダー指導はスタミナを必要とし、体力消耗が予想された。暑さと戦いながら言語もままならない中で、リコーダーそのものに触れたことのない子ども達にゼロから教え、最終日には課題曲を披露できるまでに指導しなければならない。指導方法によってはその目的が達成されないかもしれない。そんな中でこの石鹸やホウ酸団子作り、糖尿病指導はできないと思っていたし、時間や余力があればやろうという軽い気持ちでいた。

ところがメンバーは思いのほか元気で非常に積極的であり、かつエネルギッシュでリコーダー指導は大成功を収めた。リコーダー指導の感動的場面はいくつもありメンバーそれぞれが胸に秘めた宝物になっているに違いない。

リコーダー指導後、更に彼らはこのイベントを盛り上げるために協力してくれた。

急遽、住原先生、澤山先生は広報のために英文チラシを作って下さり、それを持って各自がホストファミリーにイベントの内容を説明し、参加していただくようにお願いした。石鹸作りのために必要な食用廃油はホストファミリーに協力いただくことにし、前日の夕食後、暗くなってからホームステイ先を１軒１軒回り、廃油集めに奔走してくれた先生と学生の姿は強烈な印象となって残っている。当日の会場設営は現地の方の協力で広い庭をお借りし、テーブルから椅子、マイクに至るまで、どこからかあっという間に用意され日本では考えられない温かさに触れた。思いのほか大勢の人が集まってくださり、大人も子どもも、杖をついたご老人から赤ん坊を抱いた人まで参加してくださった。綿密な打ち合わせや準備ができなかったので十分とはいえないがまずまずではなかったかと思っている。

「国際参加プロジェクト」のスケジュールで見逃してはいけないプログラムがある。マニラ首都圏トンド地区にあるマザー・テレサのミッション施設“Formation House”でのボランティア活動と、そこにおられる人々と接する大切な時間の共有である。日本では「死を待つ人の家」と紹介されることもある。事前研修では「最期の生を生きる」ということについて学び、考え、講義の中で涙し、ホスピスを重く捉えて施設の中に入ることができるかなどと案じていたのだが、実際に話してみると、今までの不安や迷い

はすぐにとけてなくなった。そこには静かな時間が流れ、暖かい雰囲気に包まれていた。またしてもという思いがする。それは昨年訪れたときのようにこの施設のすぐ傍にある孤児と障害児施設“Home of Joy”で感じたそれと全く同じであった。

年齢にして六十を過ぎた方が大勢おられた。日本人と知って手招きをされ、頬ずりをしながら手を握り笑顔で喜んでくださるのである。私の所へ来てと、ベッドを回っていくのを待っていてくださる。透き通る声で歌を歌ってくださる方もおられたし、「日本に2ヶ月いたことがあるの、日本語を教えて」と言われて挨拶を全てローマ字で書いたりもした。皆さんがとても明るいので、ふと勘違いしそうになった。ここは明るく振舞える場所ではない筈と気持ちを立て直した。お一人おひとりがすさまじい人生を送ってこられた方たちであることを私たちは忘れてはならない。今の私たちはこの方々の生活の歴史を想像すらできないし、フィリピンの人の心の奥に入っていくことは難しいが、少なくとも優しい言葉かけにより少しでも心和んでいただけたなら、それが私たちにできる最大の贈り物なのかもしれない。

帰り際、日本人のシスターにお会いできた。行き場のない病める人々を神の使いと慕い、神に仕えることが最上の喜びであると、きりっとした表情でおっしゃるその姿から、なるほど病んでおられて尚、素晴しい最期の生を生きる場を明るくゆったりと過ごせるのはこのシスターたちによって支えられているからであり、幸せな人々であると誰もが感じたに違いない。

結団式で「今の気持ちを色に例えると参加前は白、灰色、黒のようだったが、2回目を直前にして、ほんの少し淡い色がついているように思う」と述べた。行ってみて初めて知ることは多い。まだまだ知らないことだらけで、知らないことが多すぎる事に気づいた。世界がそれほど広くて現に今も世界中で多くの人が生きているということを実感できる。このことは海外へ一歩踏み出して初めて捉えることができた大きな収穫である。

日本人としてフィリピンの国に来て何もできていない。しかし相手を理解しようとする心がもてたことだけは確かである。

昨年「フィリピン・プロジェクト06」に参加して、フィリピンについて詳しく知る必要があることに気がついた。にもかかわらず殆ど自ら学ぶことをしないまま、再び参加したことを反省している。昨年の体験はまさに感動の連続で、あっという間に時が過ぎてしまった。

体験の感動を他者へ伝えることが与えられた役目であると思い、今回参加するまでにフィリピンでの活動やそこで得た感動を、家族、友人、職場の人、福祉関係の知り合いに話す機会があった。耳を傾けてくれる姿にわずかな達成感を覚えた。自己満足の域を超えないといわれるかもしれないが、そうではないと思っている。

語りながら思ったことは、日本人はいまだにフィリピンに対して悪印象を持っている人が多いということだ。そうならざる経過をたどってきた時代背景があるので致し方ないと思うのだが、話し終える頃、プロジェクトの素晴らしさとフィリピン人を好印象に感じてもらえ、感動したと言ってもらえた時、心ひそかに安心感を覚えた。今思うことはもっとフィリピンについて学ばなければならないということである。

フィリピンプロジェクトに参加して

天理教敷島大教会よふぼく
椋野 まゆみ

「楽しかった」 の一言では到底済まされないほど、たくさんの人を見たし、習慣を見たし、現状を見た。人々が親切でフレンドリーで、笑顔が印象的な国。子どもが子どもらしく笑い、身の回りにあるもので遊び、トライシクル（フィリピン国民にとって一番身近な交通手段。原付にサイドカーが付いているような乗り物）に立ち乗りしていても当然だと言わんばかりに大人も注意しない。過保護な日本ではありえない光景である。強い国。

貧しいことを貧しいと思わず、毎日明るく楽しく、前向きに生きている国。しかも、私たちが貧しいと思っていた彼らは、はるかに裕福な生活をしている方だという。住む家があって、電気があって、水道がある。日本では空気のような扱いになっているものでも、こちらでは上流の生活なのだそうである。

見るものすべてが初めてのものばかりで物珍しかったが、目の前にいるのは私と同じ人間であることに興味をもった。同じ人間でも生まれたところが異なるだけでこんなにも違いのあることが面白くも感じた。

しかし、良いところだけではない。街にはゴミがあふれ、道のどこを歩いていてもゴミが落ちている。いや、落ちているというより捨ててあるのだ。ポイ捨てが当然で、習慣にさえなっているのかと疑問に思う。自分の故郷が、自分の住んでいるところが、汚いことに対して何の抵抗もないのだろうか。しかしながら、それとは対照的に、露店ではほうきを販売している。こういった事実もまた興味深く、また矛盾のようなものを感じる。昨年の同プロジェクトでゴミ拾いの、ひのきしんをしている風景をビデオで見たように思うが、来年以降は是非計画の中に入れていただき、ずっと続けていただきたいと願う。

世界には、フィリピンのような貧しい国の方がはるかに多い。もっといろいろな国を見たいと強く思った。その時また違う感情を抱くかもしれないが、それが自分に考える機会をたくさん与えてくれ、視野を広げてくれることは確かである。

自分が本当にやりたいことは何なのか？自分は本当に必要なのか？自分を求めてくれる人は他にもいるのではないだろうか？自分はこの国のために、この国の人々のためにどこで何ができるのか？

この旅は自分にたくさんの矢印を向けてくれた。早くこの答えを見つけたいと思う。

最後に、全員が大きな病気をすることなくプロジェクトを終えられたことが何よりもよかった。引率の先生方、サンタローサ出張所の先生方、ホストファミリー、そして親神様のおかげで健やかに通らせて頂けたことに感謝致します。ありがとうございました。

フィリピンの子ども達

天理教敷島大教会よふぼく　神戸大学２回生
椋野 美和

私は、今回の「国際参加プロジェクト」に行かせて頂き、想像以上の感動と驚き、喜びを経験することができました。

参加のきっかけは、昨年のフィリピンへのプロジェクトに母が参加させて頂き、私に勧めてくれたことです。今考えると、母があれだけ興奮して話を聞かせてくれた理由がよく分かります。また、きっかけはそれだけではなく、自分自身の目標もありました。私の大学在学中の目標が「今しかできないことをしよう！」そして、今年の目標が「一つでも多く感動しよう」であったので、「行くしかない!!」と思ったのです。

私が特に心待ちにしていたのは、現地の小学生へのリコーダー指導です。私は教職を目指しているので、ぜひ海外での指導も経験してみたいと思っていました。私には将来教師になった時に、心掛けようと思っていることが２つあります。１つは「常に子どもの目線、立場に立って物事を考えられること」、もう１つは「子どもたち一人ひとりの良いところを見つけること」です。この２つはリコーダー指導でも忘れないようにしようと心に決めていました。

フィリピンの子ども達は、まさに純真無垢という言葉がぴったりでした。初めて彼らに感動させられたのは、登校初日の朝礼でのことでした。国旗掲揚の際、彼らは国旗の方を向き、手を胸にあて、めいっぱい元気な声で国歌を斉唱していました。その一生懸命な姿を見て胸が熱くなりました。

また、リコーダーの練習に入ると、フィリピンにもリコーダーに似た楽器があるようでしたが、吹いたことがなかったようで、初めはまともに音を出すことさえできませんでした。けれど、やはり彼らは一生懸命に練習してくれました。

彼らは、私の下手な英語を理解しようと一生懸命話を聞いてくれました。私の顔をじっと見て話を聞いてくれる子、英語が分からない子にタガログ語で通訳してくれる子、グループをまとめてくれる子、上手く吹けずに諦めそうになっていたのに、次の日には家で指を覚えて来てくれた子、ノートに音階とリコーダーの指の絵をかいてきてくれた子等々…。本当に一人ひとりが素敵なところを持った子ども達でした。その分、こちらも絶対に彼らにはリコーダーで曲を演奏できるようになってほしいと思いました。だから、毎日全力で彼らと向き合うことができ、そして彼らもこちらと真剣に向き合ってくれたのだと思います。しかし、練習３日目に私の疲労も溜まっていて、それが表に出てしまった時がありました。その日は、彼らの表情もいつもより元気がなく、集中力も低下してしまっていました。つまりは、こちらが本気で、全力で取り組めば、子ども達も本気で全力で取り組んで

くれるのと同様に、疲れも伝わってしまうということです。これはフィリピンで得た大きな学びでした。全力で精一杯やり遂げることの大切さを学ばせて頂きました。

最終日のコンサートでは、予定していたよりも曲の長さを短くすることもありましたが、見事にすべてのクラスが演奏しきることができました。コンサートでの彼らの一生懸命で生き生きとした表情は今でも鮮明に覚えています。

私たちの活動が、フィリピンの子ども達の心に何かしらの思い出、学びとして残ってくれれば、それだけで今回の「国際参加プロジェクト」の意義があったのではないかと、私は思っています。

【コラム】②　　調子に乗っちゃいました…

シナルハン小学校に行って印象的だったこと。それは、もの物凄いサイン攻めの嵐でした。日本人が珍しいせいか、どこに行っても私たちの行くところには人だかりができ、ハリウッドの有名人かのごとくサインをせがんでくる。本当に何回サインを書いたか分かりません。小学校に行っている間は芸能人気分に浸りました(笑)。噂によると、S 山先生のサインは「へのへのもへじ」だったらしい。

音楽を通しての国際交流

人間関係学科　生涯教育専攻　4回生
池﨑 未幸

今回この「国際参加プロジェクト」に参加するにあたって、私には自分自身に対する課題があった、それは、心倒れそうになったとき、自分自身をどう勇ませるかということだった。

昨年の夏、私は、同じ「国際参加プロジェクト」でインドネシアへ行った。初めての海外ということもあり、自分自身に余裕がなく、生活に慣れることで精一杯だった。そのため、少し不完全燃焼のまま日本へ戻ってきたような気がしていた。そこで、自分自身へのリベンジということで、再びフィリピンでのプロジェクトに参加することを決めた。

このプロジェクトの最大の目的であるリコーダー指導は、予想をはるかに超えて難しいものであった。2つの指導班に分かれて4年生と5年生を教えることになっていて、私のグループは、4年生の3クラスに教えた。曲目は「かえるの歌」である。使う音は、ソ、ラ、シ、ド、レ、ミ、のたった6音で、非常に簡単な曲であるが、子ども達にとってはすべてが初めてのことであり、教える側にとっても初めての経験で、一日一日が手探りで進んでいった。

とくに初日は反省点が多く、考えさせられた。子どもにどの程度のレベルを求めていいのかもわからないまま指導を進めていくうちに、気が付けば私は、音に対してとても完成度の高いものを求めてしまっていた。私たちは楽器を触ったことのない子ども達に音楽を教えに来ているのであって、決して音楽クラブの指導に来ているのではないのだと気付かされた。初日にして大きな反省と、自分の未熟さを感じ、早速悩んでしまった。

次の日からは、できるところまでできればいいと思い指導を進めた。しかし発表会もあることだし、できるだけ吹けるようにしてあげたいという気持ちもあり、指導には熱が入った。吹けた時の子ども達の嬉しそうな笑顔や楽しそうな様子は、疲れの中に頑張る元気をくれた。

そうして迎えた発表会。メインイベントであるミニコンサートは、本当に一瞬といった感じで時間が流れていった。あまりに一瞬すぎて練習の成果を大いに発揮できなかったクラスもあっ

たように感じ、子ども達には、少し申し訳なさを感じた。そんな中、最後まで一生懸命頑張ってくれた子ども達には、本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。

こうして子ども達と過ごした時間の中で感じたことは、その無邪気すぎるほどの人懐っこさだった。日本人に対しての珍しさもあっただろうが、学校にいる間、ひっきりなしに子ども達があちこちから名前を呼んでくる。気が付けばすぐに子ども達に囲まれている、という状態になっている。その溢れ出る元気の良さに、圧倒されてしまうほどだった。

今回のこのプロジェクトを通し、改めて自分の至らなさを様々な場面で感じた。出発前に掲げた課題の通り、日々自分との戦いだったようにも感じる。一緒に行ったメンバーを見ていると、本当にみんなとても素敵だった。昨年のリベンジということで参加した今回のフィリピンでも、私はやはり多くの課題を持って帰ってきたようだ。しかし、みんな最後まで体調も崩さずに無事に過ごせたことは、今回のプロジェクトが成功だったと言える一番のことだと思った。

【コラム】③　　アクシデント発生！！

25 日、翌日の SAYONARA パーティの買出しと観光を兼ねて、みんなでジプニーを貸し切って観光地「タガイタイ」へ行った際、なんと長い坂道の途中でジプニーがオーバーヒートしてしまったのです。

慌てていた私たちをよそにドライバーさんは水と布を手に手際よく修理し、ドライブ再開!! フィリピンではよくある光景らしく助手席には、修理道具が置いてありました。そして、この日はめったにお目にかかれない光景に遭遇。それは、交通事故!! 長い渋滞の先にはたくさんの人だかりができていました。

滅多にないことにそわそわしている現地の方々の様子が車に乗っている私たちにも伝わってきました。
そんないろんな光景に遭遇できたタガイタイの旅でした。

ジプニーを修理しているドライバーさん

一生の宝物！！

ヨーロッパ・アメリカ学科　英米語コース　3回生
久保 真百子

今回のプロジェクトの中で私が一番印象に残っていることは、メインプログラムでもあるシナルハン小学校でのリコーダー指導でした。出発前に日本でリコーダーの指導法を考えている時、私は決められたプログラムを基に教えたら大丈夫だろうと軽い気持ちでした。

いざ指導が始まると、私達が予想していた以上にリコーダー指導は難しく、本当に4日間で子ども達に教えることができるのかと不安を感じました。しかし、指導していく中で一番大事なことを子ども達から教えられました。それは、教える私達自身が楽しみながら教えること。また子ども達と共に楽しみながら一歩ずつ進んでいくこと、そうすれば信頼関係も築くことができ、最終的にリコーダーの上達につながるはずと強く感じました。そして今回、指導を通して子ども達から「頑張れば何でもできる」ということを教わりました。初めは、全く吹くことができなかった子が、最終日には第 2 の先生になれるほど上達していたことや、もらった音符メモを毎日書きなぞって練習してきてくれていた子など、初めて見る楽器をあんな短期間でやってのけた子ども達に、私は本当に感動したと同時に、自分が忘れかけていた気持ちを思い出させてもらいました。初めは不安だらけで始まったリコーダー指導ですが、子ども達のあのリコーダーを学ぶ時の生き生きとした眼差し、リコーダーがうまく吹けた時の嬉しそうな満面の笑み、リコーダーを一生懸命練習するあの真剣な姿勢は今でも忘れられません。

また、今回フィリピンに出発する前に私が旅のノートの 1 ページ目に書いた、自分の中での目標が 2 つありました。1 つ目は、何事にも積極的に悔いの残らない旅にすること。2 つ目は、すべてを楽しむということでした。本当に小さな目標ですが、フィリピン滞在中は悩んだ時、迷った時に自分を奮い立たせるように、いつもノートの 1 ページ目を開いていたことを今でも覚えています。そのためか、今回はものすごく自分と向き合う時間が多かったような気がします。自分はどんな性格なのか、今自分は何をしなければならないのか、今自分は何をしたいのか、本当にいろんなことをフィリピンに行って考えさせられました。また、日本に生まれ育った私ですが、フィリピンの方に日本について聞かれた時に何も答えられず、本当に自分は何にも知らないのだと気付かされました。今まで日本で何を見てきたのだろうと憤りさえ覚えました。そして、今私がしなければならないこと、それは何よりも日本がどのような国であるかを学ぶことだと思いました。

プロジェクトを終えた今では早くフィリピンに帰りたくてしょうがありません。期間中、私は本当に毎日が楽しく新鮮で、自分ではないのではないかと思うぐらい、いつも笑っていたような気がします。現地の方々は、子どもからお年寄りまでみんながいつも笑顔と喜びにあふれ、毎日を楽しく過ごしていました。その姿を見て私自身もフィリピンの方に笑顔と喜びを分けてもらっていたような気がします。リコーダー指導のときと同様に自分の気持ち次第で全てが変わっていくのだと感じました。

私にとってこの夏、フィリピンで過ごした 2 週間はどんなものにも変えることのできない一生の思い出となりました。サンタローサ出張所の方々、フィリピンの家族、シナルハン小学校のみんな、そしてその他多くの方々との出会いを通じて多くのことを感じ、学ばせていただきました。日本にいては感じることができなかったこと、体験することができなかったことの全てが本当に宝物です。このプロジェクトに参加しなければこんな素晴らしい仲間とも出会うことはできなかったし、フィリピンの方々と出会うことも、トライシクルに乗ることも、パンデサル(朝食用のパン)を毎朝食べることもできなかったのだと思うと、全てのものに感謝の気持ちでいっぱいです。このプロジェクトを支援してくださった先生方、本当にありがとうございました。マブハイ!!

コラム ④　　英語の達成度

私のホストファミリーの子どもテイヤ 6 歳は、とても英語が上手です。彼の教科書は、日本の英語の中 1 年レベルで、小テストもほとんど満点でした。ただ、気になるのは 5w1h が使えていないということ。疑問詞を全部 What にしているのです。

あと、特有のなまりもあって、Picture を「ピチュール（？）」と発音していました。しかし、私が間違えて bath の[th]の発音を[s]にした時は指摘されてしまいました。また、小学校の黒板の英文の量も半端じゃない！日本の高校生レベル!?くらいはあったと思います。私が授業についていけるかどうかは自信がありません（笑）。

Sta.Rosa に行ってみて

ヨーロッパ・アメリカ学科　ブラジル・ポルトガル語コース 4 回生
河野 素和

「初海外がフィリピンって微妙やな…」

これが、この研修に参加することになり、友達に報告した際にその友達から言われた言葉だ。自分でも「確かに…」と思ったのが正直な気持ちだった。どうしてもフィリピンに行きたかったわけではなく、なんとなく直感で行こうと思ったので、特別フィリピンに思い入れもなくといった感じだった。

そして様々な準備をし、フィリピンに飛び立ったのだが、今回フィリピン、とりわけサンタローサという町に行って感じたことが 2 つある。1 つは人と人との距離の近さ。そしてもう 1 つは言葉の力である。

サンタローサでは人と人との距離がすごく近い。もちろん心のことだ。日本にいる時のような微妙な距離感や壁というものがない。誰にでも気軽に話せて、打ち解けることができる。まったく見知らぬ僕たちに、なぜ自分の名前を知っているのか分からないような人までもが平気で声をかけてくる。

ある夜、メンバーの穂高と一緒に食用廃油を集めるために、ホームステイ先の付近の家をまわった。翌日の石鹸作りのために、たくさんの廃油が必要だったため、澤山先生から指令が下ったのだ。するとみんなすごくいい人で、Hydee（ホームステイ先の女の子）が理由を話すと、たくさん廃油を分けてくれた。あるサリサリストア（通りにあるお店）の主人は、まだ使ってない新品の油を入れてくれた。たくさんの家を一緒に回ってくれた Hydee もそうだし、油をくれる隣人たちもみんな「何か困った時、何かある時は協力する」というような関係を、肌で感じた気がした。

これは自分たちが外国人で、もの珍しいからだろうとも思うが、もし仮に自分の近所に外国人がやって来ても、自分や近所の人々はあんなにも声をかけたり、協力したりするだろうか？ましてや、近所の家を回ってくれるだろうか？日本ではなかなか少ない光景だと思う。やはり、人と人との心の距離感というものが日本とは違うように思った。

そして、今回の研修で、言葉は大事だと思った。やはりコミュニケーションを図る際、言葉の果たす役割は大きい。サンタローサでは主に英語で会話をしていたが、やはりタガログ語を話せていたら、もっといろんなものを共有できたと思うし、もっと楽しめたとも思う。リコーダー指導のときも、英語よりもタガログ語の方が断然伝わる。やはり片言でもその国で使われている言葉を使うことが大事だと思うし、自分の成長にもつながる。吸収できるものがもっと広がったと思う。

しかしながら、「やっぱり言葉通じんくても、問題ないな。なんか伝わってくるし、伝わるし」というのは、今回一緒に参加した H 氏の名言である。「言語ができない」ということで、なにか消極的になってしまったり、不安になってしまったりということが大

きかった自分にとって、これを五感で感じることができたのは大きかった。もちろんそれによって困ること、困らせることが多かったことも否めないが、なんかやっぱり同じ。楽しい時は顔でわかるし、なんか雰囲気でわかるし、伝わる。言語を話せなくても、分かり合うことができるということを感じることができた自分はひとつ、ステップアップしたと思う。そう思いたい。タガイタイ（フィリピンで流行ったダジャレ的なもの）

ということで、今回ここでは書かなかったことや、書くことができないようなことも起きたし、伝えたいことがたくさんある。簡単に言うと、とにかく世界は広いのだ。日本の常識は世界の常識ではない。一度、島国日本から抜け出して初めて気づくことがたくさんある。いつまでも井の中の蛙でいてはならない。

次は君の番だ！！

【コラム】⑤　　プレゼント交換

現地の方に様々なプレゼントを渡してきました。皆様から寄贈していただいた文房具や、天理大学のうちわなどです。スポーツ交流を行った高校には、手作りの「特製天理大学キャップ」を贈りました。特製といっても買ってきた無地の帽子に天理大学のロゴを貼り付けたものですが、これが意外に好評で（多分）、その高校の先生がプライベートで被っているのを発見しました。

自分たちのプレゼントを気に入ってくれるのはとても嬉しいことですね。もちろん皆様からいただいた文房具なども、現地の子ども達や小学校の方には大いに喜ばれました。

その代わりに、私たちは目に見える物ではなく、素敵な経験というプレゼントを頂きました。こういう形のプレゼント交換もありですね。

フィリピン人って温かい！！

ヨーロッパ・アメリカ学科　ドイツ語コース　3回生
佐藤 宮子

私は今回、第8回「国際参加プロジェクト(フィリピン)」に参加させていただいて、また新たな文化に触れ、新たな知識や自分の中に課題を見つけることができました。昨年は、第6回「国際参加プロジェクト(インドネシア)」に参加させていただき、被災地の状況やそのことに屈しない子ども達の前向きな姿に感動し、いろんなことを学ばせていただき、「来年もインドネシアの子ども達に会いに行きたい」と考えていました。しかし、今回フィリピンのプロジェクトのことを聞き、「今度はフィリピンに行ってみたい」と思うようになりました。その理由は4つありました。1つ目は現地の小学生にリコーダーを教えることで、教えることの大変さやその中から何かを学べると思ったから。2つ目は海外で布教されている天理教の出張所にお世話になることで、自分の中の天理教感を見直すきっかけにしたかったから。3つ目に昨年インドネシアで直面したゴミ問題がフィリピンにおいてはどのようになっているか、その対策をどうしたらいいのかを考えたかったから。4つ目に私の将来の目標は国際協力をNGOなどで働くことなので、学生時代に様々な国を回っていろんな知識や文化、国民性などを学びたいから、というものです。

メンバーが決まり、活動が始まりました。みんなそれぞれが忙しくて、私は本当にしっかり準備していけるのかという不安を常に抱えていました。しかし、みんなそれぞれが自分の空き時間に責任をもって決められたことをしてくれていたのでいつの間にかその不安も消えていきました。しかしその後、また不安が襲ってきました。それはリコーダーをしっかり子ども達に教えられるのかということでした。現地の言葉もしっかり話せない、自分たちの演奏をたまに間違えてしまうなどさまざまな要因からでした。

そんな不安を抱えながら、ついにフィリピンに飛び立つ日がやってきました。その時はワクワク感よりも不安の方が大きかったと思います。フィリピンに着くと、空港には多くの人だかり。「なんだろう」と思っていたら、先生が「フィリピンは出稼ぎ国家だから帰ってくる親族をみんなで迎えに来ている」ということを聞きました。初めからフィリピンの国民性に触れた気がしました。みんなで迎えに来るということはそれだけ家族思いなのかなとも思いました。

リコーダー指導が始まってからは毎日試行錯誤の連続でした。フィリピンでは音楽の時間は歌しかないので、ほとんどの子は楽器に触れるのが初めてでした。興味があるのでとことん吹いたり、また戸惑ったりする子もいました。その時、「もう少し自分たちも教え方

を研究してくればよかった」と反省してしまいました。しかし、そんなことで悩んでいる場合ではありませんでした。毎日 A 班と B 班のそれぞれのグループで練り合い、改善点を話し合いました。その成果もあったと思いますが、何よりも子ども達が素直な心で熱心に取り組んでくれた結果、彼らは驚くほどの上達ぶりを見せてくれました。前日はあまり吹けなかった子が、今日はみんなと同じように吹いていた時の嬉しさは計り知れませんでした。そして、「がんばってくれてありがとう」という気持ちでいっぱいになりました。発表会では何とか、どのクラスも演奏することが出来ました。演奏が終わると教えた子が２・３人が私のところに「ありがとう」と言って、プレゼントを渡しに来てくれました。そのときは、本当に嬉しくて、「がんばってよかったな」と思いました。またしても、去年と同じように私たちが子ども達にしてあげられたことより、子ども達にもらったものの方が多いな、と痛感しました。子ども達との別れは本当に辛かったけれど、その寂しさ、悲しさはいつの間にか「きっとまたここに帰ってくる」という思いに変わっていきました。

天理教東本大教会サンタローサ出張所の皆さん、ホストファミリーの皆さんの優しさは毎日疲れて帰る私達の心のオアシスでした。出張所に来ている人みんなが初めから知り合いかのように話しかけてくれるし、少しの変化でも読み取ってくれました。ホストファミリーは私を本当の家族のように扱ってくれて、言葉が通じなくてもその場を共有するだけで心が温まりました。「私がもう少しタガログ語が出来ていたら４歳のホストファミリーの子と、もっとお話が出来たのに」という心残りもあります。

全体を通して、自分の中で答えが出たものもありますが、課題も見えてきました。ゴミの問題については結局何も出来なかったのですが、私たちだけの考えだけでは及ばないところがあることも感じました。もし、ちゃんと分別されるようになるとゴミの山で暮らす人々の生活が成り立たなくなるという弊害もあるようです。私のこれからの課題はそれぞれの問題についての正しい知識を関連させて、日本の常識の押しつけではなく、その国の人にとって最善の方法を考えられるようになることです。そのためには言語の上達や厳しい現実も知っておかなくてはならないと感じました。

いつかまた、フィリピンに足を運びたいです。今回、資金をはじめ、リコーダーや文房具の寄付をしてくださった方々、先生方、出張所の皆さん、ホストファミリーの皆さん、関係者の方々皆さんにお礼の気持ちを伝えたいです。こんなによい機会をいただき、また支援していただきありがとうございました。

一生忘れることのできない夏休み

体育学部体育学科　スポーツ学コース　3回生
座安 可那子

皆さん、お疲れさまでした。フィリピンで過ごした非常にアツーイ 12 日間の活動が、長いようで非常に短く、あっという間に過ぎてしまいましたね。私はサンタローサからマニラに移動した夜も、フィリピンから日本へ帰国する際もなんだかサンタローサのみんなの所へ帰らないといけない気がして、正直このまま日本へ帰っていいのかと複雑な思いが交差しました。

実際、帰国して関西国際空港についた時も一番初めに、携帯の着信に名前が出てきたのは、両親からではなくフィリピンで仲良くなったレンレンからでした。しかし私の携帯は、残念なことに、国際電話ができませんでした。(泣)

マニラ空港を出ると、天理教東本大教会サンタローサ出張所の木本先生とフィリピンの方々が迎えにきてくださいました。出張所までの道のりは遠く、車の中で休もうと思っていたのですが、沢山の車が行き交う道路の真ん中で、轢かれそうになりながらも新聞や食べ物などを売っている子どもの姿から目が離せませんでした。テレビのドキュメンタリーや特別番組で見る世界が、そこにはありました。

出張所に到着すると、出張所の方々が出迎えてくれました。そこでは、出発前に辻先生から教えて頂いたタガログ語で一人ずつ自己紹介をしました。そして、解散と同時にそれぞれのホストファミリー先に向かいました。

正直英語はあまり得意ではありません。しかし、話すことができなくても、ホストファミリーや現地の方々とたくさん話したいという思いだけはあったので何を伝えたいのか、何を言いたいのかを必死で読み取ろうとしていました。その気持ちが通じたのか 9 日間のホームステイを乗り越えることができました。また日が経つにつれて、言葉が通じないからこそ相手の何かが見えてくる発見もあり、非常に楽しかったです。

ホストファミリーとは毎晩タガログ語を習ったり、またホストファミリーの子に日本語を教えたりと英語、タガログ語、日本語の 3 ヶ国語を使って会話していました。そんな生活を毎日過ごしているといつの間にか私自身が、どの国の言葉を使用して話しているのかもわからなくなることや、私たちメンバーの間でも日本語以外の言葉で会話しようという傾向があちらこちらで見受けられました。

滞在 3 日目からはサンタローサにあるシナルハン小学校に行き、リコーダー指導が始まる予定でしたが、前日にフィリピンのサンタローサの学校が祝日に当たる為、急遽休みに

なったとの連絡があり、リコーダー指導開始日が１日短縮されました。

椋野先生の指導により、その日の午前中は、穂高さんのホストファミリーであるオマール家の庭に現地の人たちに集まってもらい、誰でも簡単に作れるホウ酸団子と食用廃油を再利用した石けん作りを行いました。約 80 名近い人たちが集まって下さいました。

木本先生の奥さんであるノエミさんによるタガログ語での補助説明等を混じえながら実演は無事終了しました。

滞在４日目。いよいよリコーダー指導が始まりました。集会所のような所で、小学生全員を前に練習してきたタガログ語で１人ひとり自己紹介を行いました。私は、ホストファミリーの子どもに自己紹介文を添削してもらい、２人で何度も練習しました。そのおかげで、何とか自己紹介を終えることができました。

自己紹介を終えると校長室へ戻り小学生に指導をするために、リコーダーや、楽譜等の日本で準備してきた道具を手に持ち、期待と不安を抱えながら小学生の待つ教室へ向かいました。教室に入って簡単な自己紹介を行ったあと、子ども達一人ひとりにリコーダーを渡すと満面の笑顔と歓声があがりました。私はリコーダーを手にした瞬間の子ども達のあの笑顔が今でも忘れることができないくらい、目に焼き付いています。

私たちの班は、小学校４年生を対象に『かえるのうた』を教えました。この曲は通常ド・レ・ミから始まりますが、授業で学習している日本の子どもでさえも、ドやレの音は右手の薬指や小指が届かなかったりと、難しさを覚えるのと同時に、苦手意識が芽生えます。ましてやフィリピンの子ども達はリコーダーを見たことも触ったこともない状態から４日間で１曲完成し、最終日には全校児童の前で発表するという課題がありました。そのため班で話し合い、４ 日間で仕上げて発表させるにはより簡単に吹ける方がいいのではないかという結論に達し、左手だけで吹けるようにソ・ラ・シの音階で始まるようにしました。

リコーダー指導１日目はソ・ラ・シという３つの音だけを徹底的に教えました。しかし終わってみれば、この３つの音さえもできない子が沢山いて指導初日から非常にあせりを感じました。午前中３クラスの指導を終えた後、毎回各班で次の日の指導に向けてのミーティングを行いました。指導している中で、教室では音が響く為に子ども達自身が自分の出している音が正しいのかが分かりにくいということから、校庭で指導するなどの案も出て、非常に活発に意見交換がなされました。

中日には、なかなか予定通りに進まないことや子ども達１人ひとりの達成度も大きく異

なり、どのような指導で発表の段階まで持っていくかという点で班のメンバー内でも教育観がぶつかることもありました。

そんなこんなでなんとか仕上げの段階まで持って行くことができましたが、不安を残しつつも最終日を迎えました。最終日当日、発表は午前の練習を終えて午後から発表することになりました。お昼の間に修了証などの準備をし、午後のプログラムに備えました。午後のプログラムは、村田さんの司会で始まりました。リコーダーの指導の前に小学生からも様々な出し物がありました。私たちも約２ヶ月練習してきた『マツケンサンバ』を披露しました。練習の成果が出ていたかはわかりませんが目の前にいるみなさんが大きな拍手を送ってくださいました。

そしていよいよ教え子たちのリコーダーの演奏に入ります。舞台に並んだ子ども達の表情からは、緊張が物凄く伝わってきました。このままでは、一生懸命練習してきた成果を存分に発揮することが難しいと察知した私たちは、緊張感を少しでも和らげるために、リコーダーの演奏の前に『かえるのうた』を音階で歌わせました。すると子ども達は、非常に元気よく歌ってくれたので、この勢いでリコーダーの演奏に入りました。そして、見事吹ききることができました。指導初日は、3つの音さえもできなかった子ども達がわずか4日間という短い期間に人前で演奏できるまでに成長した姿に、一同心の底からなんともいえない熱い思いがこみあげてきました。そして演奏終了後、子ども達全員と一体となって喜びあいました。この喜びは、文字で表すことができないくらい、また一生の思い出になるくらい非常に私たちの心に残りました。このプロジェクトの一番の目的であるリコーダーの指導が、こんなにも心を熱くさせるのだと思いもしませんでした。

また、高校生とのスポーツ交流や、マニラでのマザー・テレサ施設見学でも感謝しきれないくらいの沢山のことを学ばせて頂きました。このプロジェクトを通して出会えた仲間や先生方をはじめ、携わって頂いた関係者のすべての方々に、この夏、人生の財産となるような経験をさせて頂いたことに深く感謝申しあげます。この経験を糧とし、更なる飛躍を目指します。どうもありがとうございました。

「知ったか」の自分と出会った旅

臨床人間学研究科修士課程　臨床心理専攻１回生
竹平 弥生子

フィリピンでのプロジェクトの参加は、去年に引き続き２度目でした。大学院に進学し、毎日その日のことをこなすだけでいっぱいいっぱいだった私。忙しくなることはわかっていたし、今年は無理だなと参加をあきらめていました。しかし、去年のプロジェクトで出会った人たちにもう一度会いたいという思いが強くなり、時間的にも経済的にも精神的にも厳しい中、参加を決意しました。準備段階では正直、参加したことを後悔しました。週二回の研修に参加するだけで精一杯の日々。積極的に準備を進める他のメンバーに感謝しつつも、自分が思うようにできないことに罪悪感と、もどかしさを感じながら出発の日を迎えました。ただ、行かなきゃよかったと思うような旅にだけはしないでおこうという思いを胸に。

この２度目の旅で得たことは、いかに自分が知ったつもりで生きてきたかということ。

フィリピンは英語が十分通じる国だと思っていました。去年、英語でのコミュニケーションに自分の語学力不足を感じることはありませんでした。ホストファミリーも、出張所で出会った人たちも、交流先で出会った先生や子ども達でさえも、流暢な英語を話す。５年生だったホストシスターもペラペラと。これが当たり前だと思っていました。しかし実際、今年交流した小学校の子ども達はこちらが英語で話しかけても、あっけらかんとした表情を浮かべている･･･。英語が思うように通じませんでした。ホストマザー曰く、教育の違いがあるようです。去年交流した小学校も、公立校だったのですが、今回交流した小学校よりもレベルが高い学校だったようです。そのため、英語教育にも力を入れており、経済的に余裕のある家の子は町の中心に在る小学校に通うそうです。私のステイ先から今回の小学校まで徒歩５分。しかし６年生のホストシスターはその小学校には通わず、わざわざトライシクルにのって少し離れた去年の小学校に通っているのです。なるほど、だから彼女はあんなに流暢に英語を操るわけだ。

マザー・テレサミッション施設。ここを訪問したのは帰国前日。フィリピン最後の夜はきっと暗い気持ちで食事をするのだろうという思いを抱いていました。事前研修で、日本のホスピスケアについての講演を聴かせていただいたのですが、途中聞いているのがつらくなるようなお話だったので。ふざけて、軽い気持ちで訪問するようなところではないのだろうなと思っていました。しかし、実際行ってみると、なんと Happy な方が多いこと。その施設におられる方はもともと路上で暮らしていて、結核で運ばれてくる人も多いようです。元気になって、またスラム街へと帰っていかれる方もいるようですが、それでも月に 10 人は亡くなるそうです。そんな死と隣り合わせの日々を送られている中、彼・彼女たちはなぜあんなにも Happy なのだろう。私が始めに話をしたおばあさんは、84 歳にして "I want to learn English."とおっしゃっていました。私との会話や世界各国から来られているシスターとのやり取りはほとんどが英語です。そのおばあさんは子どもの頃に親をなくし、それから十分に学校には行けなかったため、英語が思うように話せず、もどかしい思いを抱いておられるようです。だから、今からでも英語を学んで、毎日来るボランティアとお話をしたいのだと。また、その横にいたおばあさんは、私に「こんにちは」といってくれました。なんでも、別の日本人ボランティアに教えてもらったのだとか。

路上での生活は、その日食べるものにも困り果て、自分のことで精一杯。他者との思いやりあふれる関係はなかったのかもしれません。その日暮らしの路上の生活から、病気になってこの施設に運ばれる。そこには温かいご飯と暖かいブランケット、シスターやボランティアとのあたたかい関係、そして神。死が目の前に迫っていようとも、それだけでみんな幸せなのかもしれません。この施設に来る前に私が想像していたイメージは、なんて日本という恵まれた国で育まれた価値観からみたものだったのだろう。この世界には、私の想像をはるかに超えたものがいっぱい転がっている。私はどれだけ、一方からみたものの考え方しかしていなかったのだろう。そんな風に感じました。

他にも、フィリピンとメキシコとの関係、ホストファミリーについて etc…書き始めるときりがないほどです。今回の旅では、とにかく今までいかに知ったつもりで生きてきたかということを思い知らされました。どれだけ一方的に世界を見ていて、一方的にイメージを抱いて。これまでいろんな所に行き、たくさんの物を見て、それで自分はいろんなことを知った気でいたけど、私にはまだまだ知らないことがたくさんある。もっと知っておきたいことがたくさんある。そして、自分についてさえも知ったつもりでいたと思いました。12 日間、いろんな節々で自分を見つめなおしたり、自分について考えたり。日本での忙しい日々から離れ、自分からも一歩離れて自分を見つめてみる。そこでいろいろと考えさせられました。そんな思いを抱いた今回の旅。悩みながらも参加して、本当によかったと思います。たくさん迷惑をかけてしまったメンバーたち、フィリピンで出会った友人たち、そして、参加にあたり、快く賛成してくれた家族に感謝の気持ちでいっぱいです。

タガ～イッ!!

アジア学科　中国語コース　４回生
福西 穂高

はじめに、参加された皆さんお疲れ様です。フィリピンから帰ってきて、早くも数ヶ月が経ちました。皆さんは今回の「国際参加プロジェクト」をどのように感じていますか。

私は今回のプロジェクトは大成功だったと思います。みんな一人ひとり、個性の強いメンバーが集まり、その個性ががっちりかみあった理想の形だったのではないでしょうか。私は今回で二度目の参加となるのですが、澤山先生が最後の夜に言った言葉が未だに頭に残っています。それは、『この「国際参加プロジェクト」を立ち上げて、最終日の食事にみんなが揃うことというのは初めてです。』と言った言葉です。一人では成す事ができない、みんなで作った記録だからこそ、尚嬉しかったです。

このプロジェクトのすばらしいところは、出会い、そして世界の広さを体で感じとれることだと私は思います。なんたって日本での当たり前が通用しないのです。日本に住んでいてオカマの人から "I LOVE YOU" なんて言われることありますか。今でも目を閉じてプロジェクトの事を考えると、ステイ先のオマールの顔から、タガイタイの風景までリアルに蘇ってきます。驚かされることの連続で、私の堅い頭の中がどんどん崩壊していくのが分かりました。

その中でやはり一番の想い出は子ども達と接した時間です。フィリピンの子ども達は笑顔という最大の武器を駆使して、私たちを笑顔にさせてくれます。何をするのにも全力で楽しむ、だから初めてのリコーダーでも出来ないのが当たり前なのに、子ども達の懸命な姿を見て自然と涙が流れるのです。すごい心を打たれた瞬間でした。この子達ほど「素直」と言う言葉が似合う人はいないのではないでしょうか。

私たちは寝る場所、食べるものが有るのが当たり前だと思っています。しかし、フィリピンをはじめ他の国ではその当たり前が当たり前ではない国も存在しているのです。そこで私が思うのは「何に幸せを感じますか？」ということです。お金持ちの人の中には、車に幸せを感じる人も

います。服に幸せを感じる人もいるはずです。フィリピンの子ども達を見ていると、何にでも些細な事にでも、幸せを感じることが出来るといった感じを受けました。決して日本人と考え方が違うわけではありません。歌を歌うのが好き、踊ることが好き、お酒を飲むことが好き、ジョーダンも言う、友達を、赤ちゃんを、ペットを大切にする、私たちと変わらず一緒なのです。

強いて違う点を言うと、人と人との繋がり、関わりの深さかなと思いました。これを文字や言葉にすることは非常に難しいです。これは実際に肌で直接感じてもらうしかありません。言葉の壁なんて問題なしです。笑顔でつながるものがあるのです。このプロジェクトには100人参加するならば100人分のドラマがあるのです。みんながヒーロー、ヒロインになれるのです。是非是非参加してもらいたいものです。本当にありがとうございました。

【コラム】⑥　　言葉の壁

こんなものはほとんど存在しなかったと言いたいところだが、実際リコーダー指導の時、言葉に困らされたことも多々あった。子ども達は英語が大体分かるだろうと予想し、いざ乗り込んだ私たちであったが、英語には個人差があり、とても困った。

しかし、私たちもそんなことでへこたれる訳もなく、各自ホストファミリーにリコーダー指導の際に使えそうなタガログ語を教えてもらい、すぐに実践に活かした。

彼らフィリピン人は、日常生活はほとんどタガログ語であるが、英語もしゃべれる人が数多くいた。店の店員はほとんどが英語でオッケーであった。ただ困ったのは、私たちが日頃あまり英語で会話することもなかったので会話に慣れるまではしんどかった。

ここで言葉の壁なんてないと断言したＨ高氏の話を一つ。彼はコミュニケーションにおいてただ一人、ほとんど日本語で通していた人物である。しかしなぜか彼の言葉は子どもたちや現地の人々に伝わっているように見えた。彼には何か人として温かいものを感じた。そして気負いも何もなく話すから温かく、相手も楽にコミュニケーションできるのではないかと思った。最後に彼との貴重な対話を。

私　：「穂高さん、全部日本語っすか？」

Ｈ高氏：「そや。日本語でも通じるで。大事なのは“心”やからな。」

フィリピンに行って

アジア学科　中国語コース　2回生
前田 紗知

時間がたつのは早いもの。もう、フィリピンに行ってからどれくらいの時間がたっただろう。フィリピンにいた時、「日本に帰りたい」と考えてしまうこともあった。けれど、今思い返すと、楽しいことしか思い出さない。「オチョオチョ～」、「スパゲッティ」、「タクタクモ～」、と言っている子ども達の声が聞きたい。向こうに行きたい。また、みんなに会いたい。あの、子ども達の笑顔が、サンタローサの人々の笑顔が懐かしい。不思議なことにフィリピンが恋しくて仕方が無い、今日この頃。日本では考えられないほど、人と人の距離が近かった。それが懐かしい。

私は昨年のインドネシアでの「国際参加プロジェクト」に続き今回で2回目だ。だから、どんなに文化が違っても驚かないぞ！という変な自信があった。しかし、最初から驚くことが多々あった。水洗だけど自分で水を汲んで流すスタイルのトイレ。見た瞬間、ああ～、懐かしい～と思ってしまった。洗濯は手洗いで、最初は自分でやっていた。そしたら、それを見ていたホストファミリーが、その洗い方はおかしい、と言って結局洗ってもらうことに。慣れない事をするのは大変だ。また、子どもの数が去年と比べ物にならないくらい多い！去年インドネシアで無理は禁物だな、と学んだはず。しかも、日本人だと言うだけで皆サイン攻めに！にもかかわらず、私は疲れるまで子どもたちの相手を。というか、ほとんど踊っていた…ような気がする。日本では人前では絶対やらないぞ、と思っていたようなことを。今考えたら、自分がアホみたいに思えてくる。そして、メンバーにかなり迷惑をかけたなぁとも、つくづく感じる。

英語が通じる、ということも去年との大きな違いだった。ただ、私の英語は全然だめで、話しても「？？？」という反応が返ってくることも少なくなかった。でも、下手な私の英語を理解してくれて本当に嬉しかった。特にホストファミリーにはとても感謝している。やっぱり英語はしっかり勉強するべきですね。悲しいことに子ども達といい勝負をしていた私の英語力であった。

去年と大きく違うこと、それは、私が苦戦したリコーダー指導。誰かに何かを教えると言うのがこんなに大変なことだったなんて思ってもいなかった。本当に自分はしっかり教えることができているのだろうか、と悩んでしまうこともあった。それでも必死に頑張ろうとする子ども達の姿は嬉しかった。と同時に、教えてもらうことの有難さを感じた。

確かに辛くなることもあったけれど、本当にフィリピンに行ってよかったと心から思えた。しかし、その反面後悔することもあった。もっと自分の意見を言ってみるべきだった

と感じた。自分の悪いところは自分の殻に閉じこもってしまうところだ。そしてあまり意見を言うことができない。もっと自分を主張してみるべきであったのではないだろうか、と考える。しかし、このことを考えることができたのもこのプロジェクトのおかげだ。

私が落ち込んでいた時に励ましてくれたメンバーのみんな本当にありがとう！すこし疲れて寝ていた時に、心配してくれたメンバーにありがとう！私を受け入れてくれたホストファミリーにありがとう！私の下手なリコーダー指導につきあってくれた子ども達にありがとう！別れる時に泣いてくれた子どもにありがとう！いろいろと注意をしてくれたメンバーにありがとう！千羽鶴を作ってくれた人にありがとう！リコーダーを寄付してくれた方々にありがとう！そして何よりこのプロジェクトに参加させていただいてありがとうございます！

みんなに会えてよかったです!!

【コラム】⑦　「オチョオチョ」、「タクタクモ」、「スパゲッティー」とは？

これは、言ってみればダンスの一種だ。そしてこれを踊るだけで人気者になれるのだ！というのは冗談ですが、半分本当。フィリピンで流行っているダンスみたいなもの。

特に私たちが訪れたサンタローサでは、子どもから大人まで（多分）みんなが知っているメジャーなダンスなのだ。だからこれを踊れば子ども達は大喜び。ただ子ども達のほうが遥かに上手く踊るのだけれども。ちなみに上の写真はスパゲティーを踊っているところ。

本当にフィリピンで有名なダンスなのかな、と思いフィリピン人の知り合いに聞いてみると、「タクタクモ？なつかしい～昔、流行ったなぁ」と言われた。

なんだ、結構昔のダンスだったんだ。それにスパゲティーにいたっては知らないと言われてしまった。

価値観を変えられた12日間

ヨーロッパ・アメリカ学科　英米語コース　3回生
松井 さきの

これまで発展途上国や国際協力には興味を持っていたが、なかなか行動に移すことができなかったので、このプロジェクトへの参加が決まった時は本当に嬉しかった。海外に興味を持ち、メディアや本を通じて知識を集めている中で、実際に経験してみたいという思いがずっとあったからだ。

日本国内での事前研修を終え、いざフィリピンでの活動が始まると、日本との違いに驚き戸惑うことが多かった。テレビの中で、あるいは写真の中で見ていた風景そのままの光景が目の前に広がっていた。当たり前のようにヘルメットを着けずにバイクに乗っている人々（3人乗りも当たり前！）、衛生状態の悪さ…。それより何よりフィリピン人の笑顔や心の温かさに私は驚いた。彼らのホスピタリティの高さは前々から聞いていたが、実際に生活する中で客人に喜んで貰おうという心遣いを直に感じ感動した。

また、日本とはまったく違うライフスタイルを持っている彼らの生活はとても興味深かった。自分自身も彼らと共に生活していく中で、今まで当たり前に思っていた常識が気持ちよく砕けていくのがわかった。毎日親戚や家族、友達と夕食を食べ、のんびりと楽しく生活している彼らは日本での自分に疑問を投げかけるのに十分だった。毎日の予定に追われ、余裕もなく過ごしている日本。経済的には確かに豊かかもしれない。けれども、彼らの心の豊かさと比べれば明らかに劣っていると思った。

フィリピンで暮らしていく内に、「こうしたらもっともっと素敵な国になるのに」と思うことがたくさんあった。人々が何の抵抗もなく使用済みの食用油を流したり、ごみを道に捨てたりする光景は衝撃だった。汚染された川に飛び込み、遊ぶ子ども達。彼らはそれがいけない事だという事を知らないのだ。椋野先生主催の石鹸作りセミナーはその改善策の一つであったが、このように日本が知っている知識をもっと教えていけたらいい

と感じた。そしてまた、日本がフィリピンの美点を学ぶ。そうしたら、もっといい明日に繋がっていくと思った。

小学校でも、自分にとって考えさせられることが本当に多かった。話には聞いていたが、毎朝の国歌斉唱は迫力満点だった。日本でこの行事が行われたら問題だろうし、気味悪く感じるだろうと思う。しかしフィリピンでは不思議と「この人達はフィリピンを愛しているんだな」と素直に感じられ、またその点で日本と比べる自分がいた。また、リコーダー指導をしていく内にどこか違和感を覚えることが多かった。その原因は3年生での文化交流の中で分かった。彼らは先生のすることを、そっくり模倣するのだ。その事実は本当に大きなショックだった。フィリピンでは教師が子ども達にとって絶対的な存在で、中には棒を持って子ども達を叩く教師もいて、その姿は衝撃的だった。フィリピンの教育制度や、教育に対する価値観をもっと知りたいと思った。

マニラに移ってからも考えさせられることが多かった。確かに豊かだが、日本と同じ都会の問題が蔓延している。思わず目を背けてしまうことも度々あった。

本当に短い間だったけれど、このプロジェクトに参加して、学ぶことや感じること、考えさせられることがとても多く、自分にとっても大きな前進になったと思っている。

何よりも今はお世話になったサンタローサ出張所の皆さん、シナルハン小学校の皆さん、そしてホストファミリーにお礼を言いたいと思う。本当に素敵な人達と日々を過ごせたと思うし、何度ありがとうと言っても足りない。参加して本当に良かった。

来年も「国際参加プロジェクト」が続くことをお願いして、最後としたい。本当にありがとうございました。

【コラム】⑧　　交通手段

私達のホームステイ先と活動の拠点であったサンタローサ出張所は、そんなに離れていませんでした。しかし時間がかかる人は「トライシクル」という、簡単に言うとサイドカー付きバイクタクシーを使いました。これは一人約7～10ペソ（約30円）で乗れます。そんなに遠くない場所に行く時に利用するものです。現地の多くの人は、ほとんどの人が「トライシクル」か「ジープニー」という乗り合いジープで移動します。

現地には信号がなく、かなりの交通量があるので、日本人の私達は初めは非常にドキドキしながら乗っていました。しかし彼らのドライビングテクニックはかなりのもので、事故はめったに起こらないといいます。むしろ信号のある日本の方が事故が多いんじゃなかと思うぐらいでした。

フィリピン滞在を通して

ヨーロッパ・アメリカ学科　英米語コース　4回生
村田 明彦

昨年に続き今年も8月18日から29日まで、天理大学「国際参加プロジェクト」の一員としてフィリピンのサンタローサとマニラに行ってきました。参加動機は単に、昨年参加してフィリピンの素晴らしさを体感し、もう一度訪れたいと思ったことと、昨年学んだことを今の自分はどれだけ活かせるのか試したかったからです。現地の生活に適応する力、コミュニケーションをどれだけとれるか、またそれらを踏まえて昨年よりも広く深くフィリピンを知り、将来自分が目指している国際交流・国際貢献や天理教の海外布教への土台をより大きくしたいと考えていました。

ひと口にフィリピンの魅力と言ってもなかなか言い表せないのですが、私がいつも感じることは、人々の温もりです。道行く人が必ずといっていいほど、にこやかに視線であいさつを交わし、一度話すと親友かのように親しげに接してくれるのです。日本ではもうなかなか感じることの出来ない雰囲気がそこには漂っていて、日本に帰った今でもフィリピンの人達の気質は、私を惹きつけて止みません。そんな人柄、土地柄のフィリピンであっても、物事を始める時はなかなかすんなりとはいかないものでした。ホームステイ、小学校でのリコーダー指導、そしてマニラでの体験…本当にかけがえのない体験ばかりでした。少しずつですが、紹介させて頂きます。

まず、ホームステイですが、今回の滞在は昨年とは違うお宅にステイさせてもらいました。Aliganay Familyのお父さんJunior、お母さんAidaに長男AJ・長女RachelそしてAlvin（次男）の3兄弟が僕を迎え入れてくれました。ホームステイが始まって最初に仲良くなったのは、お父さんとお母さんでした。というのも私があまりタガログ語を話せず、英語ばかりでコミュニケーションをとろうとしていたせいで、なかなか子ども達とはなじめずにいました。それでは駄目だと思い、3日目の夕食の時にタガログ語のテキストをもっていくと子ども達がすごく喜んでくれて、ご飯を食べる暇もくれない程の勢いで、3兄弟主催の即席タガログ語講座が始まりました。食器や家具に始まり、身の回りのものから、逆に日本語で何と言うのか教えてくれと会話が弾み、それがきっかけとなって一気に仲良くなっていきました。基本的にフィリピンの子ども達は大勢で遊んでいて、近くにメンバーの美和がステイしていたので、そこの子ども達も含め、いつも7人くらいでにぎやかに遊んでいました。あまりにも元気なので、疲れて帰宅した時などは「静かにしてくれ」なんて思う日もありましたが、いつも元気で明るい子ども達は心を晴れやかにしてくれました。両親は共働きでなかなかゆっくりと話したりは出来なかったのですが、それでもいつ

も気を遣って下さり、政治の話や仕事の話を聞かせてくれたことは、今でもしっかりと心に残っています。ホームステイを通じて感じられたことは、フィリピンは親族のつながりが非常に強いということです。常に人とのつながりを希求しているかのようでした。正直うらやましいなとさえ感じました。「他者への献身」という言葉が本学の目標としてありますが、その姿勢の根本には、常にそういった心構えが求められるのではないかと思います。

次にシナルハン小学校でのリコーダー指導についてです。

私たちは4・5年生を対象に指導させてもらいました。ここで一番の問題となったのは、言葉の壁でした。リコーダーの吹き方から、指の構え、楽譜の読み方、そして挨拶にいたるまですべて英語を介して行ったのですが、中には英語が得意でない子も当然いて、伝えるということの難しさを本当に実感した瞬間でした。メンバーでミーティングを重ね、そして先生やホストファミリーにタガログ語を習い、それらを駆使しながら少しずつ練習を進めていきました。連日続く炎天下に加えて、慣れない言葉を使って子ども達に気配りしながら練習を進めることは、心身共に本当に大変でした。それでも私たちの励みになったのは、子ども達の笑顔であり、人々の温かさでした。大して人に貢献できるような知識や技術もない私たちが唯一させてもらえることが、リコーダーの指導であったわけですが、逆に私たちの方がたくさんの喜びをもらってばかりでした。

数日間の練習の後、ミニコンサートを開催させてもらいました。上手くいくのかとても不安でしたが、子ども達は一生懸命演奏してくれて見事に両学年とも上手に発表することができました。また、小学校の先生方のダンスや僕達のダンスとリコーダーの発表も無事に終わり、感動で心が一杯でした。私個人としては、発表会の司会者を務めさせて頂き、普段できないような経験を積ませて頂いたことは嬉しい限りでした。リコーダーは小学校に寄付してきたのですが、今後も音楽を通して小学校の教育の発展の手助けとなればと思います。先生方に楽譜をお渡ししたので、今後私たちが残したものがどのように実っていくのか非常に楽しみです。

そしてマニラでのマザー・テレサミッション施設 “Formation House” というキリスト教の施設を訪れた時のことについてです。この施設は死を迎える方々が入られる施設で、町中でホームレスだった方や、身寄りの無い方が生活されています。中には元気になって退院される方もおられますが、シスターのお話によると月平均10人程は亡くなられるそうです。私たちはそんな施設でボランティアとして半日お手伝いさせてもらいましいた。最初は洗濯をさせてもらったのですが、隣のフィリピン人のボランティアが、私のことを

すぐにブラザーといって親しみを込めて呼んでくれたことは、フィリピンの陽気さというか国民性を身近に感じた瞬間でした。

しかし、対照的に院内はすごく落ち着いた雰囲気で、シスターに「何をさせてもらえばいいですか？」と尋ねると「ただ彼らと話してあげて下さい」とだけおっしゃいました。数人の方とお話させてもらったのですが、特に印象に残っているおばあちゃんのことを話します。そのおばあちゃんは、最初名前を教えてくれませんでした。そしてただひたすら、「むぅ～」と繰り返されるのです。最初は意味がわからなくてたじろいでいたのですが、よく見るとおばあちゃんは寝たきりですごく腰が曲がっておられました。すごく迷ったのですが、足をさすらせてもらうとすごく喜んでくれました。そして足をマッサージしてストレッチしてあげたのですが、その時になって初めて「むぅ～」の意味が、英語の「MOVE」だということに気づきました。すごくはがゆくて悔しい気分になりました。聞き取れなかったというより、言葉が通じることの大切さが本当にしみじみと伝わったからです。おばあちゃんは、マッサージをしている間に自分に身寄りがいないことや、今考えていることなどを話してくれました。しかし僕が言うのも恐れ多いのですが、そのおばあちゃんは、英語はそんなにお上手ではなく、加えてスペイン語なまりだったので、お話を聞かせてもらうのはとても苦労しました。その時に思ったのが、自分がタガログ語を話せたらいいなということでした。意思疎通をしっかりしたいと心から思いました。言葉の大切さを実感できました。

この施設のシスターは多くの国から集まっており、患者の方々のお世話をされています。自分が一人の天理教信者という視点から見て、このような活動が天理教を通して出来ないのだろうか？と考えるきっかけとなりました。施設から出る前に日本人のシスターがおっしゃっていた「愛」をもって人に接しておられるという言葉がすごく印象的でした。

人と人との心の距離が近い！というのがフィリピン滞在を通して感じたことです。国際協力だけでなく、日頃の生活や宗教・勉学においても、その目的を見据える上で決して欠かすことのできない大切なものを、学ばせてもらえました。本学のモットーである「他者への献身」の底流には常に人と関わることへの喜び、人と繋がることを求める心の持ち方があるものと考えます。いかにこれからの人生に活かせるか、人との関わりの中に持ち込めるかはわかりませんが、滞在を通して学んだことを忘れずに、生活していきたいと思います。

出会い、そして成長

ヨーロッパ・アメリカ学科　英米語コース　1回生
森 雄飛

私はこの「国際参加プロジェクト」に参加し、日本では絶対に味わうことのできない体験をし、また多くのことを考える機会を頂きました。

まず私が、このプロジェクトに参加しようと思った理由は、今まで私は世界に興味を持っていましたが、海外に出たことはありませんでした。そこでこのプロジェクトのことを知り、自分の視野を広めるためにもすぐに行くことに決めました。

1 回生で行くのは私だけだったので準備の初めの方はとても孤独感を感じていましたが、みんないい人ばかりですぐに馴染むことができました。今思えば本当にいい人達に出会えたんだと思います。そうして色々と準備を進め、私達はフィリピンへと発ちました。

私のフィリピンの第一印象は、まさに格差社会の典型だなといったものでした。マニラでは普通の住宅に高い柵があり、貧しい人達は区画化された場所に詰め込まれたような印象がありました。でもフィリピンの人達は笑顔が多く、とても明るく親切な人が大半でした。それはこのプロジェクトの間ずっと思っていたことでした。

そして、このプロジェクトの目的であるリコーダー指導では、現地に着いてから多くの予定変更がありました。一番困ったのが指導の日数が 5 日間から 4 日間に減ったことでした。ただでさえできるのか不安だったのにさらに不安が増しました。しかし班ごとにミーティングをし、予定も考え直してそれぞれが指導に臨みました。指導初日の朝礼時、小学校の先生や子ども達の大歓迎にとても気持ちが高揚しました。その後ついに指導が始まり、最初のクラスは自分達が予想もしていなかったほど上手くいきました。その勢いのまま 2 クラス目に行き、1 クラス目までとはいきませんでしたが、まずまずの感じで進みました。問題は 3 クラス目でした。自分達が予定していたところまで全然進まず、かなり焦りました。そこからミーティングをしてどんな風に指導を進めるか、クラスごとの指導方法など色々と練り合いました。そうしてあっという間に 4 日が経ち、全クラスが演奏できるまでになりました。そこにたどり着くまでには本当に苦労の連続でした。しかし発表会での子ども達の演奏が終わると自分の中では嬉しさもありましたが、それ以上にホッとした感がありました。それまでずっと、「子ども達はちゃんとできるかな。発表会に間に合うんかな」など、心の中に色々と不安があったので、終わった時には解放感に包まれました。子ども達も喜んでくれたのでよかったです。

またホームステイ先では、初めのうちは生活感や食生活の違いに驚かされて、とてもしんどかったです。でも慣れるのは意外と早かったような気がします。それはホストファミリーがとても親切で面白かったり、いつも私のことを気にかけてくれたり、近くに住んでいたメンバーの助けもあったからです。また、家の娘さんと毎晩遅くまで喋っていたのはとてもいい思い出です。それだけに別れる時は泣きそうになりました。お母さんは大泣きしていました。自分のためにそんなに泣いてくれて本当に嬉しかったです。まさかこんな素晴らしい出会いになるなんて思いもしなかったです。また、一緒に生活していて思ったのは、フィリピン人は家族や親戚をとても大事にします。これは日本人も見習うべきだと思いました。

最後に訪問したマザーテレサのミッション施設では、そこにいるほとんどの人が死を待っている人達で、行く前に私はどんな顔をして話したらいいんだろうと考えていましたが、施設に着くと、そこにいる人達は笑顔がとても素敵で快く話をして下さいました。ここでは純粋な人の笑顔に触れることができ、自分がいま元気に生かされている喜び、元気な自分に「今」何をできるのかなど多くのことを考えさせられました。そして、学んだ中で一番大きなことが、「今」という瞬間を大事にしなければならない、ということを学びました。

この 12 日間はその時その時が勉強だらけでした。一緒に行ったメンバーから得ることも多くあり、フィリピンに行かなければ学べなかったこともとても多くありました。ここには書ききれないことばかりです。その中でフィリピンに行ってこれだけはできたと断言できることがあります。それは「成長」です。本当に様々な部分で成長させていただきました。自分でもこんなにも得られるものがあったなんて思いもしなかった程です。

これからはここで学んだものをさらに飛躍させ、多くの人の役に立てるよう勉学に励みたいと思います。

Maraming salamat po!!

第2部

English Message

英文メッセージ

Participant's impressions・・・・・・・・・・・・・・・54
Message from our host families・・・・・・・・・・65
Message from Mrs. Noeme Kimoto ・・・・・・67

Participating in a Project in the Philippines.

Mayumi Mukuno

I was able to meet a lot of Filipinos. Every Filipino was so kind and always wore a friendly smile. Laughing is a part of their lives. It seems like a natural thing for them.

I felt that the Philippines is a strong country. I also observed many unusual things. I think there are so many differences between Japan and the Philippines; I want to continue discovering why.

Finally, I was thankful that I had the chance to join the project, and I want to extend my gratitude to my host family and OYAGAMISAMA, the God of good health. Thank you.

The children in the Philippines

Miwa Mukuno

I experienced a lot of surprises and pleasures. I was looking forward to teaching the recorder to the local school children. I chose to keep two points in mind. First, I wanted to discover the potential and talent of the pupils. Second, I wanted to constantly monitor their situation. During the flag ceremony, they put their hands on their chest and cheerfully sang the national anthem. I was so impressed seeing this kind of behavior. It was difficult for the children to play recorder for the first time, but they practiced hard to learn the techniques. My students were all wonderful.

However, on the third day of the project I got tired. The children's facial expressions became less enthusiastic than before and their concentration deteriorated too. Because of this, I realized that if I faced them with a serious attitude, then they would surely respond in a serious manner. This was the lesson I've learned from my experiences in the Philippines.

All the classes` pupils were able to play well at the concert. I was very impressed with their success. Thank you very much to every pupil of Sinalhan Elementary School.

International Exchange through Music

Miyuki Ikezaki

The difficulty of teaching the recorder was beyond my expectations. We had to teach "The Frog Song " to the pupils of Grade 4. The song was very easy, but it was a new thing for the children. And also, this was our first teaching experience.

We had encountered so many problems. But the pupils` efforts bore fruit at the concert. I thought that everything was successful in this program. Thank you for everything.

My Treasure

Mayuko Kubo

My participation in this project led to the most unforgettable summer experience of my life. I had kept on thinking about myself before going to the Philippines. What should I do and what do I want for now? These questions bothered me for many nights.

How to teach the recorder was the most worrying thing. We did our best to teach, and every pupil tried to practice hard. At the concert, everyone played well and their faces were showing traces of happiness. And I felt that teaching something to children is a worthwhile undertaking. Indeed, teaching is a challenging career. The members of my host family are the most important people for me. "Daddy Renato, you always looked after me. Let's have a wonderful time together again. Mom Geraldine, your home cooking was the most delicious for me. I am considering studying Tagalog next time so that I can spend a lot of time conversing with you. My sister Kim, you always shared happy moments with me. Shy boy Sandra, Do you still remember me? I was delighted that you always played with me. Rest assured, we will play more together". I am really grateful to my host family. Thank you very much.

I love Filipinos and their hospitality. Also, they always look happy. I would like to keep thinking about real happiness.

Finally, thanks a lot to Rev. Ueda, Rev. Kimoto, Mrs. Noemi. I will never forget your kindness. Words are not enough to thank you. See you again. HANGANG SA MULI!!

Living in Sta. Rosa

Motokazu Kouno

This was my first experience of going abroad. Honestly, I didn't have any special interest in the Philippines. But now I can say that the Philippines, especially Sta. Rosa, is indeed a wonderful place for me.

During my stay in the Philippines, I realized two important things. First, Filipinos are very friendly and so kind. When we collected waste cooking oil for the seminar on public health, they helped us a lot. Secondly, English is indispensable to communication. I have difficulty in communicating with foreigners because I cannot speak English very well. Now, I understand how important the language is.

I am grateful for the care and love received from my host family, Hydee, Jenifar, Nanay, Ate Mayat, and Mark, Maraming Salamat Po. I will defenitely see you all again.

The Filipino peoples' warm heart!!

Miyako Sato

I went to Indonesia last year as a member of the International Participation Project and learned many things. This year, I decided to join the project in the Philippines because I wanted to teach the recorder to the local children. I also wanted to know their culture.

Teaching the recorder was very hard. I was worried about many things. It was the first time and we couldn't speak Tagalog very well. We often had meetings to solve these problems.

I observed that the Filipino heart is very warm and the children are so pure. They were very kind, just like my own family. I felt very comfortable with them. I want to go back there again.

Finally, my gratitude is given to those who supported this project. Thank you very much.

My Unforgettable Summer

Kanako Zayasu

I learned so much through various things, such as teaching the recorder, the home stay program, sports exchange and volunteer activities at the Mother Teresa facility this summer. I would like to continue to deepen my knowledge, based on this experience. Thank you very much for everything!

Thanks to My Family and Friends in the Philippines!

Mioko Takehira

It was my second time to visit the Philippines. I got a new family and many great friends. Actually, they were not my real family, but I felt that I have a family in the Philippines, too.

My foster dad loved electrical appliances like cell phones, PCs and the like. He told me many things not only about their family but also about the Philippines. My foster mom, on the other hand, was good at cooking. She prepared yummy and palatable dinners all the time. My Filipino sister who is the same age as myself, was kind enough to care for me all the time. She always took me to the mission place of Tenrikyo by tricycle. She was talkative, too. When I was at home, she kept on talking and talking and talking to me about her school life, friends and other things. But she was very shy when other Japanese were around. She preferred to stay beside me all the time. My little Filipino brother loved to play computer games. He taught me how to play the games and we both played together. I like them very much. I love all the people whom I met in the Philippines and I do appreciate the way they accepted me as part of their family. I will certainly miss the Philippines. I'm sure if I have a chance someday, I will go back again to the Philippines.

Taga~~~i!!

Hodaka Fukunishi

It has been seven months since I came back from the Philippines. How do I feel about the international project this time? I think that the project was a big success. My college students who have unique talents made a great and excellent contribution to the project. I can still remember a sentence which my teacher told us, "It is the first time to have dinner with all participants since this project started in 2000."

There are many wonderful aspects to this project. We were able to meet many great people and get to know a different world. Whenever I close my eyes, all of my wonderful memories with my host family or the scenery of Tagaytay float through my mind. The children made us laugh with their big smiles. Also, they tried to do their best and enjoy everything. That's why they cried naturally when they couldn't play the recorders. When I saw their tears, I was moved very much because they were very pure and honest. I have never seen such pure and honest pupils.

This project makes a separate drama for each participant. That's why I recommend all people to join this project. Thank you very much.

I Appreciate Everyone

Sachi Maeda

It's too early to have memories; I`m thinking about how long it has been since I went to the Philippines. I had very strong confidence in myself that I wouldn`t be surprised by anything because I participated in a similar project in Indonesia last year. However, I was really shocked! I encountered cultural differences, for example, the toilet type and usage, language and so on. And I'm glad to have met so many people, i.e. group members, host family and the people of Sta. Rosa. I'd like to say "Thank You" to everyone, for everything. THANK YOU!

My Twelve Days in the Philippines

Sakino Matsui

When I decided to join the International Participation Project in the Philippines, I was so happy because I was really interested in foreign countries. I was surprised about the differences between Japan and the Philippines. The most amazing thing is Filipino hospitality. Filipinos always make their guests feel welcome and happy. That truly impressed me.

In Sinalhan Elementary school, I was also surprised many times. One exciting event was the singing of the national anthem in the morning. I realized that Filipinos truly love their country.

I learned many things and grew spiritually rich by joining this project. I wanted to say "Thank you" to my host family, Tohon Tenrikyo Church and Sinalhan Elementary School. Thank you very much!!!

I hope that this project will be held next year. Finally, again, thank you very much for my twelve days experience in the Philippines.

Through My visit to the Philippines

Akihiko Murata

My motivation was simple. I wanted to devote my knowledge and experience to this project. Also, I desired to improve my communication skills to do an international cooperation and overseas mission of TENRIKYO.

Talking about my home stay, the members of my host family are Junior and Aida and their children, AJ, Rachel and Alvin. I used my Tagalog textbook to communicate with the children. When I came home exhausted, I noticed how noisy they are. But their cheerful smiling faces made me happy and relaxed. That impressed me a lot. I recognized that they have strong relations between family and relatives. They seem to desire to be close with anyone.

Finally, I would like to say "Thank you" in all sincerity to all of the staff, teachers, friends, and to the Philippines. Malaming salamat po!!

My Growth

Mori Yuhi

Before going to the Philippines, I felt some nervousness. My first impression of the Philippines was very nice. I noticed that people in the Philippines are always smiling. In contrast to this bright appearance of Filipinos, the country is confronted with serious problems like the wide gap between the rich and the poor.

When we taught the recorder, we encountered some problems. At first, the children seemed to have some difficulty in understanding our explanations in English or Tagalog. However, they really did their best to play the recorder. Thanks to their efforts, "The Frog Song " was magnificently played at the mini concert on the last day.

I could not forget the first encounter with my host family. There are ten people in my host family. All of them were so kind. I thought this is so-called Filipino hospitality. What impressed me more was that they established a good relationship with one another. This situation was similar to that which exists between other families in Santa Rosa, too.

As I passed by in the street, people were engaged in happy conversations and they were always smiling. It was such a beautiful sight for me. So I felt very lonely when we were about to leave.

I tried to memorize every moment of the experience. After we finished the project, I realized that the most important thing is the spiritual growth I underwent. At first, I never thought that things would go this far. I wanted to keep the experiences alive forever. Thank you very much for the opportunity. Maraming Salamat Po!

Learning from the Philippines

Kazuko Mukuno

I have been constantly thinking, how the younger generation will be able to recognize the importance of exploring the world and mingling with other people, after I participated in the last year's "Philippine Project '06". I still felt and thought the same way, although it is certainly easier said than done.

The Philippines is a mysterious country and I've been so fortunate to encounter many compassionate people. I've also been able to feel

something very important. Within Southeast Asia, the working-class of the Philippines has a certain richness that we in Japan, a so-called first-world nation, can certainly learn from. To practice in real life what Tenri University professes, "Giving yourself to others" is certainly connected to this.

In conducting this year's International Participation Project in the Philippines, the preliminary seminars played an especially important role and I was particularly grateful that the seminars were very rich in content. Though I had a blast playing the international trade game that students from the Kobe Gakuin University taught us, the seminar also provided a learning experience for me. We also surprised the music instructor Mr. Yoneda of Tenri High School by how fast we all learned the recorder. When the time came to teach the Filipinos how to play the recorder, the students were able to do it alone. Dr. Shinomiya, head of hospice at the National Central Hospice, Relief Care Division and Ms. Matsuo, hospice nurse of Tenri Yorozu Consultation Hospital Hospice Care, humbly lectured on hospice care and taught me to be grateful about life while also learning about the point of visiting the Mother Teresa Mission Facility. Mr. Tsuji, Visiting Researcher, National Ethnography Museum, traveled countless times from afar to give his wonderful Tagalog lessons. Greetings in Tagalog are important and difficult—I had trouble memorizing them, so I am hoping to get better next year.

Each and every seminar is indispensable and it is not an exaggeration to say that the success of the International Participation Project rests on the preliminary seminars. Personally however, attending the seminars during the gap hours of my daily business was certainly not enough, and I am regretful for a number of things. I promised myself that I would learn English and be able to greet people in Tagalog. But seeing neither language improve, even as we approached the start date, gave me the sweats.

Taking into account lessons learned from last year, I proposed to the members that each should be responsible for keeping his/her own records and forming a report. Specifically, each person has to take down in detail half a day's activities. I am looking forward to seeing the reports.

For sports, the competition's real uniforms blitzed ours last year, so we decided to do something about it this year. We cannot buy sports wear because it is expensive. So we thought, why not make it, and then we started doing it. We bought the fabric, sewed and designed it all; though we had the experience, time constraints put tremendous pressure on us. The

students pulled their weight during the lettering stage, and we completed them before we left for the Philippines.

Even though not included in the program, we also prepared and completed certain activities. We also had an interest in the local's sanitation situation. Making soap using used oil and roach poison using boracic acid (used anti-roach products) is popular among Japanese wives and University club members for its effectiveness.

We also witnessed an unusually high case of diabetes, and because of prohibitive medical costs, patients' conditions tended to deteriorate further. Therefore we also attempted to instruct the populace on diabetes.

Recorder lessons were the main focus of the project, and they required a lot of stamina and we expected many tired people. Amidst the heat and language barrier, we needed to teach the kids who've never seen a recorder before, to play a song by the end of our stay. Depending on the instruction, the goals might not be fulfilled. Amidst that kind of pressure, I didn't really think we could get to the soap making, roach poison, or diabetes instruction—those were there just in case we had some time left over.

However, the members were surprisingly energetic and aggressive, bringing the recorder instruction to a success. Each member certainly experienced a tearjerker moment that has now become his/her treasure.

After the recorder instructions, they cooperated in bringing life to the event.

Mr. Sumihara and Mr. Sawayama made English fliers that everybody brought to their host families and asked for their participation. The host families would provide the used oil, and on the eve of the event all the students and teachers went around to each host family to collect the oil—an image that has left a lasting impression on my mind.

On the day of the event, with the support of the locals, we were able to borrow everything from a wide lawn, table and chairs, and even mikes—the kind of generosity you would never find in Japan. The turnout was larger than we expected; in the crowd were adults, children, seniors with cane sticks, and people with babies in their arms. We were unable to draw up a detailed plan so it wasn't as smooth as we wanted it to be but I think we were able to achieve some nominal success in spite of this.

There was one program you cannot miss in the International Participation Project. It was the volunteer activity at the Mother Teresa Mission Facility Hospice, or "Formation House," located at Tondo, Manila, where students interacted and spent quality time with the people in the hospice. In Japan, it is sometimes referred to as "The House for Those Who

Wait for Death." In the preliminary seminars, we learned, philosophized, debated, and cried mid-class about "living life's end." The hospice was a heavy topic so I didn't know what to expect but inside, time stood still and it was blanketed with warmth. It was the same feeling I felt when a year ago I visited the disabled children's facility called "Home of Joy," located next to the hospice.

There were many people who were over 60 years old. Finding out that I was Japanese, they beckoned me over, rubbed their cheeks, shook my hand, smiled and rejoiced. They all waited for me to come to their bed. There was a person who sang a song like a songbird, while another said "I was in Japan for two months, teach me Japanese," so I wrote out a greeting in romaji. Everybody was so energetic that I almost forgot where I was. This wasn't a place where I should be cheerful because we should never forget that these people had lived tumultuous lives. We cannot imagine what these people have gone through, and though it's impossible to climb into the shoes of a Filipino, the best thing we can do is to treat them with respect and offer them kind words and give them a little peace of mind; that's the greatest gift we can give.

On our way out, we met a Japanese Sister. She told us with a lively face that it brings greatest joy when you help those who are sick and are lost to God—at that point I realized the reason why these people, who are ill, could spend their final days in peace and happiness. It was because they were supported by Sisters like this one, and I'm sure everybody felt that the residents of the hospice were indeed very happy.

During the orientation ceremony, I said, "Before participating, your feelings now are symbolized by the colors white, gray or black; but as we are about to begin our second trip, I feel like they have gotten a bit paler." There's a lot that you can discover on your first trip. But there still so much which I don't know. I realized how big the world is and, at the present, why there are so many people living in the world right now.

This is something you learn when you step out overseas. As a Japanese, you can't really do anything in the Philippines. But at least I am now conscious about trying to understand other people.

Participating in last year's Philippines Project '06 made me realize that I needed to know more about the country in detail. However, I regret participating again this year without having done any independent research. Last year time flew because everything was a memorable experience.

I felt it's my duty to pass on the moving experiences I've had. So before I went on this year's trip, I told my story to my family, friends,

co-workers, and social worker acquaintances. When they listened to me, I felt a slight sense of achievement. That's just pleasing yourself you might say, but I do not think so.

As I was telling the story, I realized that the Japanese still have a bad impression regarding the Philippines. This is the resulting baggage of history and there's not much can be done about it. But by the time I was done talking, I was comforted when people said they were moved by the stories and that they understood the greatness of the project I had undertaken and thereby restored the good impression of the Filipinos. Right now I just need to learn more about the Philippines.

Message from our host families

ホストファミリーからのメッセージ

Miss. Mayumi Mukuno is a good person. She is friendly. She loves children. Miss. Mayumi is a very simple girl and very good teacher. All members of the family is happy because Mayumi became a part of Barrinuevo family, and thank you very much to all your gift to my son Mhayah, and thank you very much to all Mukuno family. Come back again Mayumi. Take good care of yourself. God bless you.

Jessie Arrinuevo

In my own opinion, Mayumi Mukuno is a very respectful teacher. She knows how to deal with other people even if they were kids or not. We are very happy to have you in our family but it was only very short time. Mayumi, you are a very simple for me and don't forget BARRINUEVO FAMILY and all friends that you met here. We thank you Mayumi to all the things that you've thought as even you are Japanese. You respected us as a human being. Again thank you very much, please come back again and take good care of yourself,

God Bless You All and Mukuno Family
SAYONARA MAYUMI
We love you, we miss you. It's me, Sheryl and Myah

～椋野まゆみのホストファミリーより～

Your project is good for the student of the Sinalhan Elementary School for teaching aflute. It is good for the Filipino older people for healing the sick.

It is wonderful& thanks foryour mission incountry.
Kanako is good,nice and trusted person.
She is wake up early morning &went to there schedule f or the right time. For eating there is no problem.
Thanks.

Mrs.Belent Acune

～座安可那子のホストファミリーより～

I can say that thank you very much for all the students to teach the pupils of SES how to play an instrument. It's our pleasure. Thank you very much. I hope you will come back soon.

～前田紗知のホストファミリーより～

A student staying in our house built good relationship with me and my family. We learned a lot with our student Mioko, and we do hope that she learned a lot also. This project brought us to love each other, especially our children. This project taught us also the culture of Japanese people, and we do know that Mioko would learn our culture.

My personal comments are that the time is very short so that we couldn't show the student beautiful place here in Laguna. We do hope that someday you and all of the staff will give us adopted students again. Our house is opened every time, every day. We do love and would like to support.

～竹平弥生子のホストファミリーより～

About comment about making soup, and cookie for cockroach, this project is very nice, and easy to make up soup and cookie for cockroach with waste oil and boric acid, and also, the ingredients of cookie are only flour and boric acid with water. That was very easy because of no need to buy imported products.

Norvie

～森雄飛のホストファミリーより～

This exchanging cultural program is really good enough to make stronger the friendship between Philipino and Japanese. I would like to thank all people involved in this project who made this is possible. I hope this project will be continued as year goes on. Teaching recorder for elementary students is really good. Because they taught them in free and I'd like to thank you for the Tenri University students who gave their extra patient. Thanks.

～河野素和のホストファミリーより～

Sentiment of my host family

Ms. Mayuko Kubo is a kind person. We like her so much and also she really wanted to speak TAGALOG. I wish she will come back here next year and thank you for a few days she lived with us. All of our family is very happy to meet Mayuko!!

ARIGATO!! GANBATE KUDASAI!!

Renato Reyes

～久保真百子のホストファミリーより～

Message from Mrs.Noeme Kimoto

ノエメさんからのメッセージ

To: Tenri University students and staff members

Tohon Sta.Rosa Mission Station　NOEME KIMOTO

I'm so excited when I heard that some of the Tenri University students and staff members will visit in our country. This is my first time to watch their activities. I am also curious on what they are going to do. But I'm so impressed for their time and efforts that they shared for us. How I wish I am one of them.
I was really inspired and happy for their ability to contribute knowledge in teaching about musical instrument, paper craft (origami), making soap by the use of wasted cooking oil, cockroach killer without the harsh chemical and irritating smell.　All of these are part for their program on how to conserve and recycling materials.

I know this is not an easy task to handle this kind of program and activity to communicate in various countries throughout the world. But wow!!! they did it. Even the "Sayonara party", I'm so thankful for their kindness and patience to prepare the food that we ate was really in good taste, Uuummm...delicious! I love it.

Thank you very much to all Tenri University students and staff members. I hope that you could teach us again in order to develop our potential to gain new knowledge.

I'm looking forward to seeing you again. Mabuhay!!!

新婚ホヤホヤ、ラブラブの木本さんご夫婦です❤

第3部

活動記録

Activity note

事前研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
滞在日誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
リコーダー指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
交流班レポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
スポーツ班レポート・・・・・・・・・・・・・・・・93
料理班レポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
“Formation House, Missionaries of Charity ” 97
マザー・テレサのミッション施設訪問レポート
公衆衛生ワークショップ・・・・・・・・・・・・・98
糖尿病予防セミナー・・・・・・・・・・・・・・ 102
帰国後の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 104

☆事前研修☆

事前研修を通じて、自分達にかかる期待を感じ、また、研修のおかげで現地でも多少の自信を持つことができた。今回の研修でお世話になった多くの方々にお礼を申しあげると共に、私達が学んだ研修内容を紹介する。

6月9日の研修は体育学部キャンパス、7月12日・13日は天理教八木詰所、それ以外は杣之内キャンパスで行われた。

6/9　セミナー①「海外でできる遊び」　松井鴻先生（(財) 日本余暇文化振興会）

紙コップやタコ糸、ストローなどを使って簡単に作れる楽しい玩具や日本も含めて各国の伝統的な玩具を次々に紹介していただいた。どれもシンプルだがおもしろい、温かみのある玩具ばかりでした。テレビゲームとは違い、玩具は子ども達自身が主体となって、改良したりすることで創造力を鍛えることができる。この講義を通して、子ども達との交流手段の幅が大きく広がった。

セミナー②「ホスピス：生きるとは何か…」

四宮敏章先生（国保中央病院ホスピス・緩和ケア科）

マニラでのマザー・テレサ施設訪問にあたり、ホスピスについて学んだ。「生きるとは何か」「生・老・病・死とは苦しみなのか」について、様々な事例を交えてお話頂いた。

日本ではホスピスを「死を待つ場所」だと思っている人が多いと思う。しかし、四宮先生は、ホスピスとは患者さんが「希望を持って生きるところ」、「最期の生を楽に生きるところ」とおっしゃった。実際に、ホスピスで最期を迎える人は数多くいる。しかし、写真で紹介される多くの患者さんの顔は最期の生を楽しむかのごとく喜びに満ち溢れていた。すべての症状には意味があり、すべての病気には訳がある。それを見つけ出すことが医師の仕事だと先生はおしゃっていました。

今回の講演を聞くまでホスピスという言葉さえ知らなかった。「生きる」とはどういうことなのか、「死ぬ」とはどういうことなのかを改めて考えることになった。

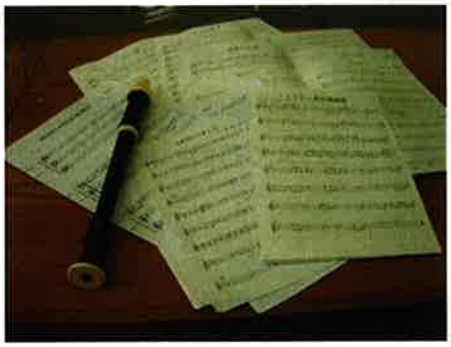
6/11～7/9　タガログ語研修　　辻 貴志先生（国立民族博物館）

この日から、毎週木曜日にタガログ語研修が行われた。フィリピンの基礎知識を教えていただいた後、簡単な挨拶から自己紹介までをご指導いただいた。辻先生は、少しでも私たちが行き詰ったら丁寧に説明してくださった。最初はタガログ語って難しいなと思っていたが、先生の人柄に引き付けられるかのように日増しにの授業が楽しくなっていった。少しずつ上達して

いき、結団式の日までには自己紹介ができるようになっていた。

6/14～7/5　リコーダー教授法　　米田道治先生（天理中学校）

リコーダーの研修は毎週月曜日に行われた。みんな久しぶりにリコーダーを手にして興味津々。指導して頂いた米田先生は、天理中学校で吹奏楽部の顧問をされている音楽指導のプロだ。先生が「あなた達は小学校でリコーダーを経験しているから、すぐなれますよ」と言われたものの、初めは四苦八苦しながらの練習だった。個人差はあったが、すこしずつ上達していった。先生は私たちの演奏の指導だけでなく、フィリピンの子ども達への指導についてもアドバイスしてくださった。



6/25　セミナー「ホスピスの現場で」　　松尾理代先生（天理よろづ相談所病院）

ホスピスケア認定看護師の松尾先生にお話頂いた。知識だけでなく、医療従事者として現場でどのようなことを感じられ、どのように患者さんと接しておられるのか、患者さんはどのようなことを考えておられるのかについて学んだ。マザー・テレサのミッション施設を訪れる心構えができた。

6/25　セミナー「サンタローサでのプロジェクトへの期待」
上田和興先生（天理教東本サンタローサ出張所）

サンタローサ出張所長になられた経緯を交え、フィリピンという国、国民性、風土、食べ物などを概説いただいた。大半の学生がフィリピンについて何も知らない状態だったので、大変参考になった。

7/12、13　八木詰所での研修

この一泊二日の研修では、ダンスの練習を入念に行い、リコーダー指導を、A班、B班に分かれて、深く話し合った。また、食事を取り、お互いの話をする中で親睦も深まった。出発を目前にみんなが一致団結できた。

7/22　天理大学オープンキャンパス

「国際参加プロジェクト」のブースを設け、高校生たちにマザー・テレサミッション施設に贈る千羽鶴を折ってもらった。たくさんの高校生が協力してくれて、一人で何羽も折ってくれる生徒もいた。また、この機会を通じて国際協力に興味を持ってくれる人や、中には入学したらこのプロジェクトに参加したいといってくれる高校生もいた。

8/16　梱包作業

出発前日のこの日、共同研究室で梱包作業を行った。たくさんの方々から頂いた様々なものを丁寧に、また、自分たちが使うものも現地で活躍してくれることを願い、梱包した。

約20箱になるダンボール箱を見て嬉しさと有難さをかみ締めた。あと2日で現地活動が始まるんだという期待と不安が入りまじり、無事に現地で活動できるように願い、すべての箱に封をした。その後、最終のダンス練習を行い、みんなの気持ちがより一層高まった。

澤山先生頑張っています！！

『また会える日まで』の歌詞書いています

～結団式～

出発を翌日に控え、みんなドキドキ＆ワクワクです。

まず学長先生から「勇み勇ませ」という言葉を頂き、フィリピンに行く私たちの心の持ち方についてのお話をいただいた。

次にフィリピンに同行する先生方、学生全員がこのプロジェクトにかける思いや、現地で使うタガログ語で自己紹介などをした。真剣に話す仲間達に感動しながら、今一度気持ちが奮い立った。

最後に、プロジェクトの無事を祈願するために、天理教教会本部に参拝させていただいた。

さぁフィリピンへ...

～滞在日誌～

1日目(8/18、土曜日)

マニラ空港にて

とうとうこの日がやってきた。フィリピンに行く日が！

まず、行きの飛行機がかなり揺れた。もう、落ちてしまうのではないだろうか、と思うくらいに。今考えたらそれはそれでジェットコースターっぽくて楽しかった。怖い経験もしつつ、無事マニラ空港に到着。

いざ、サンタローサへ向かおう！と思ったら、空港の税関の荷物チェックで止められる。フィリピンの税関は厳しい。持って来た段ボール箱をすべて開けられ、中身をチェックされた。途中千羽鶴の入っている箱を開けられ、税関の方から「綺麗ね～」と褒められた。沢山の方の力を借りて完成させた千羽鶴だったので、嬉しかった。

無事にダンボールチェックが終わり、天理教東本大教会サンタローサ出張所の木本先生に手配いただいた車に乗り込み、サンタローサに向かうことに。サンタローサまで約２時間。車の窓から日本とは違う景色を楽しみつつ、異国に来たことを実感した。

天理教東本大教会サンタローサ出張所

出張所に到着。上田先生、木本先生とその奥さんのノエミさんに挨拶し、上田先生より歓迎のお言葉を頂き、完全にフィリピンモードに。

お話くださる上田先生

期間中お世話になるホストファミリーの方々と対面し、皆覚えたてのタガログ語で自己紹介をした。

その後おつとめをして、それぞれホストファミリーの家へ向かった。フィリピンで初めての夜をそれぞれが思い思いに過ごした。

2日目(8／19、日曜日)

おさづけを取り次ぐ本学学生

早朝に出張所集合の後、上田先生、木本先生と一緒に「おたすけ*1」にまわらせていただいた。

毎日歩かれている出張所の先生方の話を町の方々が真剣に聞いている姿や、喜んで人のために歩いておられる先生方から、何かを感じずにはいられなかった。ちなみに、メンバーのひとりが「おさづけ*2」を取り次いだおばさんは、その日のうちに血圧が下がったという。

午前中の約２時間の活動の後、一度出張所に集合し、昼食を食べにパレンケ（市場）に向かった。サンタローサに着いてから初めてのみんなでのお出かけ。テンション上がりまくりだ。

「サンタローサ・コマーシャル・センター」というビルの中の食堂で昼食を取った。他にも様々な市場に行き、買い物をしたり、サンタローサアーチをくぐったり、教会に行ったり、旧市街を歩いたり、ホセ・リサール（フィリピンの英雄像）の前で記念撮影をするなど、サンタローサを観光した。

パレンケ(市場)

フィリピン国民の足、トライシクル

英雄像前で記念撮影

*1　おたすけ：病気や事情で苦しんでいる人に、神様の話を取り次ぎ、また、おさづけを取り次ぐことでその人を助かる方向へと導くこと。

*2　おさづけ：天理教における、よろづたすけの手段のひとつ。親神より「おさづけの理」を頂いた者が病人の患部に理を取り次ぐと、どんな病でも助かると教えられている。

3日目(8／20、月曜日)

本来なら今日からリコーダー指導が始まる予定であったが、サンタローサ市内の全学校が急遽休みになり、リコーダー指導の開始が翌日になった。当初５日間を予定していた指導日数は１日減り、４日間しかない。少し不安が募る。

食用廃油石鹸つくり

ということで、午前中は、椋野先生のご指導のもとでホウ酸団子と食用廃油を使った石鹸作りのワークショップを開催した。セミナーには約 80 名近い人たちが集まって下さった。

英語、タガログ語で説明しながら実演し、タガログ語の説明をノエミさんにお願いした。ホウ酸団子作りでは、実際に小さな子どもからお年寄りまで、様々な年齢層の方々が団子をこね、楽しいセミナーになった。

ホウ酸団子をマンゴーの葉にのせて乾燥

出来たものは参加者に贈呈

午後の自由時間は、出張所で発表会の出し物の練習をする人や休憩にあてる人、また何人かのメンバーは近くのコートでバスケットボールをした。先にプレーしていた子ども達の仲間にいれてもらい、一緒にストリートバスケをした。日本人が物珍しいのか、いつの間にかギャラリーが沢山集まっていた。現地交流ができ、とても有意義な時間を過ごすことができた。

かわいいギャラリー☆

裸足でストリートバスケ！

4日目(8／21、火曜日)

いよいよリコーダー指導が始まる。この日の集合場所はシナルハン小学校。A班はピンク、B班はブルーのユニフォームに身を包んで集合場所に向かった。メンバーからは「昨夜は緊張であまり寝ることができなかった」と言う声がちらほら聞こえた。

先生とリーダーからのお話があり、指導の流れを最終チェック。指導初日ということで、みんなの顔は不安で緊張していた。

シナルハン小学校の生徒たち

お披露目演奏をするメンバー

小学校の朝礼にも初参加。全校児童が胸に手を当て、国歌を斉唱する様は圧巻だった。その後、ステージに上がらせて頂き、今回のプロジェクトの紹介と、覚えたてのタガログ語で自己紹介をし、リコーダーの演奏をお披露目した。

いよいよリコーダー指導っっ！！！

リコーダー指導中

中にはこんな子も…

初日のリコーダー指導はなかなかいい滑り出しだった。児童達はリコーダーに触れるのが初めてということで、持った途端に嬉しそうに音を鳴らしていた。前で指導している人は、これを止めるのにかなり必死な様子。３クラス終え、みんなはホッと一息。初日にしては非常に手ごたえのある良い指導となった。指導を終え、午後からはリコーダー指導の反省会をすることに。それぞれの教育論の違いからかなり白熱した。意見がぶつかり合うほど真剣に子ども達のことを考えているということだ。

班ごとに真剣なﾐｰﾃｨﾝｸﾞ
左：B班、　右：A班

5日目（8／22、水曜日）

少しずつ様になってきました☆

2 日目のリコーダー指導。両学年とも、昨日の反省からクラスの指導の順番を変更。それぞれ、どうすれば子ども達に上手くリコーダーを演奏してもらえるか一生懸命だった。

個人差はあるものの、音をいくつかきれいに鳴らせるようになった程度で、この日のリコーダー指導は終了した。

折り紙折っています。

午後からは文化交流班主導の文化交流、フィリピンの児童達が日本の文化に触れられるよう、日本の伝統的な遊びを教えた。内容は「ぶんぶんゴマ」や「竹とんぼ」、「折り紙」などです。折り紙では、風船と紙飛行機を作り、フィリピンの子ども達に分りやすいように工夫を重ね、とてもいい交流会になった。

また、文化交流の一環として、日比絵画交換を行った。桜井市立織田小学校、天理小学校、登美学園の児童が描いてくれた絵をフィリピンの子ども達に贈呈し、またフィリピンの子ども達にも絵を描いてもらった。日本から持ってきた絵を披露した時、子ども達から歓声が上がり、特に桜の絵が人気で、やっぱり桜は異国の地でも有名なのだと実感した。

校庭で。大屋根と下はコンクリートです。

日本の子供たちの描いた絵です。

6日目（8／23、木曜日）

シナルハン小学校に集合。いつも通り各グループに分かれてリコーダー指導を開始!!リコーダーも３日目とあって指導にも慣れ、子ども達の演奏も形になってきた。

サンタローサ市役所

午後からは、当初20日に予定されていた市長表敬に急いで向かった。トライシクルにそれぞれ分乗し、サンタローサ市役所に到着!!待つこと30分…しかし、肝心の市長さんが現れない…しばらく待っていたが、サンタローサ科学技術高校でのスポーツ交流の時間が迫っていたので失礼することに。市長さんに会いたかった…ですね。残念な気持ちを持ちつつ、急いで高校に到着！といっても高校は市役所のすぐ隣。グラウンドにはすでに高校生達が整列して、私達を待っていてくれた。

いよいよスポーツ交流開始！！

ここは、スポーツ班主導で頑張って盛り上げる。「騎馬戦」を英語で説明するのは難しかった。高校生たちのダンスや出し物もとてもすばらしかった。白熱したバスケットボールの親善試合。結果は後述の「スポーツ交流レポート」をご参照。キラキラ輝く笑顔がたくさん見られていいスポーツ交流になった。この高校の校内には露店購買部があるなど、日本とは違う雰囲気だった。

撤収後、出張所に帰り夕づとめ。明日はいよいよ発表会。皆で『また会える日まで』を練習して解散。

騎馬戦しています。

サンタローサ科学技術高校の生徒達

天理大学の若き戦士たち

7日目（8／24、金曜日）

リハーサルの様子

指導４日目。いつものように定刻に登校し、子ども達と一緒に朝礼に参加。１時間目から３時間目まで、３クラスの子ども達のリコーダー指導にあたった。

今日は午後からリコーダー発表会があるので各クラス、グループごとに仕上げを急いだ。上手に吹けるようになった児童の中から Leader と Teacher を選び、上手く出来ない子ども達への指導を手伝ってもらった。また、クラス全体で合わせてみたり、実際に舞台に立ってポジションを確認するなどリハーサルを行った。子ども達からは緊張感がひしひしと伝わってきた。なんとか各クラス仕上げることが出来た。

さぁ、ミニコンサート!!（発表会）

午前中に最後の授業を終え、発表会の準備に取り掛かった。いよいよ発表会。講堂にはたくさんの子ども達、先生方、父母、近所の人達が大勢集まり、発表会が始まった。まず、シナルハン小学校の校長先生の挨拶や先生方の出し物があり、私達も『マツケンサンバ』を踊った。

そしてついに、本番！緊張している私達をしりめに、子ども達は今か今かと待ちわびている様子で、出番が回ってくると舞台へ駆け出した。一目散に自分の位置につき、あっという間に演奏隊形が完成。発表１番手は Grade4 の子ども達。みんなリコーダーを持つと本当に嬉しそうに、真剣に演奏していた。Grade4 の『カエルの歌』はとても元気で、子ども達の勢いそのものだった。そして次は Grade5。彼らの演奏曲は『エーデルワイス』。教える前には難しい曲を選んだのではないかと不安だったが、発表を聞くと悩んでいたことが無駄に思えるほど素晴らしい演奏を披露してくれた。

４年生演奏中…

この４日間という短期間でここまで吹けるようになるなんて、子ども達の頑張りには脱帽する思いだ。本当にシナルハン小学校のみなさん、ありがとうございました。

8日目(8／25、土曜日)

リコーダーの発表会が 24 日の金曜日に変更になったため、この日は一日フリーになった。予定にはなかったが、タール湖（カルデラ湖）を見下ろす観光スポットのタガイタイに行くことになった。みんな朝からウキウキで、昨日までの疲れは吹っ飛んだかのように元気だった。

観光地タガイタイでパシャリ！！

ジプニーに乗って、約 2 時間をかけて目的地に着いた。途中まさかのエンジントラブルにみまわれたが、それもご愛嬌ということで、みんな仲良くワイワイと狭い車内から笑い声が絶えることはないぐらい賑やかなジプニーの旅だった。タガイタイの景色はとても綺麗で、みんなで楽しくご飯を食べたり、買い物をしたりとフィリピンに来て初めて観光気分を味わった。道中、果物マーケットに立ち寄り、マンゴスチンやマンゴー、ドリアンなどを試食させてもらった。とてもおいしくて、ホストファミリーへのお土産に買って帰る人もいた。

また、帰りに翌日のお別れパーティの材料を買いに「SM(シューマート)」という大型スーパーへ。

さすがに帰りはみんな疲れていたようで、それぞれ肩を貸しあいながらしばしの仮眠。そんな中みんな写真をパシャリパシャリ。ショッピングをしたり観光したり、みんなご満悦の一日だった。

フィリピンは果物大国☆

ヤラセなしです（笑）

果物の王様「ドリアン」にやられちまってます…（泣）

9日目(8/26、日曜日)

サンタローサ出張所での月次祭&SAYONARAパーティー当日！！

食事班を筆頭に朝早くから出張所に集まって日本食作り、飾り付けの準備に奮闘!!（詳しくは「料理班レポート」をご参照）

ちらし寿司・おでん・おしるこ・たこ焼きなどの日本食を出張所の方々にも手伝って頂きながらたくさん作り、SAYONARAパーティーに備えた。また、月次祭には暑い中、たくさんの方が参拝に来られ、フィリピンでの天理教の広がりを感じた。月次祭の後には椋野先生による糖尿病予防セミナーも行われた。そして、いよいよSAYONARAパーティー

バーベキュー奮闘中！！

「おいしぃー！」

出張所にはホストファミリーや参拝に来られた方々で大盛り上がり!!初めて食べる日本食に喜ぶ方、驚く方、思い思いに味わっている様子。私たちも家族のみんなとカラオケをしたり、話をしたりして楽しんだ。みんな喜んでくれたでしょうか？

マブーハーイ！！

フィリピンでは屋外カラオケが大人気!!

10日目（8／27、火曜日）

いよいよホストファミリーとのお別れ…。各ホームステイ先で別れを告げ、荷物と思い出の詰まった大きな鞄を手に、出張所に集まった。お世話になった出張所の方々に一人ずつ自分が感じたことやお礼を述べた。メンバーの中には、サンタローサでの感動と喜びが込み上げてきたのか、涙する者もいた。見送りの方もたくさん来て下さり、抱き合いながら別れを惜しみ、また、再会を誓い合った。楽しかったサンタローサの日々を想うと自然と笑顔になり、涙と笑いの入り混じった別れとなった。フィリピンの中の小さな町サンタローサを私達は一生忘れないだろう。

そして、10日間お世話になったサンタローサに別れを告げ、一行はマニラにある天理教フィリピン出張所に向かった。到着後に、山岸精治所長のフィリピンに来られた当時のお話や今までの経験談など、とても貴重なお話をうかがった。

その後、マニラで２泊するマニラ・パビリオンホテルに到着。チェックイン後に、皆で近場を散歩し、買い物などを楽しんだ。フィリピンの首都マニラはサンタローサとは全く違い、フィリピンの格差社会を目の当たりにした。リーダー、副リーダーは澤山先生、椋野先生に同行し、毎日新聞社の大澤文護支局長からお話を聞く機会を頂いた。

本当の親のように別れを惜しむ人も

天理教フィリピン出張所にて

11日目!!（8／28、水曜日）

マニラに来て２日目。午前中はマニラを観光した。といっても、午後からのボランティアに行く道中に通っただけなので、メインは観光ではない！イントラムロス保存地区で世界遺産のマニラ大聖堂を見学し、スペイン統治時代の街並みを散策。マニラ大聖堂はとても壮大で、美しく厳かな雰囲気であった。

また、“Casa Manila” から見下ろす路地は、ここがフィリピンであることを忘れさせてくれるくらいヨーロッパ情緒があふれていた。スペイン統治時代、このマニラでフィリピン人はどのように過ごしてきたのか。フィリピンについてもっと知りたくなった。一方で、下町のキアポは活気に満ちていた。

左　スペイン統治時代からの街並み
下　フィリピン最古の大聖堂の前で
右　“Casa Manila” の窓からのマニラ大聖堂

午後は、今回のプロジェクトのもう一つの目的であるマザー・テレサミッション施設 “Formation House” を訪問した。LRT と呼ばれるモノレールとジープニーを乗り継ぎ、お昼過ぎに施設に到着した。施設では、入所者の方とお話をしたり、洗濯のお手伝い等、約３時間ボランティアをさせて頂いた（詳細は「マザー・テレサのミッション施設訪問レポート」をご参照）。偶然にも日本人シスターのお話をうかがうことができた。その方の「私は神に呼ばれたから今ここにいるのです」「信仰するうえで大切にしていることは愛です」という言葉は、私達の心に深く染み入った。

普段何不自由なく生活し、毎日を単々と過ごすことがどれだけ有難く、平凡と言える毎日こそが一番の幸せであるということを痛感させられた。

12日目（8/29、木曜日）

いよいよフィリピンを去る日になった。こんな日が本当に来るなんて…、というようなことを想いながら、フィリピンでの 12 日間の思い出をスーツケースに詰め込んで、午後フィリピンを発った。スーツケースを整理していると、ホストファミリーからのお土産や、リコーダー、子ども達がくれた手紙 etc.…。たくさんの物がこの旅の思い出を蘇らせた。たった 12 日間、されど 12 日間。その日は全員そろってホテルの前のファストフード店で朝食をとったのだが、みんな笑顔でいるもののどこか寂しそうな表情。しかし、帰ってすることがたくさんあるじゃないか！と心を奮い立たせ、たくさんの思い出を胸に、最後の朝食を味わった。来た時よりも大きな荷物を手に、来た時よりも大きな情熱を胸に…。

・・・Good Bye the Philippines!!!

私達が乗った飛行機です。

空港で偶然学長先生にお会いしました！

コラム ⑨　　充電パニック(!?)←自分の中で

私はホストファミリーの家でよく携帯電話を充電していた。充電しても何も危害が無かったので多分大丈夫だろうということで。

しかし、ある日充電をしようとコンセントをさした直後に、なんと停電がおこったのだ！！このとき私は焦っていた。もしかして、これは私が充電したからなのか!? やっぱり電圧が違ったのか!? 私の携帯が全部電力をとってしまったのだろうか？やばいッ!! なんて謝ろうか？いや、これは許してもらえるのだろうか？今まで優しかったホストファミリーが、「なんてことしてくれるの！」と怒るのでは…。というような悪い妄想が思い浮かんでくる。とにかく部屋から出るしかない！と思い出てみると、あれ？何だか外がいつもより暗い。聞いてみると私が過ごしていた地域一帯が停電したらしい。

そうか、私のせいじゃないのだ。ああ、よかった！　寿命が何ヶ月か縮んだのではないかと思った。

ただ、その日以来、携帯を充電するのがちょっと怖くなりました…。

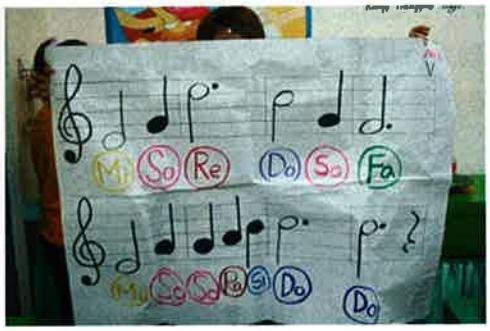
リコーダー指導　A班

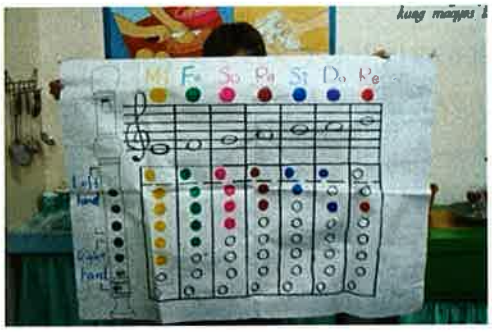
久保 真百子、河野 素和、佐藤 宮子
竹平 弥生子、椋野 美和、村田 明彦

リコーダー指導に使用した道具

［リコーダー、模造紙に大きく書いた楽譜、笛、アルトリコーダー、音階表］

担当学年　[5年生3クラス]





～出発前～

まず、A班は指導曲をフィリピンの子ども達がメロディを知っていて、なお且つ簡単に演奏できる『エーデルワイス』に決めました。メンバーでどのようにしたらスムーズに、また分かりやすく子ども達に教えることができるかを考え、その結果、全体に説明しやすいように模造紙に大きく楽譜を書き、その下に音符の読み方を書きました。指使いも分かるように音階表も作りました。

～指導前日～

出発前は全員が集まる機会が少なかったので、どのように指導していくかということを細かなところまで話し合いました。1. 指使いを覚えてもらう、2. 音階を歌うことでメロディを覚えてもらう、3. リコーダーを使うという流れで授業を進めることを決めました。

～指導１日目～

まずはリコーダーの吹き方と指の押さえ方を教えました。子ども達の覚えも早く、初日にしてはなかなかよい感じで、順調に進みそうな気がしました。指導していくうちに、なぜか自然に班編成ができていました。そのおかげでその後の指導が円滑に進み、そして一人ひとりの児童に目を向けることが出来たのだと思いました。

～指導２日目～

１日目は全部英語で指導したのですが、子ども達はあまり英語を理解していないようだったので、２日目からは片言でもタガログ語で指導することにしました。また、教室では音が響きすぎてしっかりと吹けているのか分からなかったため、この日から授業を校庭ですることにしました。また、名札を作り、一人ひとりの名前を呼んで指導するようにしました。授業の前半は前日の復習に充て、後半はみんなで音階を声に出してメロディを覚えました。タガログ語効果は抜群で、子ども達には昨日以上の笑顔が見られ、私達との距離も少し縮まったような気がしました。

～指導３日目～

この日は子ども達の頑張りに感動した１日でもありました。昨日、一人の子に書いて渡した音階の紙をグループのみんなが写しあい練習してきている様子がみえて、私達ももっと頑張って教えようと気がひきしまりました。この日は上達が遅い子ども達を集めて、個人レッスンを行いました。また、うまく演奏できる子を teacher に任命し、子ども達がお互いに教え合える環境を作りました。このことにより、私達も目が行き届くようになり、指導がスムーズに進みました。そして全体的には完璧ではありませんが、一曲をそろって吹くことができるようになり、少しずつリコーダーを吹く楽しみを感じてくれているように感じました。

～指導４日目～

この日は午後に発表会を控えていることもあり、実際にステージ上での整列や入退場の練習をしました。最終日ということもあり、子ども達もリコーダーに慣れ、みんなで楽しく吹いていました。また、この日は休憩中もゲームをしながら曲を通して練習し、本番に備えました。

～ミニコンサート(発表会)当日～

指導4日目の午後に発表会を行いました。みんな午前中から練習してきたにもかかわらず、疲れひとつ見せず精一杯本番に臨みました。子ども達は緊張しているようでしたが、練習の成果を十分に発揮し、最高の発表会となりました。

～反省～

- 最初からタガログ語で指導できていたらよかった。
- 最初から名札を用意し、一人ひとりの名前を覚えられたらよかった。
- 練習ばかりでなくゲームなどを取り入れながら、メリハリのある授業にすればよかった。
- クラスの先生に入ってもらい協力して指導できたら、もっとスムーズに指導できたのではないか。
- 発表会の際に順番にあわせて、子ども達の演奏の準備をもっと早めにした方がよかった。

リコーダー指導　B班

池﨑 未幸、座安 可那子、福西 穂高、前田 紗知
松井 さきの、森 雄飛、椋野 まゆみ

リコーダー指導に使用した道具　[リコーダー、楽譜、音階表、○×ボード]
担当学年　[4年生3クラス]

～出発前～

最初に曲選びをしました。私たちは教える学年が4年生ということで、初めて楽器に触る子どもにも親しみやすい簡単な『かえるのうた』に決めました。さらに子ども達が演奏しやすいように曲の音程を上げました。合宿ではどんな風に指導するのかを練り合ったり、どのような段階を踏んで曲を完成させるのかなどの指導予定を考えたりしました。そして指導時に使う教材は皆で協力して完成させました。

～指導前日～

8月20日(月)が指導初日の予定でしたが、前日に急きょ休校になるとの連絡があり、当初5日間を予定してした練習日が1日減り、4日間になってしまいました。この日は明日の最終打ち合わせとリコーダーの練習などを行いました。1日短くなった分、不安と子ども達に早く会いたい気持ちが強くなりました。

～指導1日目～

いよいよリコーダー指導が始まりました。初日は3クラスとも、「ソ・ラ・シ」の基本の3つの音を習得するだけで精一杯でした。午後のミーティングでも残り3日間でマスターすることができるのか、非常に不安であるとの声が上がりました。でも、まだ初日のため、できると信じてやりきろうとみんなで決意しました。反省会では改善策を考えました。指導についての意見の対立もありましたが、今となってはいい思い出です。

～指導 2 日目～

昨日の反省点を生かし、指導に入りました。最初の 10 分は昨日の復習にあてました。「ソ」の音だけを覚えている子、「ソ・ラ」の 2 つの音だけを覚えている子、「ソ・ラ・シ」の 3 つの音を覚えている子。習熟度はバラバラでしたが、どの子もとても一生懸命に練習していました。リコーダーの音の出し方や音の違いなどを私たちメンバーが子ども達の前でデモストレーションをし、口では伝えきれないことを五感で理解してもらえるように留意するなどの工夫をこらしました。午後のミーティリングでは、3 クラスとも次の日の課題がバラバラでした。一番進み具合が早い 1 クラス目は曲を完成させる。もう一度、「良い音と悪い音」の違いを理解させる。グループ指導を行い、良い音を一通り完成させる。できている子、できていない子を分けて練習させるなど、翌日の指導に備えて沢山のことを話し合いました。

～指導 3 日目～

1 クラス目は練習の最後の段階で、全員で合わせて吹くことができるようになりました。この瞬間、子ども達と私達メンバーが一体となって喜び合いました。あの感動は今も忘れることができません。2、3 クラス目は、進み具合がバラバラでした。全体でやるよりは、グループ指導や個別指導などを重点的に行いました。私達だけではなく、子ども達同士でもお互いに教え合うよう指導しました。この日のミーティングでは、1 クラス目は、発表会のためにとにかく全員で合わせてきれいな音色になるように仕上げをし、2･3 クラス目は、ぎりぎりまで練習を行い、折をみて何回か全員で合わせようということになりました。泣いても笑ってもリコーダー指導は、明日が最終日。

～指導 4 日目～

午前中は、発表会で演奏する舞台を使い、隊形などの確認をして、極力本番に近い状態で練習をしました。この時点で初めて 3 クラスが全部演奏できるようになりました。まさに時間との戦いでした。

～ミニコンサート(発表会)当日～

午後からは、いよいよ発表会。舞台に上がった子ども達の顔からは、緊張のオーラが出ていました。子ども達の緊張を少しでも和らげるために、私たちメンバーは話し合いの結果、まず演奏に入る前に毎日練習してきた『かえるのうた』を声を出して歌い、その後リコーダーの演奏に入ることにしました。子ども達は、合唱ではいつも以上に大きな声で元気よく歌っていました。歌い終えた後の子ども達の顔は、最初の時よりも少し緊張がほぐれたせいか笑顔が見え始め、この勢いに乗ってリコーダーを演奏しました。そして 3 クラスとも４日間の中で一番いい演奏をしてくれました。

～振り返って～

- タガログ語での指導ができれば、もっと一人ひとりに深く指導することができた。
- 子どもたちに名札を配布して顔と名前を一致させるともっとスムーズに指導ができた。
- 毎日のミーティングの時間の確保があったから、指導の統一ができた。
- リコーダー指導の課題の曲を音階で歌わせると、曲のリズムを覚えるのが早くなった。
- 修了証を一人ずつ手渡したかった。
- 楽譜の準備や「○×のボード」があったため、指導がしやすかった。
- できるようになった子どもをみんなの前で発表させる場を作った。そのことで、熱心に練習する子どもが増えた。

☆交流班レポート☆

メンバー：池崎、久保、佐藤、椋野美

●文化交流

私達交流班は、フィリピンの子ども達が楽しく日本文化に触れることができるように、事前研修で学んだ「ぶんぶんゴマ」「竹トンボ(牛乳パック製)」そして、定番の「折り紙」で交流することにしました。出来るだけ簡単に、且つ楽しめるおもちゃ作りを考え、ぶんぶんゴマは糸を通すだけに、竹トンボはホッチキスでとめて色を塗るだけ、折り紙は覚えやすく親しみやすい「飛行機」と「紙風船」を子ども達と一緒に作ることにしました。

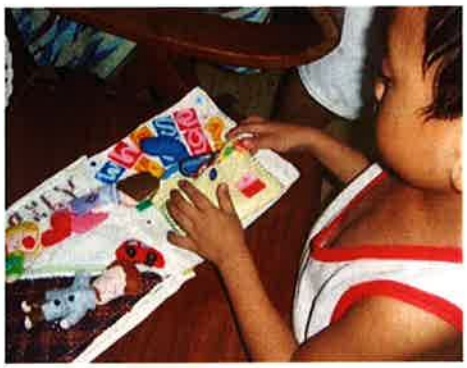
文化交流はリコーダー指導の２日目の午後に３、４年生を対象に、おもちゃ作り２クラス、日本の小学生との交流のために絵を描く２クラスで行いました。私達はリコーダー指導を忘れるぐらい子ども達と一緒に楽しみました。私達が思っていた以上に説明することは難しく大変でした。英語もままならず、“like this”と身振り手振りで説明しました。しかし、クラスの先生や現地の方の助けを借りておもちゃは無事完成し、子ども達も今までに見たことのないおもちゃにとても楽しそうに遊んでいました。また、紙飛行機や竹トンボは校庭でとばしました。中でも、子ども達の一番の人気は紙飛行機でした。あんな小さな紙でこんなにたくさんの喜び、笑顔を生み出せるなんて改めて日本文化の良さを感じました。

●絵を通しての国際交流

私達には、日本の小学校とフィリピンの小学校との、絵の交換を通しての国際交流の仲介をするという役目もありました。まず桜井市立織田小学校、天理小学校、登見学園で絵を預かり、シナルハン小学校に届けました。フィリピンの子ども達には寄付いただいたクレヨンをプレゼントし、そのクレヨンで絵を描いてもらいました。子ども達は、日本から持って来た絵を見ながら絵を描いてくれました。太陽を黄色で描くなど、日本とフィリピンの色彩感覚の違いが感じられました。そして、帰国後にフィリピンで預かった絵を織田小学校と天理小学校に届けました。(P104, 105 参照)

●手作りフェルト絵本のプレゼント

郡山高校の生徒の皆さんが家庭科の授業で作ったフェルトの絵本をホストファミリーにプレゼントしました。一つひとつすごく細かく作ってあり、フィリピンの方はみんな感心していました。そして子ども達はというと、見たことのない絵本に大興奮!! 同じ絵本を何回も見たり、取り合いをしたりと大人気でした。



☆スポーツ交流レポート☆

メンバー：河野、福西、椋野ま、村田

滞在８日目の８月 23 日はサンタローサ科学技術高校とのスポーツ交流でした。この日のためにスポーツ交流班はいろいろと企画を練り、準備をしてきました。企画した競技は、騎馬戦、玉入れ、大縄跳び、フォークダンス。リコーダー指導の合間をぬって玉入れの玉を作ったり、選手宣誓を英訳したりと、作業はフィリピンに来てからも続きました。

我々が会場に到着すると、高校生有志によるダンスで歓迎を受けました。スペイン統治時代を思わせる、華やかな衣装に身を包んだ可憐な踊りにしばらく見入ってしまいました。さらに、着物を着て日本風の音楽と共に舞を踊る少女達。この日のために練習をたくさんしてくれたのでしょう。日本舞踊のゆっくりした動きも見事で、とてもきれいでした。私達を一生懸命歓迎してくれているその姿をみて、自然とこちらにも力が湧いてきました。心の底から楽しめる交流がしたいと、静かな闘志を燃やしました。そして、いよいよ本番です。

日本の運動会を思わせるプログラム。スポーツ班で一生懸命考え、準備したつもりでしたが、学校側との打ち合わせ不足や、スポーツ班以外のメンバーとの打ち合わせ不足のせいか、スポーツ交流が始まった当初はうまく進みませんでした。しかし、プログラムがすすみ、進行をするこちら側がペースをつかみはじめると、私たちも臨機応変に対応してその場を盛り上げます。日本ではおなじみの競技ですが、フィリピンではめずらしいのか生徒達は躊躇していました。“Come on!” と競技への参加を促すと、“NO! NO!” と嫌がっても、いざ参加すると、お腹のそこから笑

い楽しんでくれているようでした。

そして、最後の競技は昨年同様バスケットボール。フィリピンではバスケが最も人気の高いスポーツです。バスケットコートも街のいろいろなところにあり、小さい子どもから大人までプレイします。ナイター設備のある野外コートで夜遅くまで本格的に練習をする子どももいます。このようなバスケ大国フィリピン。相手チームは高校生といえども、体格がいい。対する天理大学チームは、男性の中に女性も一人いて、バスケ経験者は一人だけ。しかし、手作りのユニフォームを身にまとった天理チームはとてもたくましかった！ちなみに去年は、天理大学が一点差で勝利しています。いざ対決!!応援にも自然と力が入ります。女子生徒達の天理チームへの黄色い声援もあり、前半大量の点差をつけられたにも関わらず、後半は猛追。しかし、無情にも試合終了の笛が鳴り、一点差で負けてしまいました。

互いに高校生たちも我々も大いに楽しみました。こうしてスポーツ交流は大成功に終わりました。

Special thanks!

☆料理班レポート☆

メンバー：椋野和、竹平、松井、森

● 事前準備 in ジャパン

１、料理の内容を決める

去年のメニューを参考に、実際にできそうな料理を考えてリストにアップし、日本で買出しが必要な食品や道具を確認しました。椋野先生を中心に色々な案が出ました。

想像しただけでもうワクワクです。

２、買出し⇒梱包

フィリピンでは手に入らない食材を買出しして、梱包しました。

梱包した食材：わかめ、麩、ワラビもち粉、うどん（乾燥）、酢飯のもと etc…。

料理班は本番が勝負っ！！

● 本番 in フィリピン

１、買出し（８月 25 日）

タガイタイ観光に行った帰り道に、道路沿いにあった果物市場で果物を購入しました。そしてみんなで巨大スーパーマーケット「ＳＭ（シューマート）」へ GO☆

買出しリストを手に先生方と料理班で館内をうろうろ。何でも揃っています。日本のスーパーより広い。

生鮮食品、コップ、スプーン、フォーク、ジュースの粉末 etc…を購入しました。マンゴー、オレンジ、パイナップルなど、色んなジュースの粉末も売っていました。

☆果物市場でのシーン

２、調理

料理班は一足早めに出張所に集合！椋野先生の指示に従い、ノエミさん達の協力のもと、白玉を捏ねたり、お米を炊いたり、具材を串に刺すなどの調理をしました。

作った料理：ちらし寿司、おでん、BBQ、味噌汁、うどん、おしるこ、わらび餅

☆みんなでお料理中☆

３、食事

月次祭を無事勤め終えた後、信者さんやホストファミリーにお礼の意味をこめて日本食を振舞いました。たくさんの人で賑わい、とてもいい雰囲気でした。日本の料理を気に入ってもらえたかどうかは不安ですが、最高のパーティーになりました☆

はいっチーズ！！

～マザー・テレサのミッション施設訪問レポート～

マザー・テレサのミッション施設、そこは最期の生を生きる人達の場所でした。

池崎　未幸

People Who Have Helped the World

Mother Teresa

Her mission to serve God

By caring for the poor

このような言葉が施設内に書かれていました。

入所者の方は皆ベッドに横になっていたり、座っていたりしていました。私達は、洗濯物や掃除などの、施設内の手伝いをさせていただきました。入所者の方は、話しかけると一生懸命話をしてくれました。目を見て、手を握り、その目はなんだかとても悲しそうな、すがるような目で、何をしてあげればいいのか、ただそばにいてあげることしかできませんでした。

話をした人の中に目が見えない人がいました。最初そのことに気付かないでいると、隣に座っている人が教えてくれました。言葉を交わすにも、我々のつたないタガログ語では十分な会話にもならないので歌を歌いました。日本語だったけれど、その人は何度もその歌をリクエストしてくれました。

限られたわずかな時間の中、少しでもできることを探しました。しかし、本当に時間はすぐに過ぎ、別れのとき「また来る？いつ？いつ来る？」と何度も聞かれましたが、簡単に「また来るよ。」とは答えられませんでした。彼女達に絶対ではない言葉を返すことは、とてもできませんでした。最後に私のタオルを欲しがる人がいて、そのタオルに名前を書いてほしいと言われ、急いでペンを探し、名前を書いて彼女に渡しました。こんなことでも喜んでくれるなら、と思いながら部屋を出ました。

帰りにシスターとお話させていただくことができました。ここにいる人達は３分の１が結核の患者なのだそうです。骨、脊髄、肺、皮膚の結核など様々です。また、癌患者には末期の方もおられ、路上で生活をしている人達をこの施設に連れてきたりするのだそうです。そして、毎月 10 人位の人達が、ここで亡くなられるのだといいます。

どうしてシスターになることを選んだのかと尋ねてみました。すると彼女は、「神に呼ばれたからです」とおっしゃいました。また、施設内にはキリスト教の祈りの場所があり、そこでシスター達はお祈りをされていました。

私達がこの施設で過ごした時間は、半日にも満たないわずかな時間ですが、とても有意義な時間でした。そして、シスターとして働く彼女達の存在の大きさを感じました。

公衆衛生ワークショップ

廃油石鹸&ゴキブリ駆除用ホウ酸団子作り

今回のプロジェクトでは公衆衛生ワークショップを実施しました。サンタローサの家々の周りには、洗濯物がロープいっぱいに干してあるのが印象的です。家庭から出る生活排水は川に流され、それが上手く流れないために途中で道路に広がっていることもしばしばです。環境に優しく人々の生活に役立つことをモットーに廃油石鹸とゴキブリ駆除用ホウ酸団子をつくりました。

《実施概要》

・実施日：8 月 20 日　10：00～12：00
・場所：天理教信者さん、セリーさん宅の庭（急遽お願いして使わせていただいた。）
・日本から持参した物：苛性ソーダ、牛乳パックの空容器、ゴム手袋、攪拌棒。
・現地調達品：上記以外の必要物品(水、油、ボール、秤、)
・広報準備：現地で作成したチラシ（※巻末資料参照）
・対象者：ホストファミリーと近所の方々、サンタローサ出張所関係者、信者さん
・実演：全員で協力
・完成品のプレゼント

○チラシ作り：料理に使っている油を各家庭から頂くために石鹸作りの目的と内容を書いての英文チラシを作成した。

○広報、廃油集め：ひとりでも多くの方に集まっていただくために、学生たちはチラシを持って各自のホストファミリーにワークショップの説明と参加のお願いをした。ホストファミリー以外の方々にも参加していただくため、現地の人にも協力いただいて、夜遅くまで学生と教員とホストファミリーが一組となって一軒一軒説明に回った。

○場所の確保：セリーさん宅の広い庭をお借りした。テーブルやいすなどもいつの間にか揃えられ途中からマイクも用意して下さった。チラシを見て 80 名ぐらいの方が来てくださった。

○参加者へのプレゼント

・ホストファミリーに作ってもらった引換券を持つ先着 50 名の来場者に、出来上がったばかりの 200ml パックの石鹸と後述のマンゴーの葉にのせたホウ酸団子をプレゼントした。

○実演：椋野先生の説明を竹平さんが英語で解説

・参加者には水と苛性ソーダを混ぜた時に発生する熱を手で感じてもらったり、攪拌する作業にも参加してもらった。

・苛性ソーダの入手方法と注意事項の説明は出張所のノエミさんがタガログ語で説明して下さり、現地の方に理解を深めていただいた。

○用途：洗濯はもちろん、浴用、キッチン、フローリングの床磨き、自動車、オートバイなどの汚れ落としにも使える。

1．食用廃油で石鹸作り

①フィリピンの台所で使われている食用油

フィリピンでは、食用油を色が黒くなるまで使っている家庭が殆どで、量が少なくなれば継ぎ足して使うことが多く、ほとんど捨てることはありません。頻繁に使っている油は酸化が進んでいると考えられますが、それを食用として使っている現地の人々の暮らしぶりも理解しなければならない。「食」について考えると、健康面を考慮した助言も必要になりますが、生活様式の理解、経済事情等の問題もあります。

②廃油

石鹸作りに利用する油は、何回も使った食用油が適しています。新しい食用油では苛性ソーダとの反応に時間がかかり、上手く混ざり合わなかったりします。古くなった油はそのまま捨てると環境汚染につながりますが、石鹸の材料にすることで環境保全に寄与します。

③環境に優しい

廃油石鹸使用後の排水は一日で自然に戻ります。川や海のカルシウムと結びついて「カルシウム石鹸(食用石鹸)」となり、微生物や小魚の餌となって短期間で分解されます。科学的に作られた洗剤に比べフェノールを含んでいないので環境ホルモンも発生しません。

④材料・必要物品（200ml パック 50 本分）

・使用済み食用油･･･7ℓ
・苛性ソーダ(水酸化ナトリウム)･･1kg
・水･･････････････････････1,700ml
・プラスチックボールまたは紙（苛性ソーダを計量する）
・計量秤
・1ℓ牛乳パック（攪拌のため）：10 個
・200ml 牛乳パック（出来た石鹸液を小分けにして、そのまま熟成させるため）：50 個
・50 センチくらいのしっかりした棒（水と苛性ソーダを混ぜる）：5～10 本
・ゴム手袋
・ビニール袋、ホッチキス

⑤作り方：（1ℓの牛乳パックで作る方法）

・1ℓ牛乳パックに 170ml の水を入れ 75g の苛性ソーダを少しずつ加え、攪拌する。

・苛性ソーダが溶けたら油を牛乳パックに8分目まで注ぎいれ、更に乳白色になるまで攪拌を続ける。
・よく混ざり分離していないことを確認して200mlパックに注ぎ入れ小分けする。
・熟成期間は、量が多ければ1ヶ月程度かかるが、少量なので2週間ほど置いておく。苛性ソーダと油の化学変化で鹸化するため、油の酸化度や材料の比率により熟成期間に多少の幅がある。
・パックの上部をホッチキスで止めビニール袋に入れる。

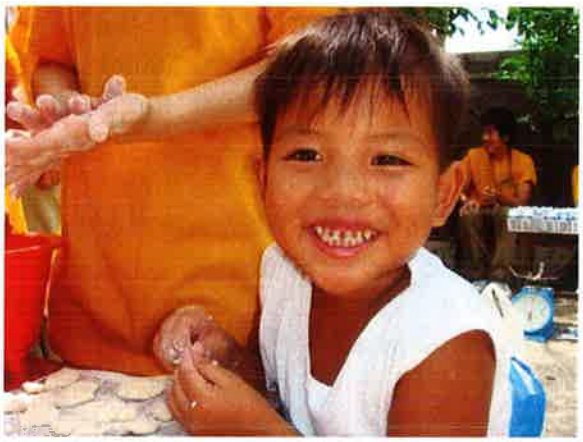
⑥注意事項

・苛性ソーダはアルカリ度が高いので手が荒れる。作業中はゴム手袋を使用し、直接皮膚につかないようにする。ついた場合はすぐに水で洗うこと。水洗い後、酢で中和すると更に良い。目に入った場合は水で洗い流した後、念のため病院受診を勧める。
・苛性ソーダは水を加えることにより熱を発生し、温度が上がる。
・出来たばかりの石鹸は翌日には固まっているが、アルカリ度が高く手が荒れるので、まだ使わないように注意を促す。

⑦振り返り

・私たちが廃油と考えている油は、現地の人にとってはそうではないかもしれない。「食と健康」について考えることも必要である。
・サンタローサ出張所の先生方の協力は毎回大きな力で私たちを支えて下さっている。
・我々のために屋台に行ってわざわざ油を買って持たせてくださった家庭もあり、そうまでして活動に協力してくださったことに感動した。
・当初は、サンタローサ出張所にお集まりいただく信者さんを対象に、参拝後の少しの時間を利用して実施するだけの準備しかしていなかった。急遽我々全員で実行することになったために作業内容についての周知は徹底されておらず、当日に簡単な事前打ち合わせで実施することになった。作業分担が細かく行われていれば、さらに充実した活動になったと思われる。しかし、学生メンバーのパワーも凄いもので、海外では自分たちの力しか頼るものがないという環境で底力を発揮した。ひとつの事を成し遂げるには、心をあわせることが大切であると実感することができた。

2. ゴキブリ駆除用ホウ酸団子作り



代表的な衛生害虫のゴキブリは，3億年以上も前から地球上に棲息しているといわれ、そのしぶとい生命力と繁殖力で、今もなお熱帯を中心に全世界に4,000種類、日本では50種類近くが存在する。細菌，寄生虫，ウイルス等の伝搬や、最近ではゴキブリアレルギーによる喘息が問題となっている。

ホストファミリー宅の風呂場とトイレのドアを開けたとたん、目についたのがゴキブリ。若いホストマザーは笑いながらスリッパでたたいてみせた。フィリピンではゴキブリは仲間とまでは行かなくても、そこにいても問題ないのであり、なぜ駆除しなければならないのか、ということ

に関心はなさそうである。衛生環境をよくすることは、生活の改善につながる。ゴキブリ駆除の必要性を感じていただける時が来ると信じてホウ酸団子作りに取り組んだ。

①実施

・作り方は材料にたまねぎやその他のものを入れる方法もあるが、ホウ酸と小麦粉だけで作ることにした。
・ホウ酸 500g と同量の小麦粉をよく混ぜ、水を適量加えて耳たぶぐらいの柔らかさにする。小さく丸めて薄く伸ばす。新聞紙等の上で自然乾燥させて出来上がり。
・フィリピンでは自宅で新聞を読む人は殆どいないため、古新聞は購入しなければならない。
・素手で扱えることと、道具も必要ないので参集者の皆さんと団子感覚で作った。実際は水を多く入れすぎて子ども達の団子遊びになりそうな場面もあったが、小麦粉の増量により解決した。ホウ酸の割合が少なくなったので、駆除効果に疑問が残る。
・先着 50 名様プレゼントなので、一家庭に 5 個ずつでは効果を得るのには少なすぎる。
・持ち帰っていただく容器は？あたりを見渡し、庭にあったマンゴーの葉に皆の目が集中した。長細い葉は 5 個並べるのに丁度良い大きさであったし、ゴミにならず一石二鳥であった。
・日中の暑い中、屋外での作業は疲れもするが、心地よい疲れであり、誰も体調を崩すこともなく終了した。

②帰国後の石鹸・ホウ酸団子の行方

2 ヵ月後にサンタローサ出張所の方にワークショップに参加された方々のその後の様子とホウ酸団子、石鹸のその後をうかがった。
・ワークショップには興味を持って集まってくるが、終わってから実際に作ろうという人はいないらしい。
・石鹸は、上手く固まり戸棚の中にしまってあったという話も聞いた。こんな所にも日本との違いを感じた。ゴキブリが減ったかどうかは持ち帰った少しの量では効果を確認することは難しい。
・環境・衛生教育の難しさを実感した。このワークショップが人々の心の片隅にでも残れば幸いである。

《ホウ酸》

ホウ酸（硼酸）は化学式 H_3BO_3 で表される化学物質。水溶液を目の洗浄などの消毒液や防腐剤。ホウ酸だんごの原料としてとしてゴキブリ駆除などに用いる。ホウ酸は細胞毒で、ゴキブリの表皮から浸透する接触作用と、経口的摂取による消化管内の共棲微生物殺菌および組織 SH 系酵素阻害作用により、ゴキブリは脱水症状を起こして死亡する。作用は遅効性で、効果が現れるのに 4～5 日程度かかるが確実である。

糖尿病予防セミナー

椋野　和子

はじめに

第８回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」のスケジュールには、文化交流、スポーツ交流のほかに、ひのきしん、おたすけの実際も含まれている。昨年の「フィリピンプロジェクト06」から帰国後、現地の人々のお役に立てることがないかを模索してきた。

十数年間この地で生活を共にされている天理教東本サンタローサ出張所の先生から、ここには糖尿病の治療を受けたくても受けられない人が多いということをお聞きした。まさに生きた情報であり事実である。

糖尿病は一生、治療や健康管理をしなければならない病気である。だからこそ予防が大切になってくる。そこで今回のプロジェクトでは糖尿病について健康指導教室を実施しようと計画した。

昨年のプロジェクト中に近藤雄二教授（体育学部・地文研兼任研究員）は現地の台所などの水質検査を行い、必ずしも清潔であるとはいえないという結果を得た。

世界の糖尿病事情

フィリピンの糖尿病事情を理解するために東南アジア、さらには世界の国々の糖尿病に関する情報を調べてみると、罹患者は世界的に増加しており 1985 年に 3,000 万人であった糖尿病人口は 2003 年には約 2 億人になり、2005 年には 3 億 3,000 万人に達した。中でも日本を含めた東南アジアでは、今後ますます増加すると見込まれている。その合併症に苦しむ人々も多い。医療体制が整備されていない地域が多く、糖尿病は失明、腎不全、足切断の原因となっている。IDF（国際糖尿病連合　糖尿病ネットワーク）は、糖尿病の予防と治療には啓蒙活動の必要性を強調している。また WHO（世界保健機構）も生活習慣病の予防対策に取り組まなければ、2015 年までに生活習慣病による死亡率は倍増するという声明を発表した。

このように糖尿病に対する警鐘と、フィリピンおけるサンタローサ出張所の先生からお聞きしたことは合致している。日本においてもあるいは世界でも、これだけ深刻な問題になっていることがわかった。

内容

厚生労働省ホームページの糖尿病指導の内容は、一般の人にもわかりやすくまとめられていたのでからダウンロードして用いることにした。

① 尿病とはどんな病気か
② 放置するとどうなるか
③ 糖尿病の治療について
④ 糖尿病を予防するには

のように、大きく４つに分類されている。

実際のセミナーでは語学が苦手な私にとって如何に伝えるかに最も苦慮した。フィリピンの公用語はタガログ語と英語である。協力を得ながら参加者が解決方法を探るということも「国際参加プロジェクト」の意図である。まず英訳を試みたが手も足も出ない。それならばと知り合いや周辺におられる英語の分かる友人、知人にお願いしてみたが、専門用

語が多く難行した。もちろん学内の学生や先生方は多忙極まりないのでお願いすら出来なかった。最終手段としてニューヨーク在住の親戚を頼り、メールで依頼した。快諾の返事があった。完成したのはなんと渡比2週間前のことであった。この2週間は、実は他の作業に追われていた。とにかくやらなければならないことが重なり、英文読みの練習すらできていなかった。そのわりに落ち着いていたことは、なぜか自分でも不思議だった。

フィリピンに向かう機中の4、5時間の練習で仕上げたつもりだったが、後で充分ではなかったことを思い知ることとなった。

セミナーは、サンタローサ出張所の月次祭の祭典後に行われた。多くの信者さん、出張所周辺の住民の方々、さよならパーティーに出席されるホストファミリーの方々、リコーダーを指導した小学校の先生方にもお出かけいただき、総勢120余名にお集まりいただいた。

フィリピンに着いてからは日々のスケジュールに追われ、練習の時間も取れなかったが、ひとりでも多くの方に糖尿病について理解していただくために現地の方に橋渡しをお願いした。ホストファミリーの信者さんでもある現地大学生に英語からタガログ語に訳していただいた。日本語のニュアンスを伝えるため、本番の進行は日本語で少しずつ読み進め、タガログ語に訳すようにして進めた。

手前みそながら聴衆の反応も良く盛況であった。このように糖尿病指導が成功裡であったのは天理教サンタローサ出張所の先生方や現地の方々のご協力の賜物である。まさに日本人とフィリピン人との協働の姿ではないだろうか。現地の方々にはスムーズに話の内容を理解していただいたものと考える。

今後の展開

今後の展開としては、罹患者の遺伝的要因や生活実態の聞き取り調査を行い、その結果を反映した指導を行いたいと考えている。サンタローサの人々の食事は日本人とは違い、野菜をあまり摂取しないし、どちらかといえば肉類が多い。フィリピン人が好む野菜料理のメニューづくりなども手軽な取り組みとして可能と思われる。

糖尿病に対する意識改革は、現地の人々の生活の理解なくしては難しい。病気になっても病院にかかることが出来ないという経済的事情は否めない。病気になれば治療費がかかるし、特に大人が働けなくなれば、子どもが家計を助けざるを得ず、教育や経済の発展にも影響を及ぼすことになる。このような悪循環に陥らないためにも病気の予防が大切なのである。

今回は時間的余裕がなく十分な準備もできなかったが、次回は今回足りなかった点などを掘り下げて、更に分かりやすく伝えることが出来ればと考えている。

～帰国後の活動～

織田小学校訪問(2008 年 1 月 9 日)

今回のプロジェクトでは、去年に続き桜井市立織田小学校の児童に描いてもらった絵をフィリピンの子ども達へ届けました。そしてまた、フィリピンの子ども達にも織田小学校の児童に向けて絵を描いていただいたので、その絵を織田小学校に届け、同プロジェクトのインドネシアのメンバーと共に、現地の様子や私達の活動についての簡単な発表を行いました。児童達は私達の発表を本当に真剣に聞いてくれて、その後の質問タイムでは時間内に答えられないほどたくさんの質問をもらいました。子ども達の活気、姿勢を見て本当に嬉しく思い、自分達の経験が少しでも人の役に立ったということに対して喜びでいっぱいでした。この訪問を通して、自分たちが行ってきた活動や経験をもっと様々な方に発信していかなくてはならないと実感しました。

織田小学校訪問後、児童からお手紙を頂き、その手紙からまた元気をもらいました。時間内に答え切れなかった質問に対しては後日、回答文と写真などを添えて小学校に贈らせていただきました。織田小学校の先生方、児童のみなさん、本当にありがとうございました。

パワーポイントを使用しての発表の様子

児童たちもお返しに歌を歌ってくれました

児童から頂いたたくさんの手紙

後日送らせていただいた質問への回答文と写真

天理小学校訪問(2009 年 2 月 7 日)

第 7 回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」の参加者と一緒に天理小学校を訪問しました。天理小学校の児童には「日比絵画交換」のために絵を描いてもらったので、児童の前で報告させていただきたかったのですが、3 学期の忙しい時期であったため校長先生にその御礼と活動の報告をしました。

報告させていただいた後、校長先生からねぎらいのお言葉をいただき、この活動に協力できたことをとても喜んでいただきました。シナルハン小学校の絵は、校内に展示していただけることになり、さらに学校通信にも掲載してくださいました。

シナルハン小学校の児童が描いた絵を、天理小学校の児童達が笑顔で見てくれていることを想像すると、本当に嬉しく、その仲介を担えたことがとても有難く思えました。

天理小学校の先生方、児童のみなさん、本当にありがとうございました。

有智からの発信
ーまことの信条教育を目指してー

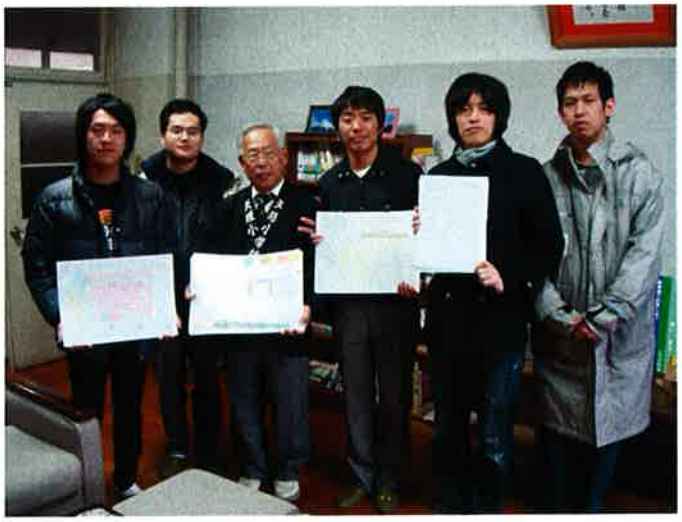
発行・天理小学校
立教171年（H20）
2月8日（金） №107
担当 校長・教頭 2年生担任

早く正確に届けるために＝郵便局の仕事・・・2年生の社会見学
2月6日（水）

2年生全員が、1回目の途中から、天理郵便局に出かけました。
最初に、手紙が届けられるまでの流れをビデオで見せていただきました。子どもたちの大好きなドラえもんが登場し、みな興味深く見ていました。
その後、一人ひとりが書いた手紙をポストに入れました。そのポストの中を見せていただいたり、消印を押される様子や、郵便番号によって配達地域別に仕分けされる様子をつぶさに見学しました。すごいスピードで郵便物が流れていました。
「早く、正確に郵便物を届けるよう、一生懸命仕事をしています！」というおじさんの言葉を聞き、「自分たちに出来ることはどのようなことか。郵便を出すときにはどのようなことに気をつけたらよいのか。」をこれから考えていきます。
この日出した葉書に、返事が来ることを子どもたちと共に待ちたいと思います。

インドネシアとフィリピンから絵が届きました・・・天理大学の国際交流
2月6日（水）

昨年の8月27日、天理大学の学生さんが、インドネシアの小学校で行う「防災教育」の事前研修を本校児童を相手に行いました。（№34参照） その際、本校児童の絵画を訪問先の小学校に届けたいとの申し出がありました。この度、それに対する返礼として、インドネシアとフィリッピンの小学生の絵が届けられました。参加された学生さんからメッセージが届いていますので紹介します。



左から１番目が河野君（フィリピン組）

天理小学校の学校通信

第4部

資料

Data

フィリピン共和国概要・・・・・・・107
発表会式次第・・・・・・・・・・・・108
寄贈物品一覧・・・・・・・・・・・・109
公衆衛生ワークショップ用チラシ・・110
よく使ったタガログ語集・・・・・・111
新聞記事など・・・・・・・・・・・・112
活動資料・・・・・・・・・・・・・・113
お礼状・・・・・・・・・・・・・・・114
歌（またあえる日まで）・・・・・・ 115
編集後記・・・・・・・・・・・・・・116

フィリピン共和国概要
(Republic of the Philippines)

独立年月日　：1946年7月4日
首　　都　：メトロ・マニラ
人　　口　：92,681,453人(2008年推計)
面　　積　：299,404km²
主　な　島　：ルソン島・ヴィサヤス諸島・ミンダナオ島などを中心に、大小合わせて7,109の島々から構成されている。
言　　語　：国語はフィリピノ(タガログ)語、公用語はフィリピノ語と英語であるが、母語として使われる言語は、合計172に及ぶ。第二言語として英語が使用されている。

国名・国旗の由来など

1542年に上陸したスペイン人が、スペイン皇太子フェリペ（後の国王フェリペ2世）にあやかり、「フェリペの島々」の意で、フィリピナスと命名したことによる。

1943年に国旗を制定。三角形内の太陽は自由の象徴で、8本の光は独立に立ち上がった8州を表し、3つの角にはそれぞれルソン、ビサヤ、ミンダナオの3地方を示す星を配する。青は真実・正義、赤は勇気・愛国、白は潔白・平和をそれぞれ表す。戦時の時には赤と青の配色が入れ替わる。

国銘は「神、国民、自然、国家の愛情のために」

歴史

1565年～1898年　スペイン植民地時代
1898年～1946年　米国植民地時代
　　この間の一時期、日本が統治
1946年　独立

宗教

フィリピンはアジア唯一のキリスト教国である。スペインが植民地支配をした時にローマ・カトリックを広めた。それ以前は、各島の自然の精霊などを信じる原始的な宗教があった。現在はフィリピンの人の83%の人がローマ・カトリック、9%がプロテスタントを信仰し、他にイスラム教が5%、仏教などが3%である。

社会と文化

フィリピン人は一般に親切で、恩や義理を重んじ、社交を大切にする。フィリピン文化は、その歴史を反映したいわばマラヤ、スペイン、アメリカ合衆国文化の混合ともいうべきものであるが、最近は民族的独自性が生まれつつある。貧富の差が激しく、職を求めて都市部に流入するものが多い。

日本との関係

1976年に日比賠償が終了し、両国は新しい関係の時代に入った。経済分野では日本は、米国と並んで大きな存在となっており、人的交流も盛んである。

発表会式次第

Farewell Mini Concert at Sinalhan Elementary School

1. Singing National Anthem of Philippine and Japan (10min.)

2. Address by representative of TENRI University (3min.)

3. Address by representative of elementary school (3min.)

4. Playing dance of the 'MATSUKEN SAMBA' by TENRI University (15min.)

5. Playing recorder by the elementary school students (20min.)

6. Playing recorder by TENRI University. (15min.)

7. Ending (5min.)

8. Presentation of 'Recorder Playing diploma' to the students (10min.)

9. Memorial photo session. (10min.)

寄贈物品一覧

～リコーダー～

ソプラノリコーダー　106 本
アルトリコーダー　　9 本

～文房具～

シャープペンシル	1,589 本	ノート	77 冊
鉛筆	990 本	消しゴム	123 個
黒ボールペン	156 本	筆箱	109 個
ボールペン(色つき)	83 本	下敷き	134 個
色ペン	154 本	定規	23 個
クレヨン(袋詰め)	279 袋		
クレヨン(箱入り)	41 個		
カラーペン(セット)	14 セット		
色鉛筆	18 セット		
数学セット	2 セット		
ハサミ	3 本		
鉛筆キャップ	47 個		
コンパス	5 個		
トランプ	5 個		

贈り物をしている様子です

皆さんのご協力により、多くのリコーダーや文房具が集まりました。ありがとうございました。いただいた物品は現地の小学校での活動で使用した後に、子ども達にプレゼントさせて頂きました。

公衆衛生ワークショップ

～家庭配布用チラシ～

Seminar on making soap by using waste oil and boric acid cookie for cockroach

We will hold a seminar for life improvements with easy methods. 50 persons will receive a soap and boric acid cookie with no charge on the first come & first service basis..

Please don't miss it ! No registration is necessary !!

Day : August 20 , 2007

Time: 9:00－11:00 a.m.

Venue : Mr. Eriberto Atienza's House, Ilaya, Brg. Sinalhan

Tenri University, Japan &
Tenrikyho Tohon Sta, Rosa Mission Station

☆よく使ったタガログ語集☆

～挨拶編～

おはよう：magandan umaga po（マガンダン ウマーガ ポ）

こんにちは：Magandan hapon po（マガンダン ハーポン ポ）

こんばんわ：Magandan gabi po（マガンダン ガビ ポ）

ありがとう：Salamat（サラマット）

ごめんください　Tao po（タオ ポ）

いってきます：Aalis na ako（アアリス ナ アコ）

バイバイ：Paalam（パアラン）

ただいま：Ang dito na ako（アン ジット ナ アコ）

おいしい：masarap（マサラップ）

私は～です：Ako ay si ～（アコ アイ シ）

お会いできてうれしいです：Ikinagagalak kong makilala kayo（イキナガーガラック コン マキラーラ カヨ）

また会う日まで：Hanggang sa muli（ハンガン サ ムリ）

日本から来ました：Taga Hapon po ako（タガ ハポン ポ アコ）

～リコーダー指導編～

静かに：Tumahimik（トゥマヒミック）

ゆっくり：Dahan! dahan!（ダァハン ダァハン）

いい感じ！：ayos（アヨース）

上手だね！：Magaling（マガリィン）

穴をふさいで：Takpan nyo ang butas（タクパ ニョ アン ブータス）

待って：Sandali lang（サンダリ ラン）

“～”の話を聞いて：Makining kayo kay “～”（マキニン カヨ カイ）

～その他～

～を買いたい：Gusto kong bumili ng ～（グスト コン ブミリ ナン）

これはいくらですか：magkano ito?（マグカーノ イット）

トライシクル：traysikel（トライシケル）

止めてください：para ho（パラ ホ）

お父さん：tatay（タタァイ）

お母さん：nanay（ナナァイ）

子ども：magabata（マ ガ バ タ）

美しい：maganda（マガンダ）

トイレ：C R（シーアール）

市場：palengke（パレンケ）

朝食用パン：pandesal（パンデサル）

アドボ（料理の名前）：adobo（アドボー）

バナナ：sagin（サギン）

ランブータン（果物の名前）：rambutan（ランブータン）

おかま（フィリピンには多い！）：bakla（バクラァ）

ジョリビー（有名なファストフードのお店）：Jolibee（ジョリビー）

乾杯！（万歳）：Mabuhay!（マブーハイ）

新聞記事など

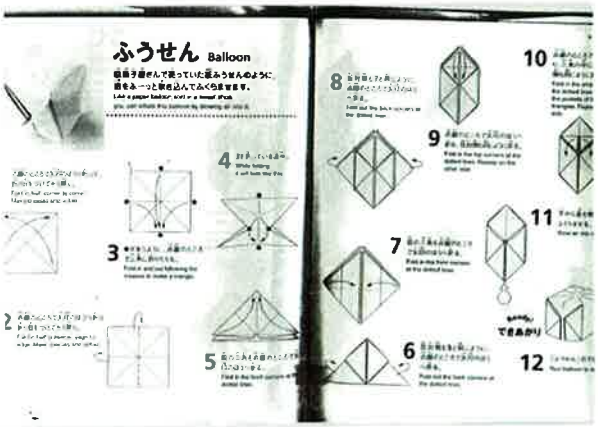
奈良新聞
2007年9月11日付

奈良新聞
2007年7月13日付

本学広報誌「はばたき」掲載

読売新聞
2008年7月3日付

活動資料



折り紙本（英訳付き）

Tenri University

in collaboration with

Tenrikyo Tohon Sta. Rosa Mission Station

presents this

Certificate of Appreciation

to

Sinalhan Elementary School

For your invaluable contribution to
the Exchange Program held at
Central II Elementary School,
Santa Rosa, Laguna, the Philippines.

Given this 21st -25th days of August 2007

Rev. Kazuoki Ueda
Tenrikyo Tohon Sta. Rosa
Mission Station

Taketo Hashimoto
President
Tenri University, Japan

Noriya Sumihara, Ph.D.
Director, ICRS
Tenri University, Japan

小学校に寄贈した賞状

小学生たちへの手作り修了証

お礼状

フィリピンで活動するにあたり、全国からリコーダーや文房具など多くの寄付を頂きました。

ご協力頂いた方々に活動中のフィリピンからと帰国後にお礼状を送りました。

みなさま、本当にありがとうございました。

フィリピンからのお礼状

帰国後に出したお礼状

また会える日まで

アドベンチャーキャンプの子供達/北川悠仁
作曲　北川悠仁
唄　　ゆず

1．青い空　白い雲　勇気をもって踏み出そう
aoisora siroikumo yuukiwomotte fumidasou
想い出すと笑いあえる　楽しい思い出
omoidasuto waraiaeru tanosiiomoide
大好きなみんなの笑顔が宝物
daisukinaminnano egaoga takaramono
強いきずなを　僕は忘れないよ…
tuyoikizunawo bokuwa wasurenaiyo…

☆　またあえる日まで　夢を忘れずに
mata aeruhimade yumewowasurezuni
変わらないままで　ずっといようよ
kawaranaimamade zutto iyooyo
またあえる日まで　夢を叶えよう
mata aeruhimade yumewokanaeyoo
信じることが　心をつなぐ
sinjirukotoga kokorowotunagu

2．自分を信じて　一歩進めば何かつかめるさ
jibunwo sinjite ipposusumeba nanikatukamerusa
少し夢を大きくして　君は一人じゃないから
sukosiyumewo ookikusite kimiwahitorijanaikara
一生に一度の宝物
isshouni ichidono takaramono
寂しいけれど　泪ふいて旅立とう…
samisiikeredo namidafuite tabidatoo

★　またあえる日まで　流れ星に願った
mata aeruhimade nagarebosininegatta
飾らない心で　ずっといようよ
kazaranaikokorode zuttoiyooyo
またあえる日まで　輝く星に誓うよ
mata aeruhimade kagayakuhoshini chikauyo
出逢えた事を　忘れはしない
deaetakotowo wasurewasinai
またあえる日まで…
mata aeruhimade…

編集後記

この報告書は作った者にしか分からない血と汗と涙の結晶であります。本当に長い時間がかかりましたが、その時間に見合うだけのものはできたと自負しております。

まず、大変だったことが、今までちょっと楽しみ程度だったパソコンさんに慣れる事でした。しかし、作業を進めていくうちに、どんどんパソコンの扱いに慣れていく自分に酔いしれたりしていました。また「こんな機能があったのか!?」なんて、パソコンに喋りかけたり、そんな技術の進歩に感銘を受けたり。

そして、メンバーみんなで協力して作業していた時は、あの熱かったプロジェクト中を彷彿させるぐらいに楽しかったです。誰一人として言葉を発さずに黙々と作業をしたり、作業のことを忘れてフィリピンの思い出話に花が咲いたりしました。このメンバーなくして、この報告書は完成しませんでした。第８回「国際参加プロジェクト（フィリピン)」は今日をもって幕を閉じます。しかし、この１年は私達に大きな何かを残してくれました。

私達がこうしてプロジェクトに参加し、この報告書に記したような素晴らしい経験をすることができたのも、本当に多くの人の支えがあってこそ出来たことであります。その感謝の気持ちとして、この報告書を読んで頂けたら幸いです。

参加者一同

本当にありがとうございました。

〈表紙の写真〉

Photograph by Miwa Mukuno

PHILIPY '07
第８回「国際参加プロジェクト（フィリピン）」報告書

発行	2008 年 10 月 1 日
監修・編集	澤山　利広
編集	佐藤　宮子・森　雄飛・久保　真百子
発行所	天理大学地域文化研究センター（ICRS）
	〒632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
	Tel/Fax　0743(63)9007
	e-mail：icrs@sta.tenri-u.ac.jp
印刷所	天理時報社